

KALEIDOSCOPE

学生の体験談集

第 33 号

追手門学院大学国際文化学会

カレイドスコープ目次

1. 授業関連	2
2. 留学体験記	77
3. 教育実習	89
4. 就職活動	114
5. 授業外活動	130
追手門学院大学国際文化学会会則	146
編集後記	148

1. 授業関連

国際教養学部・国際学部は、英語力を養いつつ、グローバルな視点で国内外の課題を理解し、解決策を探る人財を育成している。激動と不確実性の高いVUCAとよばれるこの時代に求められるのは、英語力を活かして自分は何ができるのかである。物事や情報を批判的に検討し、教養と知識を元に自分の考えや発想を持ち、それらを言語化して発信し、様々なバックグラウンドを持つ学生や教員と交流、議論しながら自分の視野を広げる、そのようなこの時代で生きていくために重要な力を英語と日本語両言語で鍛える授業を展開している。次頁から、学生の言葉による各授業の特徴と学びを紹介する。

Global SeminarとGlobal Studiesについて（西原先生）

国際学部国際学科 1 年

学籍番号 23WA045

氏名 藤原 百栄香

はじめに

Global SeminarとGlobal Studiesは国際学部の1年生が必ず受講する必修科目です。どちらの授業もアカデミックアドバイザーと呼ばれる西原先生が担当し、週2回開講されます。このレポートでは「Global Seminarの授業」、「Global Studiesの授業」、「授業を通して学んだこと」について記したものです。

Global Seminarの授業

Global Seminarは1と2に分かれており、春学期に受講する授業です。主な学習内容はプレゼンテーションの方法についてです。参考文献の探し方や問いの立て方、さらに学術的なプレゼンの方法を学びます。プレゼンテーションのテーマはSDGsに関するものやABlishから自分の興味のあるものを選択し、パワーポイントを使って発表します。最初はグループ発表を2回ほど行い、その後は個人で発表をします。調べたことをただ説明するような提示型ではなく、選択したテーマに沿った問いを立てて自分なりの導く論証型のプレゼンテーションができるように目指します。

Global Studiesの授業

Global StudiesもGlobal Seminarと同様に1と2に分かれており、秋学期に受講する授業です。主な学習内容は論文・レポートの書き方についてです。引用の仕方、参考文献の表記方法、論文の構成や表現など基礎的なことを学びます。最初はテキストの各章の内容に基づいた発表をグループで行います。論文・レポートの基礎知識を身につけてからレポートを書くことができます。レポートは興味関心のものについて問いを立て、先行研究を調べたり、分析・考察を行ったりして結論を出します。授業ごとに先生にレポートを見てもらい、表記の仕方に間違いがないかなどを確認してもらいます。800字程度のレポートから書き始めて、最終的に2000字程度のレポート作成を目指します。途中でレポートの内容をパワーポイントにしてお互いがどのようなことについてレポートを書いているのかを発表します。

授業を通して学んだこと

この2つの授業を通して常に何かに興味を持ったり、疑問に思ったりすることの大切さを学びました。提示されている情報をただ受け入れるだけでなく、そのことに興味や疑問を持ち、深く調べていくことで新たな発見をすることや知識を得ることができます。周りの意見や価値観を知ることは視野を広げることに繋がります。

また、文章を書いてまとめる力を身につけることができました。入学したころは授業の感想を書くことですら苦手だなと感じていました。しかし、授業を通してプレゼンテーションの方法やレポートの書き方を基礎から学んだことで、自分の調べたことの重要な部分を抜粋して相手に分かりやすく伝えようと意識するようになりました。

この授業で多くのことを学び少しは成長できたかなと思います。身につけた知識をこれからも活か

るようにしたいです。

おわりに

Global SeminarとGlobal Studiesの授業を受けることによって基礎的なことを学んだだけでなく、自身の意見を持ち伝えることの大切さを知りました。大変だと感じることも多いですが、その分自分のスキルを向上させることができます。この授業で学習したことは他の授業や社会に出てからも活用することができると思うので、この授業を受ける人は、積極的に取り組んでほしいと思います。

GLOBAL STUDIES 1C&2C (小松先生)

国際学部国際学科 1 年

学籍番号 23WA044

氏名 HINDUPUR SRINIVAS GAUTAM (హిందూపూర్ శ్రీనివాస్ గౌతమ్)

はじめに

Global Studies 1 & 2 Cは、春学期のGlobal Seminarの継続であり、特にレポートの作成が強調されている。この授業を通じて、学生はレポートを通して社会問題を具体的に学び、論理的な表現力を向上させることを目指す。

担当の小松先生はインドに関する研究経験を生かして、学生に研究論文の書き方や社会問題解決の思考方法を教え、それは学生にとって魅力的な機会となっている。豊富な研究・教育経験を持つ先生の助けを借りることは、その後の進路や目標を見つける上で、学生の意識を高めるのに役立つ。そして教室での課題活動は留学生と日本人学生にとって非常に役に立つ。

授業の流れ

授業では、レポート作成方法を学び、実際に三つのレポートを作成する。先生は、すぐに複雑なレポートを書くのではなく、段階的に魅力的なレポートを書くように教えてくれた。留学生として、レポートの執筆に慣れることができ、先生の指導により、自信を持ち、書き方を向上させることができた。Ablishの記事を参考にしてテーマを選び、リサーチクエスチョンを決定するが、自分の興味があるテーマに基づいてレポートを作成することは非常に楽しい経験だった。私にとって、日本だけでなく、インドの文化とのつながりを考察することは非常に豊かな学習経験となった。先生のインド経験とアドバイスは非常に有益だった。

また、グループごとに教科書の内容を発表し、レポートの作成方法を仲間に説明している。この新しいアプローチは、学習をより能動的で理解しやすくし、プレゼンテーションのスキルを向上させるのに役立った。また、個々のグループ内の結束力を高めるのにも寄与した。発表だけでなく、質疑応答を通じて対話的な発見ができるようになった。先生からのフィードバックも自己向上に寄与した。特に教科書の発表からリサーチクエスチョンの決定方法、専門用語と日常語の使い分けなどを学ぶことができた。一方的で単調な講義とは対照的に、教科書を取り上げるこの方法は、発表能力を向上させ、内容を迅速に理解するための素晴らしい機会だった。

レポート作成に関しては、三つのテーマに基づいたレポートを書くことが課された。良いリサーチクエスチョンを考えることは必要な活動だったが、条件を守りつつ効果的なリサーチクエスチョンを考えることは挑戦だった。その上、引用文献の書き方や、情報収集が将来に役立つ、例えば卒業論文などに備えるための重要なスキルとなる。また、盗作を防ぐように直接引用と間接引用についても学んだ。

「映画」、「食事」、「教育」という3つのテーマでレポートを作成したが、まず「映画」のテーマで私は、「日本における映画『RRR』の人気と日本化された作品」を取り上げた。インドの映画を基にして日本化とソフトパワーについて深く学ぶことができた。これにより、日本だけでなく自分自身の文化を理解する手助けとなった。次の「食事」のレポート作成では「食品のローカル化とグローカライゼーション」に関してローカル化とグローカライゼーションについて具体的に学ぶことができた。また、レポート作成だけでなくピア・レビューも行った。先生だけでなく、仲間からの評価とフィードバックを通じてミス

に気付くことができ、間違いを認識して改訂版を作成できるようになった。

他の活動

授業はレポート作成や発表だけにとどまらなかった。仲間や先輩の留学経験を聞くこともできた。カリフォルニア大学バークレーでの経験やオーストラリアのアデレード大学での体験談から、異文化交流について学んだ。留学する際の準備や、効果的な体験を得るための進め方について、経験者に直接にアドバイスを求めることができた。国際学部の学生にとって、異文化理解は非常に重要だ。こうした留学経験から得た知識を通じて、異文化理解の意識が高まった。このような機会を無視せずに利用することは、大事な取り組みだと思う。また1月にはインドの写真家によるワークショップが予定されている。社会的なテーマに焦点を当てたワークショップは、単なる授業以上に学びの機会となることが予想される。

おわりに

この授業は大学での学習に関して非常に有益だと思う。母国インドと日本では研究論文の書き方が異なっているので、非常に勉強になった。私は、社会的や文化的な話題に関する記述に興味がある。これまで日本語によるレポート作成は苦手だったが、この授業で段階的にレポート作成に取り組むことで自信がすごくついた。どのような問題が起こっても、先生はいつも私を支援してくれた。日本語に悩んだ時には、ヒンディー語と英語を使って解決することができた。先生のおかげで日本の文化を学ぶだけでなく、私は改めてインドを大切に思うようになった。様々なこと、つまり母国も愛でるようになることと寛容な支援などに関して、いつも小松先生に感謝している。

Global Seminar, Global Studiesの授業について

国際学部国際学科1年

学籍番号 23WA084 氏名 京田 莉恋

学籍番号 23WA091 氏名 森崎 楓菜

はじめに

Global Seminar, Global Studiesは国際学部1年次のそれぞれ春学期と秋学期に行われる必修の授業です。授業内ではプレゼンテーションと論文・レポートの基本について学び、実践します。主にテキストに書かれていることを基本として、プレゼンテーション・論文を作る際に行う際の注意点を知り、実際にプレゼンテーション・論文の作成に取り掛かります。以下、「足立勝先生の授業について」、「プレゼンテーションについて」、そして「論文・レポートについて」を記します。

足立勝先生の授業について

足立勝先生の授業は生徒主体となって授業が進められていきます。Global Seminar 1, 2では、ほとんどの時間がグループ活動でした。そのため、社会人になった時に必要となってくる要素のひとつである協調性を高めることができます。また、Global Studies 1, 2の授業では、個人の作業のほうが多いですが、グループごとに論文・レポートの書き方について学びます。足立先生の授業では、授業の最後に毎回ミニツッパを書きます。これを書くことによって、その日の授業で学んだことを振り返ることもでき、次の授業に活かすべき点について見直すことができます。

足立先生の授業を通して、来年度からの授業や社会人になった際に必要になってくる、プレゼンテーション能力や、論文・レポートを書く技術、コミュニケーション能力、協調性、を高めることができます。



クラス全員での集合写真

プレゼンテーションについて

春学期に開講されるGlobal Seminar 1, 2ではプレゼンテーションの基礎について学び、学んだことを生かしながらかグループに分かれて実際にプレゼンテーションを行います。プレゼンテーションとはそもそも何なのか、プレゼンテーションの作り方、プレゼンテーションを作る上で気をつけないといけないことなどについてテキストを使いながら学びます。そして、学んだことを生かしながらか、3人ずつのグループに分かれてグループごとにプレゼンテーションを作ります。提示された複数のAblish記事から記事を1つ選び、その内容に対して自分たちで問いをたて、その問いに対して参考文献を利用しながら、結論を考え、その内容についてプレゼンテーションを作ります。

第1回発表・中間発表・最終発表と、計3回の発表を行います。第1回発表と中間発表では他のグループからの質疑応答を行い、それぞれのプレゼンテーションの内容の修正に活かし、最終発表を行います。この授業を通して、プレゼンテーションだけでなく、発表の聞き方や物事の捉え方についても学ぶことができます。

論文・レポートについて

秋学期に開講されるGlobal Studies 1, 2ではレポートと論文の書き方について学び、それらを元に実際にレポート・論文を書きます。週2回あるうち、Global Studies 1でテキストを用いてレポートと論文の基礎について学びます。Global Studies 2では、Global Studies 1で得た知識を用いて、実際にレポート・論文の制作に取りかかります。

第1回の授業では、秋学期を通してひとつのテーマでレポート・論文を書くことを知ります。また、それらのテーマはSDGsと似たくくりであるESGであるため、ESGについても学びます。

Global Studiesでの提出物は、主に①Minute Paper ②RQシート ③文献レポートの3つです。Minute Paperは毎授業ごとに提出します。RQシートは文献レポートを書くために必要な設定資料を自分で作ったものです。文献レポートはRQシートを元に1000字程度で実際にテーマに沿って論文の形にしたものです。RQシートと文献レポートは秋学期間でそれぞれ合計3回提出します。また、提出して終わりではなく、より良い論文につなげるため、提出した次の週の授業でグループごとに発表を行います。

最終レポートでは、今まで学んできたことを活かして2000字程度の文字に起こします。どの課題も「前回提出したものよりもより良い」ことが求められるため、毎授業での意欲と積極的な参加が求められます。この授業では主にグループやペアになって取り組むため、分からないことがあればすぐに聞き、疑問点や不明点を解決することができます。

おわりに

このカレイドスコープを書くことで、この一年間足立先生のクラスで学んできたことを再確認することができました。この授業を通して、グループ活動や、プレゼンテーション、論文・レポートについて学んできました。これらは将来必要なものだと思うので、1年次から丁寧に学ぶことができてとても良かったと思います。この授業で学んだことを来年度からの授業で大いに役立てたいと思います。

Global Seminar 1・2、Global Studies 1・2（増崎先生）

国際学部国際学科 1 年

学籍番号 23WA019

氏名 山口 葵

はじめに

Global SeminarとGlobal Studiesは、1年次の春学期と秋学期に1年生全員が履修する必修科目になっています。内容を簡単に説明すると、春学期では主にプレゼンテーションの作成方法、発表を行う際に必須となるスキルを学び、それらを生かしてグループプレゼンを実践します。秋学期では論文やレポートの書き方や注意点について学び、レポートを作成します。以下「Global Seminar、Global Studiesについて」、「春学期の授業内容について」、「秋学期の授業内容について」、「これらの授業で学んだこと」について記します。

Global Seminar、Global Studiesについて

どちらの科目も指定されたテキストに沿って、毎回の授業が行われます。毎週、テキスト要約課題が求められます。それに対する先生のテキスト解説の後で、各回の授業内課題に取り組みます。授業内課題は、1人で取り組むというよりはグループのメンバーや周りの人たちと協力し合うことが多いので、その分、課題ができあがった時の達成感が大きいと同時に、新しい発見ができます。とても意味のある時間になります。

また、毎回の授業の最後には、①今日の授業の内容、②今日の授業で学んだこと、③今日の授業でうまくいったこと、うまくいかなかったこと、④質問等、を文章にまとめる「ミニツッペーパー」に取り組みます。その日の授業の振り返りの場になるので、授業の記憶が鮮明なうちに、より詳しく記入することが次の授業にもつながるためとても大事だと思います。

春学期の授業内容について

春学期のGlobal Seminarでは、主にプレゼンテーションの作成方法や発表の際に重要なことを学びました。また、最後にはこれまで授業で学んだことを踏まえて実際にプレゼンを行いました。4～5人のグループに分かれ、各グループで決めたテーマに沿って発表をします。私たちのグループは、「様々な国の主食の違い」というテーマでプレゼンを作成しました。初めてのプレゼンということもありとても緊張しました。しかし、準備段階の途中で中間発表があり、実際の発表の雰囲気を味わえるだけでなく、それを聞いているクラスメイトから意見やアドバイスが得られます。それを参考にして、試行錯誤を重ねて万全の状態で大舞台に臨むことができました。各グループで発表の内容が異なるので、発表するとき、聞き手に回るとき、それぞれにおいて違う学びがあり、とても有意義な時間になりました。

秋学期の授業について

秋学期のGlobal Studiesでは、主に論文・レポートの書き方や注意点について学び、実際にレポートの作成にも取り組みました。ABLishの記事の中から自分が興味のあるものを選び出し、グローバルと絡めた問いを立てます。立てた問いに対する具体例を見つけ出して、それを適切に用いて結論を導き出します。書き上げたレポートはクラス内で共有され、クラスメイト同士で評価し合います。評価する点は、①分かりやすさ、②論理的であるか、③独創性があるか、④レポートとしての形式が適切であるか

です。クラスメイトによる評価を見て、自分のレポートの改善すべき点やよかった点に気づくことができ、次のレポートを書く際につなげることができました。また、クラスメイトのレポートの良い点を真似したり、同じミスを自分もしないように意識したりと、参考になる部分がとても多かったです。

これらの授業で学んだこと

これらの授業を通して、単にプレゼンテーションと論文・レポートの作法について学ぶだけでなく、人に物事を伝えることの難しさを学びました。プレゼンと論文・レポートは「人に何かを伝える」という点で共通していると思います。何かを伝えるためには、自分の考えも入れなければいけないと思うので、自分の考えを持っておくことが重要だと気づきました。これらの授業は、自分が行ったプレゼンや作成したレポートを他の人から評価してもらえる絶好の機会だと思います。人に伝える上で自分に足りない部分やよかった部分を再認識することもでき、とても良い経験になりました。

おわりに

これらの授業では、大学生のうちだけでなく社会に出てからも必要とされるスキルの基本を学びます。プレゼンテーションをすることも、論文・レポートを書くことも初めてで最初は分からないことだらけだとは思いますが、回数を重ねて実践するうちにどんどん身に着いていくので安心してください。まずは、授業に毎時間出席し、毎回の授業で与えられる課題に真剣に丁寧に取り組むことから始めてみてください。

Global Seminar 1C&2C (小松先生)

国際学部 1 年

学籍番号 23WA031

氏名 Williams Christopher Yulianto

はじめに

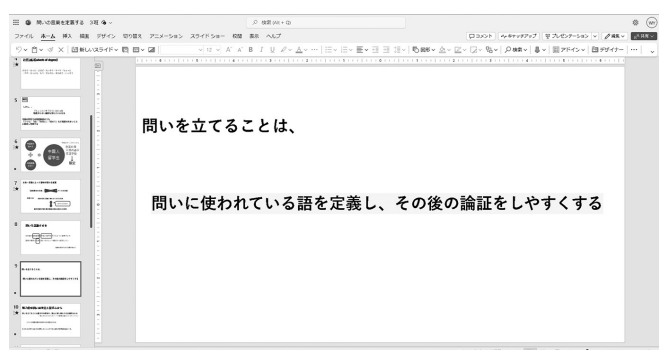
私は、大学は人とのつながりを築くだけでなく、将来に役立つ知識を得る場所でもあると信じている。私たちが受けるすべての授業で、新しいことを学び、より良い人間になる手助けがされる。そのために、非常に重要なコースがある。そのコースでは、通常のテーマだけでなく、世界で起きていることについても学ぶ。それが「グローバルセミナー」と呼ばれるコースである。

授業内容について

授業では、「プレゼンテーション入門」という本を使用しており、この本を通じてプレゼンテーションの方法を学んだ。私は初めのうち、「なぜプレゼンテーションのやり方を学ばなければならないのか?」と思っていた。中学校やそれ以前にすでに学んでいるからだ。しかし、その本を読み、授業を受けた結果、私は、母国語や英語で行うプレゼンテーションと、日本語で行うプレゼンテーションは異なることを知った。基本的な考え方は依然として同じ、「シンプルが最良」と「話すことが書くことよりも大切」だが、アウトラインが異なった。インドネシアでは「アップダウン図」と「ダウンアップ図」と呼ばれるものをほとんど使用しないが、ここではそれについて学び、プレゼンテーションで使用し始めた。

また、プレゼンテーション中は、プレゼンター（クラスメイト）が何を話しているのかに本当に集中する必要がある。なぜなら、各セッションの終わりに、各人がプレゼンされたトピックに関連する質問をしなければならないからだ。これは私たちに、より批判的に考え、質問をする方法を身につける機会を提供した。

このクラスでは、プレゼンテーションのやり方だけでなく、4人以上のグループで協力する方法も学んだ。私たち留学生は、ここでは少数派と呼ばれることがない。なぜなら、ほとんどの学生が日本人であり、彼らは比較のおとなしいタイプの人たちだ。このような状況では、グループで働くことが日本語で話す自信をつけるだけでなく、日本の学生たちともっと仲良くなる手助けになった。グループでの活動では、プレゼンテーション中に発生した技術的な問題や難しい質問など、お互いのミスを助け合うことも学んだ。同時に、原稿を作成する方法も学んだ。それをスライドにまとめるために、原稿から最も重要な部分を取り出し、フォント、サイズ、デザイン、アニメーションなど、どのようなものを使用するかについても学んだ。



私たちがクラスで作成し行ったプレゼンテーション

学期の後半になると、私たちは「Ablish」というウェブサイトからいくつかのテーマを与えられた。このウェブサイトでは、世界で何が起きているのかについて詳しく学ぶことができる。また、学期末のテストとして、与えられたテーマのうちグループが興味を持っているテーマに関するプレゼンテーションを作成する課題が与えられた。この課題では、「自動販売機」のテーマを選ぶ、私たちのグループは誰が最初の自動販売機を作ったかについて話し、その後、日本の自動販売機の利点について話した。また、日本と北米の自動販売機の数についても話した。

終わりに

このクラスを通じて、私は新しい知識を得るだけでなく、異なる文化背景を持つクラスメイトとの協力やコミュニケーションの重要性も理解した。特に留学生として、クラスメイトとの関わりが私の日本語スキル向上にも貢献した。プレゼンテーションのスキルやグループワークの経験は、将来の仕事やキャリアにおいても役立つものであると感じている。このクラスを通じて得たスキルや経験は、将来の職場での成功に向けて私をより準備させ、さらなる成長を促進してくれるものだ。感謝の気持ちを抱きながら、これからも新たな挑戦に向けて進んでいきたいと思っている。

問題解決スキルの向上と視野の拡大

Global Studies 3&4 (北村先生)

国際学部国際学科 2 年

学籍番号 22WA087

氏名 Batsaikhan Uchral

はじめに

このクラスは、主に世界の問題の原因とそれらの問題に対処する最良の方法に焦点を当てています。私たちにはさまざまな問題解決の手法があることを学ばせることを目的としています。授業では、世界の問題の根本的な原因に迫り、それらにどのように対処するかを探求することで、異なる問題解決の視点を理解することが期待されています。さらに、私たちが直面する課題に対処するための革新的で効果的な方法について学ぶことで、問題解決スキルを向上させることを目指しています。

春学期

春学期においては、先生が実施した楽しいアイスブレーキングアクティビティを通じて、同じクラスの学生との親睦を深め、最適なチームワークの構築に向けた指導を受けることができました。各授業において、進行状況や次回の授業でのタスクは明確かつ丁寧に案内され、課題やプロジェクトを見逃す心配はありませんでした。初日から、全学期の進行プランが詳細に紹介され、事前の準備が容易であるとともに、授業の進行がスムーズでした。また、テキストブックの素材を活用したグループプレゼンテーションでは、SDGsの目標、ジェンダー平等、多様性など、他者が問題解決にどのように取り組んでいるかに触れることができ、異なる課題が直面するさまざまな側面に理解を深めることができました。

授業はいつも活気にあふれ、先生が積極的に質問を投げかけることで、理解しきれない点がほとんどありませんでした。その結果、クラス全体が明るく、学習の雰囲気が良好でした。先生はグループプレゼンテーションの後には必ず質問やフィードバックを提供してくれ、これが私たちのスキル向上に大いに貢献しました。毎回のプレゼンテーションの後に得られる具体的な問いかけやアドバイスを通じて、私たちはより効果的に自己評価し、改善点を見つけることができました。このアプローチにより、クラス全体が協力的で学びの効果が最大限に引き出されたと言えます。

学期末には、レポートの作成があり、初回の提出物は先生からの追加のアドバイスを得るために使用されました。この段階での指導は、私たちがさらなる向上を図るための重要な手がかりとなりました。さらに、グループ内でのピアレビューと改善に向けたディスカッションも実施され、他のメンバーとアイデアを共有することで、レポート執筆における今後の成長につながりました。先生からのフィードバックとピアレビューは、将来のレポート執筆において不可欠な学びとなりました。最終提出の期限が初回提出から2週間後となっていたため、必要な修正や再執筆を行う十分な時間があり、より品質の高いレポート作成を追求することができました。

秋学期

秋学期のレポート課題は、SDGsから一つの目標を選び、その目標が直面している問題や、その解決に向けて立ち上がる様々な困難について詳細に論じ、さらに独自の解決策を提案することでした。この課題は幅広いスコープを持っており、各学生が異なるトピックに取り組むことが期待されていました。

私たちはSDGsが取り組むべき課題に切り込み、自分たちのアイデアや提案が持つポテンシャルについて自由に話し合いました。先生は創造的な発想を奨励し、クラス全体が独自の視点を共有する場となりました。このプロセスを通じて、SDGsに対する理解が深まり、私たちは異なるトピックに挑戦することで、持続可能な未来への貢献の手段を探索しました。

北村先生は常に新しいアイデアを奨励し、生徒たちが自らの限界を乗り越えるように積極的に促してくれました。特に、私がSDGsプレゼンコンテストに向けてプレゼンテーションを行った際、先生はその内容をクラスの前で披露するように私に提案してくださいました。初めは日本語でのプレゼンテーションに対して自信が乏しく、一抹の躊躇がありました。しかし、北村先生の力強い励ましと信頼感に支えられ、最終的には挑戦を受け入れることができました。クラス全体の前で発表するという経験は、初めは不安でしたが、結果的には非常に充実感に満ちたものとなりました。北村先生のサポートがなければ、自らの成長を試すこの機会を逃していたでしょう。今は本当に感謝しています。

終わりに

このコースは非常に興味深く、北村先生の指導とサポートのおかげで、問題解決スキルや自己表現の自信が向上し、SDGsに関する知識が拡充されました。異なる視点から課題にアプローチする柔軟性も育まれ、クラスメイトとの協力を通じてチームワークや意見交換のスキルが向上しました。特にプレゼンテーションやグループディスカッションは専門的かつ充実感のある瞬間でした。自己の限界に挑戦し、成長することがどれほど有益な経験であるかを強く感じました。このコースによって私は今まで以上に世界に対する興味関心、そして知識が増えたように感じています。今後もこの素晴らしい経験を活用して、更に成長を続けたいと思います。

Global Studies (石井竜馬)

国際学部国際学科 2 年

学籍番号 22wa053

氏名 藤尾 心音

はじめに

本稿では、追手門学院大学でのSDGs（持続可能な開発目標）に関する授業内容と、それを通じて得た学びについてまとめます。SDGsに関連する重要な要素や具体的な学習内容を取り上げ、持続可能な社会への貢献につながる知識と洞察を提供します。このレポートは以下の3つのトピックに焦点を当てています。

最初に、「SDGsの基本概念と追手門学院大学における取り組み」について探求します。次に、「SDGsを実践するための具体的な取り組みやプロジェクト」について詳細に述べます。最後に、「授業を通して得た洞察と将来への展望」に焦点を当て、個人レベルでの行動や社会への影響について考察します。各トピックでは、SDGsに関連した重要なテーマを掘り下げ、授業を通じて得た知識や経験を明らかにします。

SDGsの基本概念と国際的な重要性

SDGsは、2015年に国連加盟国全体が採択した17の目標であり、2030年までに世界の持続可能な発展を達成するための指針です。これらの目標は、貧困撲滅、飢餓の終結、健康増進、教育普及、ジェンダー平等、クリーンエネルギーへの移行など、地球上で抱えられている多くの課題に対処することを目指しています。

SDGsの基本概念は、包摂性と持続可能性に焦点を当てています。これらの目標は相互に結びつき合い、1つの目標の達成が他の目標の達成にも寄与することが強調されています。例えば、貧困の撲滅が教育や健康に関連しており、これらが経済成長やジェンダー平等にも影響を与えることが示されています。このような相互の関連性を理解することで、持続可能な社会を実現するための包括的なアプローチが求められています。

国際的に、SDGsは極めて重要です。これらの目標は、地球規模の課題に対処し、国境を超えた連携と協力が不可欠であることを示しています。例えば、気候変動や貧困は国境を越えて影響を与え、解決には国際的な取り組みが必要です。また、持続可能な開発は、経済、社会、環境の三つの側面を含んでおり、国際的な連携によってこれらの側面をバランス良く進めることが重要です。

さらに、SDGsは企業や市民社会、政府など様々なステークホルダーによる行動と連携が求められます。政府だけでなく、民間企業の社会的責任や市民の参加も必要です。SDGsは単なる国際的な取り組みだけでなく、地域や個人レベルでの実践も重要視しています。

総括すると、SDGsは国際的な課題に対処するための包括的な枠組みであり、持続可能な未来の実現に向けた国際的な協力と包摂的なアプローチの重要性を示しています。これらの目標の達成には、世界中の人々が協力し、持続可能な未来の実現に向けて積極的に行動することが求められます。

授業内でのSDGsの学び

追手門学院大学におけるSDGs（持続可能な開発目標）の取り組みや具体的なプロジェクトについて

学ぶ授業では、パソコンや教科書を活用してプレゼンテーションを行いました。このプロセスは、具体的な情報やデータを整理し、それを他の学生や教員と共有する重要な手段でした。

パソコンを使用して、追手門学院大学におけるSDGsの取り組みやプロジェクトに関するリサーチを行いました。オンラインリソースや教科書を活用して、大学全体でのSDGsへのアプローチや、特定のプロジェクトに関する情報を収集しました。この情報を基に、チームメンバーと協力してプレゼンテーションの準備を進めました。

プレゼンテーションでは、パソコンを使って収集した情報をまとめ、視覚的に分かりやすく表現しました。チャート、グラフ、画像などを活用して、SDGsに関するデータや事例をプレゼンテーションに盛り込みました。これにより、具体的な数字や事実を視覚的に示すことで、参加者に理解を深めてもらうことができました。

教科書も参考にしながら、授業で学んだ理論や概念をプレゼンテーションに取り入れました。学術的な視点からSDGsにアプローチするため、教科書や論文を参照し、信頼性のある情報を提供しました。これにより、SDGsに関する理論的な背景や実践的な側面をバランスよく伝えることができました。

パソコンや教科書を活用したプレゼンテーションを通じて、自分たちの研究成果や知識を伝えるスキルを向上させました。情報の整理やプレゼンテーションの準備、学んだ内容を明確に伝える能力が向上したことで、SDGsに関するプロジェクトをより効果的に表現し、他の学生や教員と共有することができました。

SDGsに関連して学んだスキルや知識について

授業を通じて学んだSDGsに関連したスキルや知識には、持続可能な解決策の探求や問題解決能力の向上が挙げられます。SDGsは多様な課題に対処するための枠組みであり、その実現に向けては様々なスキルが求められます。

具体的には、問題解決能力や創造性が重要です。SDGsは複雑で様々な側面からアプローチする必要があります。授業では、現実の課題に対して創造的な解決策を考える演習やケーススタディを通じて、新たな視点やアイデアを養う機会がありました。また、チームでの協力やコラボレーションもSDGsを実現するための重要なスキルです。他者と協力し合いながら、共通の目標に向かって取り組むことで、協調性やリーダーシップの向上も体感しました。

さらに、持続可能なイノベーションや技術の活用も重要です。技術の進歩や革新がSDGs達成に不可欠であり、授業では技術を活用した解決策やイノベーションの可能性について学びました。これらのスキルや知識は、SDGsの理解を深めるだけでなく、将来のキャリアや社会貢献にも活かせると感じています。

今後は、学んだスキルや知識を活用し、SDGsの実現に向けて積極的に貢献したいと考えています。持続可能な社会を実現するために、自らの能力を最大限に活かしていくことが大切だと感じています。

おわりに

授業を通じてSDGsに関する学びを深める中で、個人的な洞察と持続可能な行動への展望が明確になりました。

まず、SDGsについて学ぶ中で、世界中で直面している課題に改めて目を向ける機会を得ました。貧困、格差、環境問題など、多岐にわたる課題がSDGsの核となる目標として提示されていますが、これらの問題は私たちの日常生活にも深く関わっています。授業を通じて、これらの課題は個々の行動や選択によっても影響を受けることを理解しました。例えば、消費行動やエネルギーの使用方法、リサイクル

ルの取り組みなどが持続可能な社会に与える影響を考えることが重要だと感じました。

また、単なる知識だけでなく、行動を起こすことの重要性も強く認識しました。SDGsは個々の行動や取り組みが集まって初めて実現可能な目標になるということを理解しました。例えば、自分自身ができる小さな行動から始めて、周囲の人々やコミュニティと協力して大きな変化を起こすことができるという点に希望を感じました。

今後の展望として、持続可能な行動をより積極的に取り入れていきたいと考えています。日常生活での行動や意思決定において、環境への配慮や社会貢献を意識した選択を積極的に行うことが大切だと感じています。また、学んだ知識や洞察を実践に移し、地域社会や学校内での取り組みに積極的に参加し、SDGsに貢献することが目標です。

このような行動を通じて、少しずつですが大きな変化を起こし、持続可能な未来を実現するための一助になれることを願っています。持続可能な行動を取り入れることで、自らの影響力を発揮し、より良い社会を築くための一員として貢献していきたいと強く感じています。

Global Studies3&4（平井先生）

国際学部国際学科 2 年

学籍番号 22wa089

氏名 山本 果奈

はじめに

Global Studies 3 と Global Studies 4 は国際学部の学生が 2 年生の春学期および秋学期に履修を行う必須科目です。そして、このレポートは「Global Studies の授業について」、「Global Studies で身に付く力」、「Global Studies を学習した感想」について記したものです。

Global Studies 3 の授業について

Global Studies 3 は春学期に履修する授業です。この授業では、「グローバル化時代の文化・社会を学ぶ」（長友淳 編）のテキストを使用します。このテキストを章ごとに要約し、グループでプレゼンテーションを行います。章ごとに分割して発表することでテキストをただ読むよりも内容を深く理解することができます。テキストのグループプレゼンテーションが終了したら、個人で多文化共生に関わる課題解決型レポートを 2000 文字程度で作成します。そして、そのレポートを仲間とピアレビューし、よりよいレポートに仕上げます。また、レポートを書く上で重要な適切な引用方法についても学ぶことができます。この授業の序盤では追手門大学安威キャンパスの図書館ツアーを行い、レポートを書くにあたって利用する可能性のある図書館の利用方法も学びます。普段は入ることのできない地下倉庫なども見学することができ、貴重な経験になります。

Global Studies 4 の授業について

Global Studies 4 は秋学期に履修する授業です。授業の流れは春学期と大きな違いはありません。この授業では「SDGs 思考 社会共創編 価値転換のその先へプラスサム資本主義を目指す世界」（田瀬和夫、SDG パートナース 著）のテキストを使用します。このテキストを章ごとにまとめてプレゼンテーションし、なぜ SDGs を達成する必要があるのかを学びます。また、レポートでは SDGs に関連する問いを設定し、その対処、解決に向けて社会がどう変わる必要があるのか、今の私たちにできることを考察します。また、Global Studies 3, 4 の授業には 2 つ共通する課題があります。1 つ目は ABlish の記事に対しての自分の意見をまとめたものを提出する課題です。ABlish は英語で書かれた記事ですが、和訳もあるので自分のレベルに合わせて毎日時事問題に触れる習慣がつきます。2 つ目はミニツッパーパーです。毎授業の終わりに学習した内容や感じたことをまとめて提出します。学んだことを言葉で残しておくことで見返すことができます。

授業を通して学んだこと

この 2 つの授業を通して意見を交換することの大切さを学びました。この授業ではよく他の人と意見を交換する機会があり、レポートの進捗状況のピアレビューや最近のニュース、就職活動についてなど授業に直接関係しないようなことでも授業内で意見交流することで他の意見を知ることができるとともに自分の意見を言語化する練習にもなります。特にレポートのピアレビューは先生に提出する前にクラスみんなで見せあうことで、よりよいレポートになるようにアドバイスをもらうことができるのでと

でも有意義な時間を過ごすことができたと感じています。また、協調性の大切さも学びました。プレゼンテーションはグループで行うので、役割分担はもちろん、困っている人がいたらその問題を一緒に考えたり、時には授業外でも連絡を取り合って準備を進めたりする必要があり、1人でプレゼンテーションを行うよりも大変なことがいくつかありますが、その分協力して無事本番を迎えることができればより達成感を味わうことができます。

おわりに

この2つの授業を受ける前までは授業を受け身で参加することが多かったですが、この授業を受けて積極的に授業に参加することができるようになったと考えています。この授業でこれからも必要なスキルをたくさん身に付けることができたので、残りの大学生活も学んだことを活かして何事も主体的に取り組んでいきたいです。

Research Project 1E（原先生）

国際教養学部国際教養学科 3 年

学籍番号 21cc175

氏名 足立 千紘

はじめに

私は短期大学を卒業し、指定校推薦をもらい三年次編入で追手門学院大学国際教養学部に入りました。今回は、Research Projectの授業内容と自分が編入して経験したことを書いてみようと思います。特に、編入学で入学してきた後輩の参考になれば幸いです。

編入学に至るまで

私は、十二年間陸上競技をしていました。小さなころから陸上競技を始めて、スポーツ推薦で高校に入学しました。高校二年の修学旅行で、台湾に訪れた際に空港で英語を話しているグランドスタッフを見て、かっこよく思い将来グランドスタッフになりたいと思うようになりました。ここから英語に興味を持ち、国際関係の短期大学部に入学しました。しかし、授業を受ける中で学習の幅が広がり国際文化について興味を持つようになりました。大学で学びを深めたいと思い編入学を決めました。実際、編入するにあたり、とても苦労しました。当時、コロナ渦で対面授業がなく指定校推薦枠を取り、大学生活を続けたい人が多くいました。指定校推薦枠を取るためには、日々テストの高得点を継続して取る必要があったので毎日予習復習を行ってきました。しかし、自分の高校のスポーツ科は英語表現の授業が無いので、入学当初から周りとは大きな差がありました。みんなが分かる文法・単語が自分にはわからず何度もやめたいと思いました。今思えば学生生活で一番勉強したと思います。その結果、わからないところはわかるまで編入仲間と教え合い、自分に合ったやり方を見つけることで上がっていく点数が自信につながり、無事指定校推薦枠を取ることが出来ました。そして、この追手門学院大学国際教養学部に入學してきました。

春学期の始まり

特に印象に残っているゼミについて話します。短大では、ゼミのようなみんなで集まって活動するような授業がなく不安でした。知り合いがいない大学で、人見知りがひどく、大学三年生にもなっていると交友関係も広がっていて、孤立してしまうと考えていました。ゼミの初回授業に、緊張して教室に入ったのを覚えています。授業が始まり、自己紹介や今後の授業内容で初回授業は終わりました。授業後、近くの子が「わからないことがあったら連絡して」と声をかけてくれました。大学で初めて声を掛けられ、友達ができ嬉しかったのを今でも覚えています。わからないことがあるたびにお世話になって、学校生活にも慣れていきました。授業外で出会ったときに、声をかけてくれたり手を振ってくれることで、学校に自分も馴染めているような気がして学校に行くのが楽しくなりました。今では、ゼミ終わりにご飯に行ったり、夏休みにはバーベキューに行くほどの仲になりました。短大時代の先生や友達にも自慢できるほど周りに恵まれ「他大学に行っても楽しそうでよかった」そういつてもらえます。

初めてのボランティア

人生で初めて、門真市のボランティアに参加しました。門真市のボランティアとは、門真市教育委員

会主催の「めざせ世界へはばたけ事業」に追手門学院大学が協力している英語教育の活動のことです。授業の一環として参加できるチャンスがあり、参加しました。短大では、コロナ渦を理由に新しいことに挑戦する機会が少なく、この新しい環境を利用し挑戦したいと思っていました。初めてのボランティア参加でアクティビティリーダーをやりました。内容は、プロジェクトのアイスブレイクとなる活動を留学生や門真市の中学生向けに考えました。春学期の授業を使い、5つのグループに分かれ、中学生と留学生が楽しんでもらえるゲームの提案をしました。その中から、中学生に合わせたルール変更や英語能力に差を感じることなく楽しめるかを考えた結果、「英語版 なんじゃもんじゃ」と「爆弾ゲーム」に決まりました。自分が担当したゲームは、「英語版 なんじゃもんじゃ」でした。実際にゲームを大学生で行い、出た意見の改善点から解決策を立てるのが一番大変でした。しかし本番では、無事に楽しんでもらい成功に終わりました。この経験を通して、勇気を出してアクティビティリーダーに挑戦してよかったと思いました。中学生の英語の助けができたのはもちろん、新しく考えたゲームで中学生・留学生・大学生の距離感が縮まり楽しんでもらえたことがなにより嬉しかったです。他にも、新しい環境で挑戦することで自分自身も成長できました。

おわりに

編入学は、入ってから大変と言いますが対してそんなこともないと思います。入学する前には、友達もできず孤立してしまうと考えていましたが、周りに「入学してよかったね」と言ってもらえるほど楽しい学生生活を送っています。周りの環境もありますが、挑戦をすることで友達も増え、自分の成長にもつながりました。もし、挑戦してみようかなと迷っているならぜひ挑戦してみるべきです。自分はあと一年の大学生活悔いなく楽しみます。最後まで読んでくださったあなたの学生生活が楽しかったと言えるものになりますように。そして、一人でも多くの人がボランティア参加につながるきっかけになることを願っています。

Research Project 1・2 I（藤川武海ゼミ）

国際教養学部国際教養学科 3 年

学籍番号 21cc097

氏名 橋本 壮太郎

はじめに

本稿では、藤川武海先生が担当されたResearch Project 1・2Iの授業の様子と概要を記しています。第1節では春学期と秋学期を通してのResearch Projectの授業について、第2節では授業を通して学んだことについてお伝えします。

Research Projectの授業では、文章の書き方に加え、新聞の記事を題材に調べてまとめたものを全員に対して発表しあいました。以下ではその内容を詳しく紹介します。

春学期の授業について

春学期のResearch Projectでは、毎授業の最初にABlishの記事を読んで感想、意見、アイデア、提案、疑問等を考えました。先程あげた通り、新聞記事について基本2人1組で記事の内容について調べ、発表するのが授業の主な流れで、一つの出来事に対して2グループに分けて違った視点の記事を取り扱うので偏った情報に流されることも少ないと思います。

授業では安倍元首相襲撃事件とロシアとウクライナの戦争について取り扱いました。複数の新聞の記事を扱い、例えば、朝日新聞の記事や論調に対して産経新聞が意見をするという構図について議論しました。安倍元首相の事件では朝日新聞が容疑者の境遇を書き、悪いのは国や政治だと主張した記事を出すと、産経新聞は「安倍氏という、銃によって突如命を奪われた一人の人間に対する哀悼や憐憫は一片も見いだせない」と批判した」という一連についてグループが概要と意見をまとめて発表しました。

秋学期の授業について

秋学期の授業では、春学期と同じく新聞記事についての発表、意見もありつつ、他のゼミとの合同授業で外部からの方のお話を聞くことが4回ありました。実際にビジネスの現場で働いている方やオーストラリアの文学の研究をしている方などからリアルな話を聞ける素晴らしい機会でした。

授業を通して学んだこと

Research Projectを通して、普段テレビニュースやネット記事を見ない、見ているだけの自分が発表するために調べたり、他の発表を聞いたりすることで、客観的に何が問題で、なぜ議論されて、なぜ批判されているかを考えることが出来、これからを考えるきっかけにもなりました。また、「正解と不正解」や「正や悪」のないような議論、問題に自分自身の考えも持てるようになったと思います。

外部の方の講義からは、まだ社会をほとんど知らない私たちに企業のリアルな現状や成功体験、失敗体験を知ることが出来ました。また、自分になにが足りていないかなどの課題や自分が気付かないような強みにも気付けることが出来ました。

おわりに

今回は1年を通しての概要を主にまとめました。3年生になると通年になるので、1年間同じ生徒・

先生で行われます。3回生になると今まで気にもしていなかった就活の話が嫌でも耳にチラつき、授業も英語や教養からSDGsや政治・経済などの社会問題について自分の考えを表現することが求められます。自分のやりたいことが決まっていなくても、難しいことに興味がなくても無理して学び続けなくてもいいと思いますが、授業を通して考えていたり知らなかったことを知ったりして、何もなかった選択肢が少しでも見つかるといいなと思います。

Research Project 1A・2A（足立先生）

国際教養学部国際教養学科3年

学籍番号 21cc110 氏名 乾 まや

学籍番号 21cc102 氏名 吉田 真都

はじめに

本稿は、国際教養学部国際教養学科の3年生の必修科目である「Research Project 1・2」の授業について紹介します。

足立先生が担当する「Research Project 1A・2A」の授業では、自分たちのチームで研究することについての「問い」と「仮説」を立て、研究計画発表、中間発表、研究成果発表の合計3回のプレゼンテーションを行い、それぞれの発表で得たフィードバックを受け研究レポートを作成します。

春学期の授業について

春学期の授業では、三人または二人のグループに分かれ、自分たちの興味関心のあるテーマを設定しそのことに関する「問い」と「仮説」を設定します。レポートを作るためのテーマとはどのようなものか、「問い」の立て方はどのようにすべきかなどを学んでから実際にテーマと「問い」を設定します。そして、レポート作成のための参考文献やデータの探し方や読み方、探していく中で注意することを学んだのちに参考文献やデータを探し分析をします。プレゼンテーションが研究計画発表、中間発表、研究成果発表の合計3回あるので、それぞれパワーポイントを用いてテーマ、「問い」、「仮説」、仮説の論証をスライドにまとめて発表します。プレゼンテーションの際に質疑応答の時間が設けられているため、先生や他のグループの人からフィードバックや質問を受け、次のプレゼンテーションや研究レポートに活用していきます。他のグループの発表を聞いて質問や改善点を考えることによって、自分たちの論証を見返したり比較したりすることができるため、次回からの発表や研究レポートに活用することができます。そして、研究レポートを作成します。

秋学期の授業について

秋学期の授業では、三人または二人のグループに分かれ、足立先生の専門分野である知的財産に関する裁判例を取り上げます。取り上げる裁判例は、足立先生が提示してくださった9つの知的財産に関する裁判例の中から各グループで話し合いを行い、取り上げる一つの裁判例を決めます。各々取り上げた裁判例の判決文を読み、それに関する「問い」と「仮説」を設定し、仮説を論証するために学説や類似裁判例などを探します。そして、春学期と同様に、研究計画発表、中間発表、研究成果発表の合計3回のプレゼンテーションを行い、先生や他のグループから得たフィードバックや改善点を活用しながら研究レポートを作成します。春学期のときとは違い、あまり身近なこととして考えてこなかった知的財産について研究すること、また、今まで読んでことが無い裁判の判決文を読むことは、この授業だからこそのことだと感じました。

授業を通して学んだこと

この授業を通して、どのように自ら物事の問題点を発見し「問い」と「仮説」を設定して研究すればよいのかを学ぶことができました。この授業を受講するまで本格的に研究レポート作成したことがな

かったためわからない点が多かったのですが、この授業を通して、「問い」はどのように設定すればよいか、「仮説」を論証するためにはどのように参考文献やデータを集めたらよいか、レポートを作成するときに参考文献やデータどのように引用しなければならないのか、などを学ぶことができました。特に、インターネットでの参考文献やデータの収集方法はきちんと参考として用いてもよい情報であるかどうかを見極めることが重要であると感じました。これらは卒業論文を書くときはもちろん、今後社会人になった際も役立つと思います。

おわりに

この授業を通して、研究レポートを作成するうえで必要なことを学ぶことができ、また、実際に裁判の判決文を読むことができたことは新鮮でした。自分が興味を持っていることについて深掘して「問い」と「仮説」を設定し論証していくことで、その分野について詳しくなることができ、そして他のグループの発表を聞くことで知らなかったことも学ぶことができました。また、秋学期の授業では、裁判の判決文を読むこともできました。全く新しいことを経験する機会というものはこれから減っていくと思います。そのなかで、判決文のなかで難しい言葉がでたら調べて、理解することが難しい文章は時間をかけて読むという国際教養学部に入っているとなかなか経験できないことを経験ができてよかったです。

Research project 1&2C (小松先生)

国際教養学部国際教養学科 3 年

学籍番号 21cc014

氏名 泉 慶祐

はじめに

慈悲あまねく慈悲ふかき主の御名において

本稿では小松先生（彼女に平安あれ）が担当しているResearch Project 1 & 2 の概要を説明します。本授業は主に先生の専門であるインドを通して実際に研究テーマを考え、レポートの執筆を行っていきます。またどんどん世界に影響力を広げ、米中に勝るとも劣らないながらも、独自の多様性を持つインドを知ること、世界を見る目も養われていきます。本授業を受ければ、遠く未知の国であるインドが、とても身近な場所でありながら別世界の国であるインドへと変わっていくでしょう。

学んだこと・春学期編

春学期では、まずインドがどのような場所かを理解するために、インドの時事ネタや州の情報、問題について調べて、プレゼンテーションを行っていきます。時事ネタを調べ、それらの事件がどこで、誰によって行われたかを知ること、州の特徴や多様性に溢れるインド人の気質が分かっていきます。プレゼンテーションでは実際に各州や、そこで起こる問題を調べて発表していきます。誰かのプレゼンが終わると質問タイムがあり、プレゼンにない情報の共有や改善点が提示されフィードバックが入ります。レポートでは実際にRQを設定し、インド独自のカースト問題に関するレポートを執筆します。単に先生が採点するだけでなく、周りの人と共有しお互いに添削をします。なかなか恥ずかしいですが、これによりレポートに多くの客観的な目線を入れることができます。

学んだこと・秋学期編

秋学期でも、変わらずプレゼンの発表やレポートを書いていきますが、さらに各自の研究テーマにも踏み込みます。クラス内でテーマを発表し、きちんとRQを設定しているか、データ収集は可能か、テーマが矮小あるいは巨大すぎないか、フィードバックを受けていきます。また4年次に行う卒業研究の流れを知るために、4年生との合同発表会も行います。この発表会は、自分の趣味と合わせる人、就活と関連付ける人など、まだまだテーマが定まっていない3年生にとって、展望を示す灯台のように思えます。また発表後の質疑応答によって、4年生にとっても同学年以外の意見が入り研究の完成度を高めることができます。

ちなみに私の研究テーマは「現代インドにおけるイスラーム神秘主義の影響は何か？」です（2023年12月時点）。ただ思想を扱うため内容が高度になりやすく、データの収集含め、いかに内容を詰めていくかが今後の課題となっています。また研究では専門用語を多用したくなりますが、ただの自己満足ですのできちんと解説をつけましょう。

授業を通して

本授業は、インドという巨大かつあらゆるテーマを持つ国を通して、プレゼンやレポートを作ることができます。良くも悪くも、インドは様々な問題を抱えており、研究材料として最良の国の一つでしょう。

う。授業では何度もプレゼンを行い、何度もレポートを書きます。最初はRQや見知らぬ国の内容に戸惑うと思います、しかし文化や問題、映画コンテンツ等を通してかの国を深く知り、レポートやプレゼンテーションを作っていく内に、段々と知識や思考が洗練されていきます。

またインドを調べる内に、現地で生きる人々から多くのことが学べます。日本にはない強烈な格差の中でもたくましく生きる姿勢や、逆に何事にもルーズで楽観的な性格など、未来が不安な今だからこそ見習いたくはないでしょうか。

おわりに

私事ながら、一年生から書きたいと望んできたカレイドスコープにようやく原稿を書くことができ、感無量です。とはいえ、留学や何かを成したわけでもなく、クラス長だからというのは少し残念ではあります。今後はもっと主体的な行動の結果として本原稿を書きたいところです。

本稿を書くにあたって、ほとんど悩む点はありませんでした。というのもインドを軸にした小松先生の授業は分かりやすい上、面白かったので振り返っても覚えていることが沢山あったからです。ただ深くは語りませんが個人的にインドへ深い愛憎があるので、書いていて内心穏やかでいられませんでした（特に今は政治の影響で）。とはいえ今後研究を進めていく上できちんとインドと向き合えるよう、神に祈って筆を置かせていただきます。

Research Project 20（担当教員 平井先生）

国際教養学部国際経学科 4 年

学籍番号 21cc128

氏名 松井 風羽太

はじめに

Research Projectの授業では、各自自分が取り上げるテーマを決め、それについて調べ、文献を読み、発表をしていくことで論文作成のスキルを身に付けていくことができる授業です。本稿では、私がそのResearch Projectの授業で何をしてきたか、何を感じたかについて記していきます。まず、「春学期のResearch Projectの授業」について、次に「秋学期のResearch Projectの授業」について、最後に「Research Projectの授業の発表」について、記していきます。

春学期のResearch Projectの授業について

Research Projectの授業では、各自自分が興味関心のあるテーマを決めてそのテーマについての論文を作成する、と記しましたが、春学期から3年になり論文を作成したことがなかった私は最初のうちは「本当に論文なんて作れるのだろうか」、と不安で仕方なかったことをよく覚えています。そこで、平井先生が実施される春学期の前半の授業では、論文の作成における基本的な要綱について述べられている教科書の内容をまとめたパワーポイントを作成することになりました。このパワーポイントのおかげで論文を作成する基本的な知識を得られることができ、本格的に論文作成に着手することができました。

論文を作成していく中で、重要だと感じたものは「調べたいものを調べるためにはどのようにするか」と「正しい文章を書き、読み手に伝わりやすくするにはどうすればいいか」という事でした。内容の質を高めるためにたくさんの文献や論文を拝見することはもちろん、自分のしたい事、調べたいことを明確に決め、それを調べることは想像以上に難しいことを学びました。そして情報収取をしてそれを如何にして文章にするか、という事も大変であり、重要なことだったと感じました。読みづらい文章では伝えたいことも伝わらないので、読みやすい文章を書くことを心がけました。こういったスキルは社会に出てからも活かすことができると考えるので、とても大切なことを学ぶことができたと感じています。

秋学期のResearch Projectの授業について

秋学期からのResearch Projectの授業では、春学期と同じように自分の興味関心のあるテーマを決め、論文の作成を行いました。春学期と違った明確な差は、テーマを決めてから論文作成に移り内容を書くまでの速さだと感じました。春学期に基本的なことを教えていただいたことが秋学期にも活かされていたこともあり、首尾よく論文の作成ができるなかで、内容もより深く、それでいて質の高いといえるような論文が書けるようになったと感じました。これは私だけではなく、同じ平井先生のResearch Projectの授業を受けている人皆が実感していたことだったと思います。最終論文発表を終えた時には特にそれが実感できました。一年を通して、学びを継続して行うことは必ず力になり、最初はできるかわからなかったことでもしっかりとやり遂げることができるという事を、この一年間で学べたと感じます。

Research Projectの中での発表について

Research Projectの授業では自分が調べた文献や資料、図の発表、それらを総括し途中まで書き上げた論文を発表する中間発表、そして出来上がった論文を発表する最終発表と、かなり高頻度で発表がありました。これらの発表には、その時点での論文のアドバイスを教室の皆と平井先生からいただける事、自分のしたい事や調べたいことを共有することで第三者からの視点で論文の発展ができること、発表をしなければならないので自然と論文が書き進めることができること、という三つの大きな意味があったと感じています。

論文を書くことは孤独との闘いだと言っていた平井先生は仰っていて、そういった意味でも誰かと意見を共有できる場やアドバイスを頂ける場というものは論文作成においてとても大切であると感じました。

おわりに

Research Projectの授業を通じて私は、論文作成の手法だけでなく、文章の正しい書き方、発表のより良い仕方、質の高い情報を得るための調べ方など、たくさんのことを学ぶことができたと感じています。本稿では私が得た学びについて記しましたが、この学びを活かして四年生や社会人でも頑張っていきたいと思います。

Research Project 2N（石井竜馬先生）

国際教養学部国際教養学科 3 年

学籍番号 21CC001

氏名 佐々木 愛梨

はじめに

本レポートでは、私のResearch Project（石井ゼミ）の学びの体験について述べたいと思います。トピックとしては「春学期の授業について」「秋学期の授業について」「年間の授業を通して学んだこと」についての3つです。

トピック 1

まず初めに、「春学期の授業について」です。春学期は主に論文・レポートの基本という本を読みこみ、分けられたグループごとに分担された領域のプレゼン資料を作り上げて最終授業で発表する。というものでした。グループワークでは、個々に意見を出し合い、協調性が求められる場でありました。今まで話したことのない人や、関われなかった人とも話す機会が増え、友達もたくさん出来ました。

石井ゼミでは「自主性」が大切にされ、個々のペースに合わせた授業ペースで行われたので、誰一人と置いて行かれるようなことなく全員が楽しんで授業を受講することができました。授業内の連絡やプレゼン資料は全てグーグルを使用していました。今までパソコンのメールやパワーポイントのみを使っていた私たちにとって新しく、斬新で新鮮な授業でした。マイクロソフトの共有機能ではなく、グーグルを使う事で、スマホや通信環境が整っていない場合でもスムーズに連絡が出来、使い方も簡単なので遠隔でも意思の疎通がうまく出来ました。

特に授業がオンラインになった日でもグーグルを使う事で連絡がスムーズにできたり、プレゼン資料に先生からのコメントを付ける機能があったりしたので、的確に指示を貰う事も出来ました。プレゼン発表では、個々に用意してきたプレゼン資料を基に一人5分程度の発表を行いました。発表は教科書を基にしたもので、1冊の教科書を全員で分担し、発表を行ったので一人で教科書を読まなくても理解できる仕組みでした。より効率的で楽しく学べる授業でした。

トピック 2

次に「秋学期の授業について」述べます。秋学期でもグループワークをしながらプレゼン資料を作り、最終授業で発表する事が主な活動でした。しかし3年生の後期であったため外部講師を招いて合同授業をすることもありました。合同授業では、企業の人事部の方や大手の社長候補の方がお見えになり、就活の励みとなる講義を行っていただきました。

このように、2～3クラスが合同となり、お話を聞く機会がありました。中でも出光興産の小林さんは石井先生のお友達という事で、学生も希望を持ちながら話を聞いていました。プレゼン発表では春学期とメンバーを変え、新しいメンバーにてグループワークを行いました。秋学期では石井先生の著書を読み、プレゼン資料を作成し、発表するというものでした。春学期同様、グーグルを使いグループワークに取り組みました。秋学期は冬休みを挟むので、直接グループワークができない時もありましたが、グーグルを使う事でスムーズに行う事が出来ました。

最後に

最後に「授業を通して学んだこと」は自主性の大切さです。この授業では最初に述べた通り自主性を大切にして進められてきました。無理なペースで進めるのではなく、自発的に動くことが求められ、結果、素晴らしいチームワークでプレゼンを行う事が出来ました。追手門の学生の中には、いつの間にか学びの喜びを忘れ、自ら授業へ参加する権利を放棄してしまっている学生もいると思います。また、ただ単に何も考えず、遅刻せず欠席せず大学に来るだけの学生も少なくないと思います。私は大学生になって与えられた課題やメニューリストをただこなすことが増え、これが本当に自分のしたかった勉強なのか、と何度も悩みました。

しかし、このゼミに入って、石井先生のもとで自ら学び、発言し、まとめることで本当にやりたかった大学生になれたと思います。そしてたまたま同じ石井ゼミに所属することになった友人で、これまで大学に来る喜びを忘れていたような人が、再起をして卒業したいと授業に参加する様子を見て、おおらかな性格の石井先生のもとで学べて救われるような思いもしました。今後、追手門学院大学に入学する新入生には、希望を捨てず、自主性を大切に学んでほしいと心から思っています。以上が私のカレイドスコープです。

Research Project 1・2 (増崎先生)

国際教養学部国際教養学科 3 年

学籍番号 21CC055

氏名 曾根 幹太

はじめに

本稿では 3 年生からの必修科目である Research Project 1・2 の授業内容について私なりに紹介しようと思う。私が所属しているクラスでは、Sustainable Development Goals (以下SDGsと記す) の問題を題材として授業内及び授業外課題、発表を定期的に行うことで論文作成の知識を身に着けることができる。

春学期の授業について

春学期の授業は主に論文作成にあたっての基礎知識を身に着けることを目的としている。授業では石黒圭の『この一冊できちんと書ける！論文・レポートの基本』という教科書を使い、各章ごとに先生が解説しその後そのトピックにあった課題を授業時間内に取り組んでいく。また、授業外課題として、次週学習する教科書の箇所の要約とSDGsに関連した記事を読み解きWordを使ったパネル作成がある。教科書の要約課題を通して、次週学習する内容を事前に掴んでおく。パネル作成課題を通して、授業内で習得した知識やスキルを実践する。授業内課題で情報をインプットし、授業外課題でアウトプットするサイクルで理解が深まる。

秋学期の授業について

秋学期の授業では春学期から一歩進めて、各自で仮説を立ててそれを発表することを目的としている。授業時間内でSDGsの17の目標から複数を選択し、概要作成課題の要領でパネルを作成する。授業時間外で学生は選択した項目についての問題を調べ、解決策を考える。そして翌週の授業内で、1人3分程度でそれを発表する。授業が進むにつれて、わざと反対意見を織り交ぜて自身の意見を強調するなどの縛りが入ってきて、難易度が増す。また、発表だけではなく他の学生から内容や発表の工夫点などをまとめる課題も行う。発表をくり返すことで自分の主張をより明確にし、具体性をそこに取り入れる技術が学べる。

この授業を通して学んだこと

この授業を通して、SDGsの問題だけではなく論文・レポートの構成について理解を深めることができた。教科書には問いの立て方、研究の仕方など論文で必須となる技術はもちろんのこと、記号の使い方や話し言葉・書き言葉といった日本語の使い方も記載されている。普段当たり前のように日本語を使う私でさえ誤認していた所もあったので毎回の授業を前向きに取り組むことができた。

秋学期からの発表は自分の主張をどのようにして明確かつ論理的に表していくかという点で苦戦した。他の学生による発表を聞くことで、問題を見る視点や次回の改善点を考察し改善につなげることができた。発表の場を通して、学生間で意見共有ができる。自分とは異なる考え方に会えることができ、新たな視野を手に入れることができる。日々の課題と発表には字数と時間が制限されており、無駄を省いて決められた範囲内でまとめることが重要になる。そのため自分の意見をできる限り絞り、言葉の言い回

しにも気を配る必要があった。どれも大変だったが、真剣に取り組むことで昨日の自分を超えることができると思った。

おわりに

ゼミには、「面倒くさい」や「課題が多そう」など負のイメージが付きがちである。確かに、先程述べた通り毎週の課題や発表は手間である。しかし、そこから決して逃げてはいけないと私は思う。この授業からは、論文・レポートの作法だけでなく、社会人となった後でも役に立つ考え方を学ぶことができる。「失敗を恐れずに学んだ内容を使ってみる」、これを大切にしてほしい。

Research Project 3 & 4（足立ゼミ）

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc074

氏名 荒木 映実里

はじめに

当ゼミでは、春学期（Research Project 3）は、ビジネスにおける根幹、すなわち知的財産（特許（パテント）、ブランド（商標）、著作権、ノウハウ（営業秘密）、デザイン（意匠）など）や契約（フランチャイズ契約、ライセンス契約、代理店契約、継続売買契約など）の何かに各自が絞って、検討・分析し、研究結果を纏めました。秋学期（Research Project 4）では、それぞれが就職する又は興味がある業界及び会社についての分析・研究するというもので、各自の興味を持つ分野をテーマに研究を行いました。研究にあたっては、「問い」と「仮説」を設定します。資料や研究を基に論証し、最終的な結論を出すという流れで授業が進められます。研究の成果はプロジェクト計画、中間成果、最終成果の3回のプレゼンテーションと研究レポートにまとめられます。

以下、「当ゼミの授業内容」「ゼミを通して学んだこと」の2項に分けてゼミを紹介し、最後に受講した感想を述べる、という構成になります。

当ゼミの授業内容

前述の通り、足立ゼミでは足立勝先生の指導の元、各々が定めたテーマに沿って研究を行い、成果物作成・発表を行います。授業では、有効な視点や手法、文献の利用方法などに重点が置かれます。また、「問い」や「仮説」に対して、論理的にアプローチする能力を身につけることが期待されています。

プレゼンテーションでは、他の生徒や先生からの指摘や質問を受けることで、新たな着眼点や不足点を発見する機会があります。研究成果を発表するだけでなく、他の生徒の発表を通じて研究や発表の手法、モチベーションについて学ぶこともできます。レポート作成に苦戦する場合でも、過去の指導内容やスライドを参考にすることで解決策を見つけることができます。また、先生に相談することもできるため、内容に詰まることなく進めることができます。春学期と秋学期の授業では少し異なる内容が行われます。春学期では、ビジネスの根幹である知的財産や契約について各自が自由にテーマを設定し研究を行いましたが、秋学期では大学卒業後の業界や会社を対象に実践的な分析を行う指定テーマが与えられました。

ゼミを通して学んだこと

私は、Research Project 3 ではフランチャイズ契約について、Research Project 4 では興味がある業界及び会社としてレストラン事業の宅配ビジネスについての調査・研究しました。

知的財産や契約、また就職する又は興味がある業界及び会社について自ら調査・研究することは、様々な課題を理解し、解決策を見つけるために非常に重要であると学びました。特に、自分の就職する業界に関するゼミの授業では、業界の現状や課題を分析することが重要であることを学びました。具体的なデータや市場動向の分析を通じて、自分が興味を持つ領域のトレンドや未来の展望を把握することができました。また、競争環境や技術の進化に対応するためには、自己啓発や広い視野を持つことが必要であることも学びました。

さらに、ゼミの授業を通じて研究手法やプレゼンテーションスキルを向上させることもできました。データ収集や分析の方法、文献の扱い方など、研究を進める上での基礎的なスキルを身につけることができました。

おわりに

ゼミの授業では、それぞれの学生の興味・関心に基づく発表が行われることから、限られた時間内で多くの情報・知識を理解・習得する必要がありましたので、一部のテーマや内容についてはより詳しく学ぶことができなかったと感じています。また、自分自身の関心や興味に合わないこともあったため、そういった内容には積極的に学ぶことができなかったかもしれません。

ゼミの授業を通じて多くのことを学びましたが、さらなる学習の必要性や自身の興味関心に合わせた学びの追求も大切だと感じました。将来のキャリアや社会貢献に向けて、今後も積極的な学びの機会を追求していきたいと思います。

Research Project 3&4 (北村先生)

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc104

氏名 古川 純太郎

はじめに

初めまして。国際教養学部 4 回生の古川純太郎と申します。北村先生のゼミでは主に環境問題・SDGsについて深く学びます。昨今よく問われている問題ではあると思いますが、日本は先進国でもあり、国自体を見ると裕福なように見えるかと思いますが、ですが北村先生のゼミを受けてから環境問題への考え方の違い、根本的な問題というのを徹底的に授業で学ぶので勿論世界の環境問題への理解も深まりますし、日本で起こっている環境問題についても凄く勉強になることばかりでした。

本稿ではゼミの流れ、卒業論文（以下卒論とする）から学んだことを記述します。皆様の参考になれば幸いです。

春学期の流れ

北村先生のゼミは前述したとおり環境問題について学びます。主に春学期は自分の興味のある環境問題や調べて面白そうなものを選出し、それをパワーポイントにまとめて発表するという流れです。春学期に決めた内容をそのままさらに深掘りして卒論にする人もいますし、内容を一からまた考え直して卒論を作る人もいます。環境問題は調べれば調べるだけ奥が深いですから、内容を変える人も少なくないです。そして北村先生のゼミはクラスの皆と会話をする事が多く意見交換もできるので、何か悩んでもすぐに解決に向かえるような、アットホームな授業となっています。春学期は自分が何に興味があるのか、どのような分野が自分に合っているのかを捜す期間にもなるので是非無駄のない時間を過ごしてほしいと思います。

秋学期の流れ

秋学期に入ると本格的に論文の創作に取り掛かるのですが、より理解を深めるために、北村先生の共同研究者と北村先生が考えたカードゲームがあるのですが、そのカードゲームで環境問題について簡単に遊ぶのですがこれがただの遊びではなくて、やっていくと本当に深く考えさせられるような内容で、カードゲームとして売り物になるのではと思うほど完成度の高いゲームでした。そのカードゲームをきっかけに私もですが、友人も考え方が変わって卒論を進めていくうえでとてもいい材料にもなりました。卒論は何から始めていいかもわからず、躓くかと思いますが手当たり次第に調べて考えていけばおのずといいものになっていくと思いました。そして北村先生のゼミは卒論が完成したらそれをパワーポイントにまとめて皆の前で発表します。それぞれ素晴らしいものばかりで私は正直後悔しています。もっとできたのに、もっとこうすればよかったと他の子の発表を見て感じてしまいました。ですがそれも自分にとってはプラスなことなので是非諦めずに最後まで頑張してほしいと思います。

卒業論文を通して学んだこと

まず卒業論文にゴールはないです。やればやるだけ内容が濃くなるという事です。調べれば調べるだけその問題について出てきますし、自分の考えと世間の考え、大きく出ると国の考え、全てが一致する

こともないですし、それどのようにまとめて相手に伝えるか、卒論は自己満足だけで終われるようなものではありません。どうすればわかりやすく伝えられるかを必死に考え相手に伝える必要があります。真剣にやっていたら楽しくなってきます。何度も壁にぶつかることもあると思いますが、絶対に諦めずに良い卒論を作ってほしいと思います。知識もつきますし、世間の見方も卒論を作っていたら変わっていきます。自分の人生の糧になると思うので、全力で卒論を作って楽しい大学生ライフを過ごしてください。

最後に

北村先生ゼミを通して私が今まで触れてこなかった、知らなかった問題に対して色々な角度から読み取ることの重要性・環境問題について沢山の知識を得ることが出来ました。勿論環境問題だけではなく、仲間の大切さ等挙げればきりがありません。これから環境問題について学ぶ皆様も今まで知らなかったことだらけだと思います。その問題について知らなかったことを学ぶいい機会になると思います。少しでも私の学んできたことを皆様に伝えられ、ゼミでどのようなことを学んでいるのか、参考になれば幸いです。

皆様の人生がより豊かなものになりますように心から願っています。

Research Project 4L (米文学研究)

国際教養学科 4 年
学籍番号 20CC027
氏名 今井 蓮

はじめに

このゼミでは外国文学研究を通して社会文化を読み解きます。米文学作品を題材にし、物語設定や登場人物たちの行動様式、特徴的な英語表現の反復などに着目して、それらが持つ社会文化的メッセージを読み解きます。外国文学を研究することがその作品が生成された社会文化的土壌の掘り起こし作業と密接な関係にあることに興味を持ち、特定の米文学作品の精読と詳読から導かれ得る社会文化的意味について考察します。その過程と結果をゼミ内で段階を追って取り組みまとめる研究論文の形で発表します。

詳しいゼミ内容

ゼミ内では教員から指定された米文学作品について各人で調べて、調査と分析を進めていきます。その結果を随時発表し、最終的に論文にまとめ上げます。教員から毎回の授業の冒頭にその回に行う作業の流れ、アドバイス、課題の説明を受けます。

春学期と秋学期では取り扱う作品が異なります。春学期には数種類の作品からゼミ生ごとに作品が割り当てられます。自身が担当する作品がどのような意味を持つのか、また作者が読者へ伝えたかったメッセージは何であるかについて考察します。社会文化的特徴、作品が書かれた時代背景と関連づけて作品を読み解き、それをまとめたものを発表するという流れになります。

秋学期はゼミ生全員が同一の作品を取り扱い、その作品が持つメッセージや、作品が書かれた時代背景について各自で調査します。論文を作成する前に時間をかけてしっかりと下準備を行います。仮説を立てて、そこから導き出される三本柱を立てます。それらを具体例で肉付けして、論文の形に仕上げていきます。

ゼミ生が提出した課題は共有フォルダで全員が閲覧できます。他のゼミ生の考え方や視点を知ることができ、新しい発見に繋がる点が面白いです。

ゼミでの授業を通して学んだこと

私がこのゼミで学んだことは、外国文学研究に取り組む際にはしっかりと下準備が非常に大切であるということです。ある作品についての研究論文を作成する際に、準備不足のままで論文を書き始めると、内容が蛇行した構成の良くない論文になる危険性があります。そうならないために、仮説や三本柱の根拠などを適切に予め用意しておくことが求められます。論文と聞くと難しいと感じるかもしれませんが、段階を踏んで情報の整理をし、それを文章化することで論文は自然と完成します。

おわりに

米文学作品を取り扱い、それを研究することに主眼を置くこのゼミでは、様々な視点から物事を捉えて分析する機会が得られます。それによって多くのことを発見することができ、論文作成についてはもちろん、社会に出てから必要になる情報分析のスキルを獲得することができます。論文を作成する過程で行き詰まることが多々あるとは思いますが、教員からマンツーマンの親身なサポートが受けられます。米文学作品に加えて、社会で生きていく上で必要なスキルを学べるゼミです。

Research Project 3&4 (藤川先生)

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc116

氏名 笥 敬登

はじめに

ここでは、Research Project 3, 4 の藤川武海先生のゼミについてお話していきます。藤川先生のゼミでは、今現在起きている、国際問題などを扱い、そこでの問題やその影響で日本はどうなっているのかなど自分たちで考え、話し合い答えを導いていくといった授業を行っています。このゼミではメンバーの考え・意見を否定せず、それぞれ尊重し合うことで話しやすい環境作りを心がけられています。

このレポートは「授業内容について」、「授業を受けて学んだこと」の2つの項目から構成されています。

授業内容について

1. Research Project 3

春学期では、藤川先生指定の教科書「国を憂いて何が悪い」の内容を題材にグループ発表を行いました。内容については教科書の内容を要約し、15分間の中で分かりやすくまとめ二人一組で発表する流れになります。教科書の内容の一例、ロシア・ウクライナの戦争での影響でした。出口の見えない争いにはいろいろな国の関りが見えていき、この関りにも積極的に調べ、自分たちの一つの答えを探すのが目標でした。上記の発表が終わると、主にニュース・新聞を見て、先生からの記事に対しての問いに自分の考え・グループに考えを発表し、それに対して意見を出し合いました。授業終わりには先生との一对一の面談があり、単位状況・学校生活・就職状況など話し合う時間があるので分からないことがあれば先生と話し合うことができます。

2. Research Project 4

秋学期では、ほかの国際問題にも目を向けることができ、ニュース・新聞の「難民問題」「日本におけるクルド人問題」など日本で起きている問題に個人・グループで意見を出し合い、そのことについてみんなで意見を出し合い、より一層、国際問題への認知を広げました。他には、春学期と同じように教科書を用いて、グループ発表を行います。春学期での内容を生かすことにより、より本格的な内容になってくるので自然的に発表の内容が難しくなってしましますが、そこも分かりやすく詳しく分解し、話すことによりPPTもシンプルかつ伝えたいことまとめられており、見やすいPPTを生成することができます。授業後の課題では、ほかの人の発表を450文字程度に要約する課題もあり、そのことでほかの人の発表の内容も自然と自分の中に入るとい形になっています。

授業で学んだこと

このゼミでは、まず国際問題でのいろいろな視点・考え方を学びます。そして数ある国際問題に様々な視点で話し合い、意見交換、他人の視点を学ぶことができます。発表ではPPTの内容をあくまで自己理解だけではなく、聴者が理解しやすくするところまで考えながら作成することが大切である。答えは存在しないですし、全体で共有し、なぜその答えにたどり着いたのか、そこで自分ならどうする

のか、意見交換した後も深く掘り下げていき、また違う視点を見つけていくそのことが大事だとこのゼミで学ぶことができます。人それぞれ感じること・思うことも違いますし、違う考えに出会い、共感し、また、新たな考えに出会うことがあるため非常に面白いです。藤川先生も聴者側に立ってくれるため、先生からも考えさせられる質問もあり、その問題に対する知識も増えていきます。人前で発表するのが苦手な人や発言するのが苦手な人もいますが、藤川先生は「間違っていてもいい、正解はないんだから」と常におっしゃっています、一人一つの発言で考えが変わるかもしれないですし、何か感じたことでもいいから発言するという大事さもこのゼミで学ぶことができます。

おわりに

このResearch Projectでたくさんのことを学びました。今現在直面している国際的な問題に関して、考えさせられる機会がとても多かったです。他には、このゼミでは発言することの大事さを学ぶことができましたと思います。人前で話すことが苦手だった自分もグループワーク・グループ発表を通じて、間違っていて自分の考えを伝えようとするできるようになったことが一番大きな学びだなと思います。

Research Project 3&4 (T.Brook先生)

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20CC058

氏名 松元 稜司

はじめに

2023年度のResearch Project 3・4では、「越境文学」の読解を通じて、現代日本および日本語から捉えられるグローバル化の実態とそれに関する諸問題について学びました。このゼミを通じての学びは、まず日本語文学の研究を通して、文学作品の虚構性を理解し、作者の意図を読み取り、自分の感じたことを言語化できる能力を養いました。次に、異文化コミュニケーションの理論を参照し、多言語多文化を有する文学を通じて、グローバル化に対する洞察を深め、他者との対話を通じて諸問題に対処し、考える力を身につけました。最後に、共通語としての日本語の可能性と課題を理解し、他の言語の言説を参照して、多言語リテラシーと文化共生能力を高めることが重要です。これらのスキルと理解は、文学の豊かな世界を理解するだけでなく、現代社会においてもグローバルな視野で問題に取り組む力を備える上で欠かせません。

春学期の授業について (Research Project 3)

「越境」。この言葉を聞いてあなたは何を思い浮かべますか？「境を超える」や「国境を越える」などいろいろあると思います。このゼミの春学期では「現代日本文学における越境性」をキーワードとして、今の日本や日本語から捉えるグローバル化について学びました。また春学期の研究レポートでは越境性について自分なりに解釈し、好きなテーマと越境性について発表をしました。「韓国ドラマ」や「K-POP」や「ロック音楽」など世界から日本に参入していることを越境と捉え、研究を行う人もいました。私は「異文化コミュニケーション」の越境性について研究をし、近年インバウンド数が増加している中で日本人と英語圏の人のコミュニケーションの仕方の違いについて調べました。日本とは違うコミュニケーションの仕方の背景や原因は何なのかを明らかにしようと思いました。

秋学期について (Research Project 4)

秋学期の授業では、まず昔の日本に「越境」および「多言語多文化」の要素が過去の文学にどのような影響をもたらしたのかを学びました。夏目漱石やリービ英雄などの作品から越境に対する考えがどのようにして変化してきたのかを読み取りました。また日本の20世紀の文学史の中で主要な「マイノリティ文学」として認識される「在日（朝鮮人・韓国人）文学」についても学びました。

秋学期の研究テーマでは、春学期に続き同じ内容を発展させる人もいれば、越境に対する考えを改め新しいテーマで研究する人もいました。私自身の研究内容は、春学期の内容を発展させ、「異文化コミュニケーションがどのようにして日本に普及したのか？」と「コミュニケーションにおいて非言語コミュニケーションはどれほど重要なのか」「非言語コミュニケーションはどのような違いがあるのか」について研究をしました。

授業を通して学んだこと

私はこの授業を通して、「越境とは何か？」「日本にどれほどの異文化があるのか」「新しいことを

学ぶ重要性」について学ぶことができました。なかでもまず「越境」の概念に焦点が当てられました。授業を通じて、越境は異なる文化や価値観との交流を意味し、日本内にも多様な異文化が存在することを認識しました。この多様性が新たな視点や知識の源であることを理解し、異なる文脈で学ぶことの重要性が浮かび上がりました。授業は、異文化の理解を通じて広がる視野や柔軟な思考を促進し、新しい知識を獲得することの意義を示しました。この授業を通じて、多様性への理解が深まり、新しい領域に挑戦することの重要性が鮮明になりました。異文化との接点は学びの機会であり、その中で成長することができることを体験しました。また、新しい知識を得ることの重要性についても強調されました。異なる文化や分野に触れることで、自らの視野が広がり、柔軟な思考力や問題解決能力が向上することを実感しました。これが、現代社会において求められるリーダーシップやクリエイティブな発想の基盤となると理解しました。

総じて、このゼミでは異文化への理解を深め、新しい知識を積極的に取り入れることの重要性に気づかされました。これらの経験が今後の学びや社会での活動において大きな武器となることを期待しています。

おわりに

このゼミで学んだことは、社会にでてからもとても役に立つものばかりであると感じています。新しい知識を増やすこと・新しいことに挑戦すること・新しいことを学ぶことに不安を抱かないこと。これらの大切さを将来大切にしていきたいと思います。

このゼミでの経験において越境や異文化について学ぶことができてよかったと思います。国際教養学部であるうえ日本以外のことを多く学ぶ機会があったこと、いろいろな視点から新しいことを学ぶことができたことなどに巡り合えたことをうれしく思います。社会に出てからも多くの視点を持ち、新しいことを学ぶことに前向きに取り組もうと思います。これからゼミ選択をしていく後輩の皆さんには、ぜひ自分が興味を持つ分野を全力で学べる課題を見つけてください。

Research Project 4H（原先生）

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc049

氏名 西田 結名

はじめに

私が所属するResearch Project 4Hでは、それぞれ興味のあるテーマを決めて、文献調査や、書籍、アンケートをとるなどして理解を深めました。私は3年生のゼミから引き続き、外国人技能実習制度について、その中でもベトナム人技能実習生に注目し、研究しました。本稿では、授業の流れや研究内容、得た学びについてまとめています。

研究内容

私は3年、4年を通して外国人技能実習制度について、特にベトナム人技能実習生についての研究を行いました。初めは何について研究すればいいか迷っていたところ、2022年にあった岡山県での職場で技能実習生がいじめに遭っているというニュースを見た際に、どのような理由でこの問題が起こったのか知りたいと考えたため、始めました。研究では中小企業に絞り、いじめを無くすための対策として受け入れる企業は何をしているのかを知ることを目標に調査を行った結果、九州で行われた「ジュエルズプラス」というプロジェクトを知ることができ、そこからコミュニケーション不足によるいじめであったという結果を出せました。そして課題としては、日本語を教える側であるボランティアが基礎的な知識や技能を身につけられる機会の提供が不足していることが分かりました。4年では、3年で研究したものとは別のテーマでいいと言われていましたが、2023年4月ごろに出された失踪する技能実習生を減らすために技能実習制度に代わる代替案についてのニュースが報道されたことから、引き続きこの研究をすることを決めました。今回は北海道と岡山県で行われている取り組みについて調べ、現在も研究を続けています。

私は同じテーマに対して2年間、技能実習生について調べることにより、どのようなところに技能実習生が多いのか、コミュニケーションを取るためには何をすべきかなど理解を深めることができました。また、来年から労働する身として、関わりを持つかもしれない技能実習生について知ることは大切であることを改めて学びました。研究する上で大切なことはどれだけ一つに絞るか、いかに上手く情報を集めるかが重要であると感じました。



教室でゼミメンバーと撮影

授業を通して

この授業では時事問題や論文についてのプレゼンテーションを一人3回ほど行い、ゼミのメンバーに聞きたいことなどをディスカッションする機会を多くとっていたため、自分では気づくことが出来なかった部分や修正点を知ることが出来るいい機会になりました。また、他の人の発表を聞くことにより、自分の興味のなかったことに興味をもてたり、知らなかったことを知ることが出来たりするという利点

もありました。プレゼン力が向上し、それに対するディスカッションを行うことにより、研究テーマについての興味を深めることができ、コミュニケーション力の向上も見込むことが出来るため、とても役立つなと感じました。1回目のプレゼンではパワーポイントに2個のディスカッションを入れることが決められていました。中には、内容が定まっていなかった人もいましたが、ディスカッションを入れたことで内容についての意見を先生やゼミメンバーからもらったことにより、進めることが出来た人や進めるのは難しいと考え、他の研究内容に変更した人もいたりしたため、このディスカッションは大事にしなければならないなと実感しました。

おわりに

私は3年の時にプレゼンやディスカッションを多くして交流できたことが楽しかったため、4年でも引き続き原先生のゼミを選択しました。この授業ではプレゼンやディスカッションをする機会が多くありましたが、他のゼミではする内容が異なるため、人によって好みがあると思います。しかし、私はこの授業を通してプレゼンをすることによる緊張感に慣れることができ、ディスカッションで他の人と話すことにより、思いつかなかった考えを他の人からもらうことが出来るという2つのメリットは私にとって大きな成長に繋がったなと感じました。自分では考えたことのないトピックを他の人が研究することにより、考えさせられることもあり、とても刺激がもらえるゼミです。最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

Research Project 4（蛭田先生）

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20CC024

氏名 波来 響

はじめに

本稿では、蛭田先生のResearch Project 4Bの授業について紹介します。この授業は、主に地政学の視点での国際関係やSDGs（貧困、教育、平和と公正）などをテーマに、各個人の関心のあることに対して研究を進めていきます。毎回の授業後には事前課題が与えられ、そして課題研究の成果をプレゼンテーションします。こうして自分が調べた内容をアウトプットすることで、知識が定着し、プレゼンテーション能力が身につけることができます。

以下では、「私がこの授業で得ることができた2つのこと」と「Research Project 4の特徴」について紹介します。

この授業で得ることができたこと①

一つ目は、情報をうまく整理することができるようになったことです。前述したように、この授業では、毎回の授業後に事前課題が与えられます。事前課題というのは、先生が講義された内容に関するテーマについて研究し、パワーポイントにまとめ、次回の授業でグループ内、あるいはクラス内で発表するというものです。テーマは過去に起こった出来事や、今世界で問題となっていることなどと様々で、中には私が今まで全く聞いたことないテーマもありました。そのようなテーマも調べればインターネット上に多くの情報がありました。ここで必要となる能力が、情報を整理する能力です。情報を整理することで、自分自身も情報の内容をしっかりと理解することができます。また、発表内容も分かりやすくなり、聴者を惹きつけることができます。

実際に、今まで私には情報を整理する能力が欠如していたがために、自分の主張を周りに伝えることを苦手としていました。しかし、この授業で何回も研究と発表を繰り返すことで、情報を「収集」「整理」「伝達」する力が向上していきました。情報をうまく整理することで、自分でも内容を理解できるようになり、自然とそのテーマに関して興味と関心が沸くようになりました。

社会人でも役に立つこの能力を、本授業を通して身につけることができ、良かったと感じています。

この授業で得ることができたこと②

二つ目は、世界の諸問題を自身の立場で考えられるようになったことです。これは、本授業だからこそ得ることができたと思います。

日本で生活していると、今世界で起きている様々な問題について関心を持ってない、関心を持っていないことがあると思います。例えば、世界における教育問題です。スーダンでは度重なる紛争と内戦が勃発し、今でも国内情勢は不安定な状態が続いています。そこでは初等教育や中等教育を十分に受けることができている若者が非常に多い。そこで私は、「紛争・内戦がもたらす若者への教育の影響と実態～南スーダンの教育問題から紛争・内戦勃発の関係性を考察する～」というテーマで、春学期の最終回にミニ研究レポートを作成しました。結論としては、教育を十分に受けられないことと、紛争が頻繁に起きることに因果関係があることに気づきました。このことにより、日本で生まれ育った私たちがこう

して平和でいられるのは、義務教育のおかげであると実感でき、それが自分の新たな価値観に繋がりました。

また、授業を通して「人間は平等なのか、普通に生きるとは何か」という問題について考えるようになり、ニュースを見ても今まで他人事に感じていたことが身近に感じるようになりました。

Research Project 4 の特徴

Research Project 4 の授業内で、先生は「知は力なり」という言葉を何度も使われました。「知は力なり」とは、ものごとを深く知ることは人間としての大きな力であるという意味です。社会情勢を理解することは、将来必ず役に立つことだと思います。この授業では、世界における紛争や差別等多くのことを知ることで、物事を客観的な視点で考えることができるようになるのが魅力です。

世界情勢のことを把握することは広い視野で考えることに繋がり、目まぐるしく変わる変化するこの時代において必ず役に立つことと思います。

おわりに

この授業で学んだことは、社会に出てから役に立つものばかりだと私は感じています。そのぐらい必要不可欠な能力を楽しみながら身につけることができる授業、それがResearch Project 4 です。

Research Project 4N（石井先生）

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20CC005

氏名 野村 麟顯

はじめに

私は石井先生担当の「Research Project 4N」に所属しています。本稿では、4 年生である私の視点で石井ゼミの特徴やゼミでの経験等を中心に書いていこうと思います。この記事がゼミ選びの際の手掛かりなど役に立てることができれば幸いです。

ゼミの活動形態

私の所属している石井ゼミは20名ほどで構成されています。また、ゼミは個人単位で一つのことに取り組むのではなく、基本的にチームで活動しています。具体的には、4～5 人のグループに分かれ、テーマに基づき学び調べたことをプレゼンテーション形式で発表します。また、全員が同じ役割というわけではなく、グループごとのリーダーに加えて、ゼミ自体を統括するリーダーが存在しています。ゼミを統括するリーダーはグループのリーダーも兼任します。私はグループとゼミの両方のリーダーを兼任しています。個人的な感想として、グループでの活動は個々のリーダーの裁量に委ねられており、自主性が重んじられる印象です。

ゼミ内容

石井先生が執筆された教科書に基づいて、企業の経営に関して学んでいます。「社会人として生きていくために必要な知識を学ぶ」という主題を中心に構成されています。その中でも、「マーケティング」、「ファイナンス」「アカウンティング」の3つを中心に学んでいます。「マーケティング」の部分では商材の販売戦略手法を中心に、「ファイナンス」や「アカウンティング」では経営における資金計画の手法等について学んでいます。一つのことを専門的に深掘りして学ぶというよりも、社会人として生きていく上で重要となる知識を優先度の高い順に広く学んでいく方向性です。

授業を通して学んだこと

2つあります。1つ目に、ゼミの内容に関連することです。前述したように、ゼミで中心的に学んだ「マーケティング」と「ファイナンス」、「アカウンティング」の3つを踏まえて、日常で企業に関する情報に対する受ける印象に新たな視点が加わりました。具体例として、消費者視点に加えて、事業者側の視点でも企業に関する物事を考えられるようになりました。異なる視点により、興味の対象が増えたことは私にとって人生の楽しみが一つ増えたことと同義です。2つ目に、ゼミでの活動に関することです。ゼミ内でのリーダーとしての経験とグループでの活動経験を通して、円滑に物事を進めるコツを学びました。

おわりに

経営に関しての知識を深めることは大学生のうちに取り組み始めたいと考えていたため、私は石井先生のゼミへの配属を勝ち取って良かったと思いました。どんなことでも興味を持ち、行動に移して学ぶというスタンスは学生生活を充実させるためには不可欠であると感じています。本稿が役に立つかは分かりませんが、皆さんが悔いの無い学生生活を送れるように祈っています。

Research Project 3, 4A (平井華代先生)

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc130

氏名 岡島 穂香

はじめに

Research Project 3, 4Aは国際教養学部国際教養学科の4回生が履修する必修科目です。ゼミという形で授業を受け、秋学期の最後には卒業論文を完成させます。

本稿ではResearch Projectを通して私が得た学び、苦労したこと、最後に後輩へのメッセージを紹介します。

得た学び

まず初めにResearch Project 3, 4Aで得た学びについて紹介します。主に二つあり一つ目は興味関心を深めることです。卒業論文を書くにあたって、そのテーマは自由でした。それぞれの興味関心が違うからこそ、今まで自分が触れてこなかったトピックについて、他学生の研究を通じて知ることができました。悩んでいる学生がいれば、まず「なにに興味があるのか」「興味を持ったきっかけはなにかな」を仲間同士で検討することができます。そのおかげで自分の興味関心が明確化されました。

二つ目は多角的な視点をもつことです。この授業では毎時間プレゼンテーションがありました。毎回と聞くと多くて大変だと思われがちですが、この授業のプレゼンテーションの目的は一方的に発表するのではなく先生や他学生からのフィードバックがメインです。論文を書く中で、一人で研究を進めていると、つい主観的になったり孤独を感じたりしてしまいます。ですが、プレゼンテーションを行うことで今まで自分が気が付かなかった点を発見することができます。私はこれをとても重要だと捉えており、この手厚いフィードバックがそれぞれの論文をブラッシュアップさせました。小さいミスなども逃すことなくお互い気付き合うことで自分の論文にも活かすことができました。

苦労したこと

Research Projectを通して、研究を進めていく中で苦労したことは言語化することです。私は、春学期に「なぜ貧富の差が生じるのか：ルワンダにおける歴史的背景との関係」というテーマで論文を書きました。これは実際にルワンダへの渡航経験があり、それを基に記したものです。実体験だからといって、決してスムーズに書き進めることはできませんでした。自分がこう表現したいと思っても準備不足や語彙力が足らず、言葉として書くのにかなり苦労しました。そこで私が行った解決策としては、文献を深く読み込むことです。文献にはたくさんの情報とヒントが載っており、論文を完成させるうえで必要不可欠です。そうすることで、私は自分自身の課題と向き合い、さらには説得力のある論文を完成させることができました。

後輩へのメッセージ

Research Projectを履修する後輩の皆様に伝えたいメッセージがあります。それは、自分の興味関心の追求を続けてほしいということです。4年間の集大成である卒業論文、せっかくなら自分の好きなテーマで趣味の延長線上として書くことで、楽しんで書くことをお勧めします。これらの追求は新たな

一面を知ることができ、視野が広がり今後の人生に活かすことができます。また、自分でテーマを決め、自分の好きなテーマで書くことで、より丁寧なものを作成することができます。もし、迷ったり悩んだりした際には、仲間を頼り、周りを大きく巻き込んでください。ピアレビューなどで理解を深め、「頼る・頼られる関係性」を築いてください。

おわりに

Research Project 3, 4Aは自分を知ることができた授業です。多い文字数の論文を書き上げることは、決して楽しいことばかりではありませんでしたが、コツコツと繰り返し書くことで各々の力作が完成したと思います。この力は今後も大きく役に立つことと思います。

Research Project 3&4 (小松先生)

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20CC200

氏名 櫻谷 鳳香

はじめに

私が所属するResearch Project 3 & 4 では、小松先生のご指導の下、インドの社会問題について講義を受け、自分が興味を持った卒業レポートのテーマを考えながら、各自研究を進めた。この授業では、クラス全体で発表を行う。その中でプレゼンテーションやディスカッションのスキルを身に着けることで、自分の考えだけでなく客観的な意見を知り、研究の参考にしながら進めていくことができた。

ここからは授業内容、研究内容、授業を通して学んだことの3つに分けて説明していく。

授業内容

この授業では、主にインド社会とジェンダー問題について学んだ。春学期では、インド女性の識字率や就学率、デリー凶悪事件から性犯罪について学んだ。ただインドのジェンダー問題について学ぶだけでなく、自分たちの日常生活と比較しながら、ディスカッションを行う。

また、卒業レポートを進めていくために、『インド文化辞典』から自分が興味を持ったテーマを3つ選び、レジュメを作成し、発表を行った。

秋学期では、本格的に卒業研究を行うとともに、授業では『グレート・インディアン・キッチン』という映画を鑑賞し、インドのジェンダー問題について学んだ。

『グレート・インディアン・キッチン』を鑑賞しながら、自分が一番印象に残った場面を発表しあい、またなぜ『グレート・インディアン・キッチン』という題名なのか、クラスで意見を共有することで、インドの家庭の日々の生活や女性にとっての仕事や家庭の在り方について考えるきっかけになった。

また、11月には3年生との合同授業で3年生に向けて卒業研究の中間発表を行い、質疑応答の意見交換を行い、研究を見直す機会が設けられる。



『グレート・インディアン・キッチン』のポスター

研究内容

レポートを書くにあたり、まず自分が何について関心があるのかを考え、関心のある項目からリサーチクエスチョンを考える。リサーチクエスチョンを先に考えることで、自分が何について研究をしたいのかを明確にすることができ、資料や情報を集めやすくなる。

私の卒業研究のタイトルは、「インドのコロナ禍における流通変化～新中間層によるオーガニック食品への関心～」である。「インドのコロナ禍における食品流通は、新中間層のオーガニック食品に対する関心によってどのように変化したのだろうか?」というリサーチクエスチョンに従って研究を進めている。この研究テーマが決まる前は、オーガニック食品とインド人の健康意識について研究する予定で

あったが、健康意識では主観や人々の価値観が求められ、データの不一致が生じると考え、現在のテーマに至った。

私の卒業研究では、論文や書籍だけでなく、ニュース記事も取り入れることで、コロナ禍と現在の流通について比較することができている。

授業を通して学んだこと

この授業を通して、インド経済が急成長を遂げている中で、ジェンダー平等がまだまだ国内で社会問題になっていることが分かった。インドは宗教や文化、伝統により女性の地位が男性よりも低く、女性が生きやすい世の中にしようという活動が行われているが、宗教や文化が関わることで、変化をするには難しい環境である。しかし、宗教や文化、伝統はひとまず置いとく、まずは自分がどう思うかを一番に考えることが、環境を変えていくには大切なことだと感じた。

おわりに

この授業を振り返り、インドについて学ぶことで、自分が当たり前だと思っていたことは、国や性別、生活している環境によって様々な価値観があるのだと改めて思った。授業を通して学んだことが、これからの日常生活で実際に活かされるかは自分の行動次第であり、そこまで意識する必要はないと思うが、今の世の中はジェンダー問題に敏感であり、自分が無意識にとった言動で誰かを傷つけてしまうかもしれない。そのため、自分が知識を持つことは、このような問題を未然に防ぐだけでなく、人とコミュニケーションをとるエチケットであると考えさせられた。

これを読んでいただいた皆様にも、ぜひ一度『グレート・インディアン・キッチン』を観ていただき、今の生活や環境を見直すきっかけになっていただければと思う。

Research Project 3, 4 I（西原先生）

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20CC125

氏名 竜田 安美佳

はじめに

Research Project 3, 4 とは国際教養学科の 4 年生が履修する必修科目であり、3 年生で行われたアンケート結果を基にクラス分けされています。Research Project 3, 4 I では英語学・言語学・日本語学に沿った内容の中から各々が自由にテーマを設定し調べることができるため自身の興味関心の深い内容を研究レポートのテーマとして扱うことができました。本稿では「春学期の授業について」「秋学期の授業について」「授業を通して学んだこと」の 3 項に分けて本クラスの紹介を行います。

春学期の授業について

春学期の授業では、2000 字程度の中間レポートの作成を最終目標としています。そのために、まず研究テーマの設定にむけて第 4 回までの授業では英語学・言語学・日本語学の内容を教科書より例を取り上げながら講義的に学びます。次に、レポート作成の前準備としてパワーポイントを用いて自身の研究テーマと現時点での考察をプレゼンテーション形式で発表していききました。発表後は必ず質疑応答や発表に対する感想を述べる時間を設けられているため、講義内容に対する様々な知識を蓄えることができました。先生からのフィードバックや質疑応答では、自身が発表者として指摘されている時はもちろんのことですが、発表者ではない場合でも先生の指摘が自身にも当てはまっているかを確認しました。最後に、パワーポイントで作成した研究内容を中間レポートとして word に落とし込む作業を行いました。

秋学期の授業について

秋学期の授業では、5000 字程度の卒業レポートの作成を最終目標にしているため、春学期とは異なり授業は各個人のレポート作成を進める時間として割り当てられ、授業内に必ず一度は先生のチェック（質問等も含む）を挟むことで卒業レポートの修正と作成を同時に進めています。地道な作業ではありますが、毎授業での先生のチェックは自身に現状どのような情報が不足しているのが明確化されるため、次回の授業までの動きを確立することができました。また、卒業レポートの完成には多くの著書が必要となるため、授業外では先生より教えていただいた講義分野を多く取り揃えた書店にも足を運び、自身のレポートに必要となる著書を選定する時間を設けました。第 6 回の授業では紙媒体にて自身の卒業レポートを提出し添削を加える時間も設け、レポート内での一人称の表記や語尾を言い切りの形にするなど、毎授業でのチェックよりもさらに細かな添削していただきました。第 11 回の授業では総括として秋学期に新たに書き進めた研究内容のプレゼンテーションを行いました。

授業を通して学んだこと

この授業を通して、最も意識しなければならないことは「研究レポートが卒業論文に相当するものである」ということです。Research Project 3, 4 という 1 年間を通して自身の研究内容に対する深掘りを行っていくことはもちろんですが、引用文において筆者等の分からない不確かな情報ではなく論文や著

書といった第三者の目をとおされたものであるか参考文献は正しい順番で書けているか、目次は作成できているかなど、論文の正しい書き方を学びました。また、引用文における著者の意見において、自身のレポートに都合が良いように解釈を行ってはいけないことや多くの引用文を付け足していくがゆえに、前後内容が合致しない状況に陥りやすいため、細心の注意を払わなければならないことも学びました。

おわりに

西原先生のResearch Project 3, 4 では個人で進める時間、先生やクラスメイトに共有する時間をきちんと分けながら自身の研究を進めることができたため、とても有意義な時間を過ごすことができました。また、私は2年生時の選択必修科目で初めて履修した言語学に面白さを感じ、毎年言語学に関する授業を受講し現在もResearch Project通して研究を行っているわけですが、面白いと感じたことや自身に必要なと感じたものに対し、とことん熱中して取り組む姿勢は社会人になっても忘れずに、今後も努力し続けたいと思います。

Research Project 3&4 (大島先生)

国際教養学部国際教養学科 3 年

学籍番号 20CC062

氏名 田藏 新一

はじめに

大島先生のResearch Project 3 & 4では、事例研究やフィールドワークを通じて様々な「サービス」について学び、各個人が興味を持つサービスの課題研究に取り組みました。春学期は、主にサービス業界における有名企業のマーケティング戦略の事例を研究し、サービスの特性や戦略としての人材育成方法などを学習しました。秋学期は、各個人が設定した課題研究の完遂へ進めることに加え、2つのフィールドワーク（野外調査）の実施によりサービスへの視野を広げました。本稿では、「サービス業界の事例研究」、「フィールドワーク」、そして「課題研究」について記したものです。

サービス業界の事例研究

あらゆるサービスの特性を学ぶために、業界における有名企業のマーケティング戦略の事例を研究しました。USJの経営復活が1つの事例であり、顧客のニーズ（顧客の視点）に合わせたマーケティング戦略を学びました。USJは2001年に開業し、「映画のテーマパーク」として注目を集めました。限られたテーマとターゲット層により来場者数は減少し、赤字の経営不振へと追い込まれました。そこで、2010年にUSJに入社した森岡毅氏が、USJを「顧客のニーズが詰まったテーマパーク」へとベクトルを定めたことで、柔軟に映画以外のアトラクションやイベントを導入でき、売れる仕組みを構築したことでターゲット拡大と来場者数の増加を遂げました。USJが顧客のニーズ（顧客の視点）に合わせたことによる経営復活は、マーケティング戦略において重要であると学びました。

フィールドワーク

サービスの視野を広げるために、2つのフィールドワークを実施しました。1つ目は、大阪南港で開催された「ツーリズムEXPOジャパン2023」に参加しました。「旅」をテーマにした世界最大級の祭典で、海外エリアと国内エリアから成り立ち、世界中から1000を超える団体・企業が出展しました。企業や観光地の最新情報や、旅の擬似体験などが充実しており、新しい旅の楽しさを発見できただけでなく、運輸やホテルなどのサービスに関わる企業が非専門分野に事業拡大している経営戦略も見られました。

2つ目は、伊丹空港で日本航空の格納庫を見学しました。(株)JALエンジニアリング大阪航空機整備センター整備部様のご協力のもと、格納庫の設備とJ-AIRのエンブラエル190型機を見させていただき、航空機の安全運航と定時出発を支える人々の努力を見ることができました。航空機の整備の安全意識は非常に強く、工具を1つ紛失す



日本航空伊丹空港格納庫見学
大島ゼミのメンバーと整備中のJ-AIRエンブラエル190型機

ると見つかるまで全ての業務を中断し、社員総出で探さなければならないと伺いました。航空におけるサービスは、接客などの直接業務に加え、お客様が安心して時間通りに目的地の到着するための整備や運航管理などの間接業務と成り立っていると体の芯から感じ取れました。

課題研究

私は「JALとANAのビジネスクラス差別化戦略」を課題研究のテーマにしました。長年、日本の2大航空会社であるJALとANAは激しい競争相手であり、コロナ禍における航空需要減少からその競争は更に激化しました。競争に勝ち抜くためにはサービスの差別化戦略を図ることが重要となり、国際線で提供される座席クラスの「ビジネスクラス」の収益性が最も高いことから、両社のビジネスクラスを研究することに着手しました。最新のサービスを知るために文献調査を行い、JALとANAのビジネスクラスで提供される16項目を比較・考察しました。その結果、意外にもほとんどのサービスに違いが見られず、座席設備の充実度が顧客満足度に結びつきやすいことが明らかになり、いかに話題性のあるものを先に取り入れられるかが競争で勝つ術であることも明らかになりました。

おわりに

フィールドワークや研究を通じて、「サービス」の必需性や奥深さを強く感じ取れました。サービスは、有形か無形か、品質や需要は不安定ですが、いかに顧客に満足してもらえるかの可能性は無限に存在し、それを追いつけて利益を得るために、日々企業は努力しています。私は来年度に航空関連の会社に入社することが決まっており、大島ゼミで学び経験したことは必ず役に立つと思っています。

English2（原先生）

国際学部国際学科1年

学籍番号 23WA074

氏名 堀川 琴音

はじめに

このEnglishの授業は国際学部の必修科目で1～2年生の春秋学期の全4期でEnglish 1, 2, 3, 4と開講されます。各学期によって先生やクラスメイトは変わります。週に2日クラスメイトと共に授業を受けます。クラスによって形態は少し異なりますが、どのクラスでも同じ教科書を使い、テストや教科書の内容に基づいた授業を行います。本稿ではEnglish 2で行ってきたプレゼンテーションやこの授業を通して学んだことを伝えたいと思います。

English 2の授業について

English 2の授業では週に2日あり、火曜日にはTOEICの単語クイズとスピードリーディングを行います。これらは単語を身につけるためのクイズやすばやく読む力を養うための小テストです。金曜日にはTimed writingといって短い動画を見た後にその動画で行われていたことを自分で文字にし、書く力を養うためのタスクを行います。

中間、期末テストではReadingとWritingの2つのセクションに分けてテストを受けます。また、原先生のクラスでは個人やペア、グループでプレゼンテーションを行います。Ablishを元にしたプレゼンテーションや教科書の内容をグループで発表するなどがあります。これによって、人前に立つということに慣れるだけでなく、プレゼンテーションスキルを鍛えることができます。

プレゼンテーションについて

English 2の授業では3つの種類のプレゼンテーションがあります。まず、個人プレゼンでは自分の趣味や好きなことについて話します。これは知らなかったクラスメイトの情報を知るととても良い機会であると感じました。

次にAblishをベースにしたプレゼンテーションはペアで行います。SDGsの問題や国内外のニュースを取り上げ、新しい知識を得ることができる機会になります。これまでの例では「女性の服にポケットがついていない」というテーマや、「オーバーツーリズムによって日本の観光公害増加」など、SDGsに焦点を当てたもののだけでなく様々なニュースが取り上げられてきました。これらを通じて知らなかった出来事や問題に触れ、考える機会が得られます。

最後に、教科書の内容をグループでまとめて発表する機会があります。これは教科書を理解し、グループで協力して発表することを通じて準備と協力の重要性を学びます。この事前準備や発表を経て、人に教えることの難しさやグループで協力することを学びます。

この授業を通して学んだこと

この授業では、クラスメイトがプレゼンテーションを行った後、必ず質問を募ります。他人の発表に対する質問は、自ら発表する力を養うだけでなく、発表者も緊張が解れるように感じます。その結果、達成感も得られます。私自身、人前での発表は緊張を感じますが、この授業の質問を募る授業スタイル

によって発言がしやすい環境で今まで以上に発言することができる機会が増えたように感じます。授業では多くのグループディスカッションなどのアクティビティもあり、楽しく学ぶことができます。この授業で学んだことは質問したりするために自分で英語や単語を調べる機会が増えたので、それによって自ら調べて発表する力がついたと思います。

おわりに

今回原先生から、依頼を受けて初めて『カレイドスコープ』の執筆をさせていただきました。このように文字に綴るのは簡単ではなかったですが、とても貴重な経験をさせていただけたと思います。私は“英語に興味がある”程度で国際学部を選び入学しました。春学期は授業に追われ、課題に追われる日々でしたが、秋学期には少し余裕ができ、原先生のクラスで楽しく英語を学ぶことができたと感じています。国際学部だからといって全員が英語を完璧にできるわけではありません。焦らずに自分のペースで学んでいければと思っています。私の目標は日常生活で英語を自在に使えるようになることです。2年生になっても英語の授業が続きますが、引き続き頑張っていきたいと思っています。

English1, 2の授業

国際学部国際学科1年

学籍番号 23WA177

氏名 内田 伽綾乃

はじめに

English 1, 2の授業は、春学期と秋学期に履修しなければならない国際学科の必修科目です。基本的には教科書に基づいた進行が中心で、私の担当の先生は英語を主体にしながら、状況に応じて日本語も取り入れながら、スクリーンに投影した教材や資料を使用しながら授業を進めていきます。クラスでは主にペアワークがメインで、先生が提示する問題や課題、教科書についてディスカッションを通じて内容を共有し、理解を深めていくスタイルが取られています。そして、このレポートは私がEnglish 1, 2の授業についての考えを『この授業を楽しむために』『この授業の内容について』『この授業の好きなところ』の3項目に分けて記したものである。

この授業を楽しむために

この授業を楽しみながら受ける上で、私が重要だと考えるのは、自分から積極的に発言することです。高校生の頃は間違えることを恐れ、自分から発言することが難しかったです。結果として、アウトプットが不足し、テストの成績が低かったり、授業内容を覚えるのが難しかったです。そこで、大学では自発的に発言することを心がけることにしました。授業で先生からの質問に積極的に応えることで、内容がより深く印象に残りやすくなり、英語での回答も躊躇わずにできるようになりました。正解すれば自信に繋がり、不正解であればそれを学び直す機会に変わります。また、クラスメイトとの意見交換を通じて、異なる視点や考え方を学ぶこともできます。自分から発言することで様々なスキルや自信が身につく、楽しみながら学ぶことができます。これにより、単なる知識の蓄積だけでなく、自ら学び、成長する機会を得られるのです。

この授業について

この授業は教科書と先生が提供して下さる授業内アクティビティから構成されています。教科書の内容はUNITごとに異なり、外国の情勢やいろいろな物事に関する新たな知識を得ることができ、学ぶ過程が非常に楽しく感じられます。UNITに関連する課題に取り組むことで、内容をより深く理解でき、自身の考えを英語で表現し、文章化、発表する力を向上させることができます。これにより、単なる知識の蓄積だけでなく、コミュニケーションスキルや表現力も同時に発展していくのが魅力的です。授業内でのアクティビティも非常に楽しいです。主にペアワークが中心で、コミュニケーション能力と自分の意見を適切に表現する能力が鍛えられます。英語でのコミュニケーションにおいて、相手にわかりやすく伝える工夫を行い、それを実践することで自分の成長を感じます。ひとつ前のトピックでもお伝えしたように、以前は自ら意見を述べるのが苦手でしたが、今では積極的に発表できるようになり、相手に理解されるという喜びと自信を得ることができました。この授業は単なる知識の取得だけでなく、様々なスキルの向上も促進される素晴らしいものです。自らの成長を実感しながら、新しい知識を身につけていくこの過程に対して非常に充実感を感じます。加えて、これらの学びが将来の国際的な環境でのキャリアにも大いに役立つと感じています。

この授業の好きなところ

この授業では、授業初めに私のお気に入りのミニアクティビティがあります。それはSpeed ReadingとTimed Writingです。Speed Readingでは、外国で活躍した人たちに関する文章とその文章についての問題を10分間で解くというアクティビティです。このアクティビティを通じて、文章の速読、英単語量の向上、スキミング能力の向上を養うことができます。同時に、外国の偉人や過去の出来事について知識を増やすことができます。Timed Writingでは、短編の外国のバラエティー動画を視聴し、その動画についての概要や感想を英語で記述するアクティビティが行われます。この活動を通じて、自分の意見を英語で表現するスキル、Speed Readingと同様に英単語量の向上、状況理解力の向上が期待されます。これらのアクティビティが好きな理由は、様々な知識を得ながら、同時に自分の言語能力や読解力を向上させることができるからです。どちらのアクティビティも飽きずに楽しんで取り組むことができ、英語に関するスキルを高めていくことができる素晴らしいものだと考えています

おわりに

この授業を通じて、新しい知識を得るだけでなく、自分の言語スキルや読解能力を向上させ、広い視野を持つことができます。これらのアクティビティは飽きずに楽しんで取り組むことができ、自らの成長を感じることができるものばかりです。今後もこのような学びの機会を大切に、更なるスキルの向上と知識の拡充に努めていきたいと思います。授業への感謝と共に、これからも充実した学びと成長が続くことを期待しています。自身の英語力の向上、何かを成し遂げたことができたときの達成感を感じられる授業です。自身の頑張りがしっかり目に見えて体感できると思います。これからも頑張ってください。最後までお読みいただきありがとうございました。

English 3とEnglish 4について (Reed先生・Miller先生)

国際学部国際学科国際文化専攻2年

学籍番号 22WA064 氏名 西川 明里

学籍番号 22WA077 氏名 鎌苅 美月

はじめに

English 3 とEnglish 4 の授業は、国際学部の学生が2年生の春学期及び秋学期に必ず受講しなければいけない必須科目です。これらの授業はそれぞれ、春学期にEnglish 3、秋学期にEnglish 4 が週2回開講されます。春学期は西川がReed先生、鎌苅がMiller先生、秋学期は西川がMiller先生、鎌苅がReed先生のクラスです。このレポートは、「English 3 の授業について」、「English 4 の授業について」そして「授業を通して学んだこと」について書いたものです。

English 3 の授業について

English 3 は春学期に週2回開講される必須科目です。

この授業では、主に自分自身のアバターを使用しながら学習しました。生徒それぞれが、好きな容姿、出身国、年齢などを決めてアバターを作成しました。作成したアバターの家族構成も作り、詳しい情報まで自分たちで考えました。その次に、アバターの自己紹介動画を作りました。自分が作ったアバターの特徴に合わせて、音声録音をしました。

そして、3、4人のグループを作り、日本旅行計画のプレゼンテーションをしました。これにもグループメンバーのアバターを使い、それはそれぞれのキャラクターに合わせた計画でなければいけません。例えば、元々決めていたアバターの趣味がサーフィンであれば、マリンスポーツで有名な沖縄の旅行計画を立てます。他には、宗教がイスラム教であれば豚肉を食べることができません。このように、メンバーそれぞれのアバターの趣味や宗教などに合わせて旅行計画を立てました。旅行計画の中には、観光、体験、伝統の食べ物などがあり、旅費や時間配分まで詳しく調べました。

この作業にはメンバーとの話し合いや協力、コミュニケーションが重要でした。お互いのアバターについて紹介して、どのような部分が共通しているのか、どのアクティビティが楽しめるのか、などの話し合いをしました。

English 4 の授業について

English 4 は秋学期に週2回開講される必須科目です。

この授業は、プロジェクト1とプロジェクト2の計2回に分けたプレゼンテーションの発表が主体の授業です。プレゼンテーションは、「Everything Everywhere Daily」という名前のポッドキャストで毎日配信されるエピソードの中から一つ選択し、そのエピソードに関する授業を生徒自身が行うという内容です。

より詳しく内容を説明すると、まず、3人または4人のグループに分けられ、決められた年代、月内に配信されたエピソードの中から1つエピソードを選択します。選択したエピソードを、①ウォームアップディスカッション ②エピソードの説明 ③アクティビティ ④クロージングディスカッション、といった4つの構成に分け、クラスメイトの前で実際に授業を行いました。またそれに加え、よりエピソードの内容の学習を促すために、クイズレットで単語帳を作成したり、グーグルフォームで授業後の

生徒への課題としてクイズを作成したりしました。

この発表はこの流れが2回繰り返されるので、1回目に先生から得られたアドバイスなどを2回目に活かすことができました。また、通常のプレゼンテーションと違い、授業という形式で「先生」として生徒に教えなければいけないので、教える内容を自分のものとし、それをいかに分かりやすく伝えるか、といったことも学ぶことができました。

授業を通して学んだこと

これらの授業では、コミュニケーションやスピーキングが重要であると学びました。英語の問題を解くことはできても、自分の考えをすぐに英語に変換して話すことはとても難しいです。しかし、この授業はコミュニケーションが多い環境で、「人と話す」、「人と協力する」場面が常にありました。これは英語を学習する上で必要なことであると学びました。人とコミュニケーションを取りながら学ぶことで、記憶に残りやすいと感じたからです。

おわりに

今回このカレイドスコープを書くにあたり、English 3とEnglish 4の授業で何を目的に進められていたのか、また、受講して何を学んだかを再確認できる良い機会となりました。この2つの授業は、英語だけでなくプレゼンテーションのスキルや、コミュニケーション、人に教えるスキルなど、数多くのことを学べる授業です。この授業を受ける人は、このようなことをぜひ吸収してほしいと思います。

Advanced English 3・4（原先生）

国際学部 2 年
学籍番号 22WA060
氏名 重栖 愛結佳

はじめに

Advanced English 3 では、英語の教授法を 2 回のミニ授業を通して学び、Advanced English 4 では、パラグラフライティング、エッセイライティングのスキルを身につける授業です。本稿は、Advanced English 3・4 の授業内容や、授業を通しての感想、学んだことや得られたことをまとめたものです。

授業について

Advanced English 3・4 とともに、2,3,4 年が履修できる授業です。両方の授業が少人数制で、私にとっては、同学年以外の学生と関わる初めての授業でした。

Advanced English 3 は、主に教職を取っている学生向けの授業です。英語の授業を教える上で重要なことがたくさん書かれている英語のテキストの内容を理解し、それらを学生に教えるミニ授業が 1 回、同じテキストの内容に沿って、授業のゴールを伝え、アクティビティも含めた授業を実際に自分たちで実践するミニ授業が 1 回の計 2 回のミニ授業を実施しました。授業後にはリフレクション（感想やその日の授業で学んだこと）を書きました。授業後だけでなく、ミニ授業が終わった直後にも良かった点や改善点を言い合う時間がありました。ミニ授業は文面だけ見るとハードルが高そうに感じられるかもしれませんが、他の人の授業を見て学ぶこともできますし、改善点を聞き、次の授業に生かすこともできます。また、数人での発表なのでそこまで大きなプレッシャーはなかったです。一発目に当たった人たちは難しかったのかなと思います。3 年生や 4 年生の留学経験者のプレゼンテーションも聞きました。その他には、オーストラリアからの短期留学生が Advanced English 3 の授業に来て、一緒に授業を受けたこともあります。クラスの数人が夏休みに短期留学に行き、現地で Japanese Culture Workshop を行う予定だったので、それらを留学生たちに披露しました。Japanese Culture Workshop は「割り箸鉄砲」「おりがみ」「福笑い」など日本に昔からある遊びを英語で教える、といった内容です。

Advanced English 4 は、パラグラフを書けるように練習する授業ですが、TED TALK についての発表も行いました。TED TALK は、ご存知の方も多いと思いますが、私はよく知りませんでした。簡単に説明すると、各分野の専門家や著名人などによるスピーチを公開したものです。ためになる内容のものや、笑える内容のものもあるので、ぜひ YouTube で見てみてください。そんな TED TALK の内容を発表し、ディスカッションを行ってもらい、というようなプレゼンテーションをしました。テキストを用いた発表では、テキストの一部分の内容を教えるような感じで、Advanced English 3 で行った内容と似ています。



留学生に向けて Japanese Culture Workshop を披露している様子
(Advanced English3)

授業を通して学んだことや感想

前述の通り、Advanced English 3は教職を取っている学生向けの授業です。私は教職を取っていませんが、それを知らずに履修していました。なぜ履修したのかというと、原先生の授業だったからです。原先生の授業からは必ず学びを得ることができます。たくさんの授業の中で発表する機会がありますが、原先生の授業内でのプレゼンテーションは、良い意味で捻りが必要です。工夫することです。その捻りが私たちのプレゼンテーションスキルを向上させてくれていると感じます。プレゼンテーション後にリフレクションを行うことで、自分の欠点や弱点が明確に見つかり、次に生かすことをできるようにしてくれます。また、Advanced English 3で行った、授業を実践する発表では、時間配分や傍聴者（発表内では学生）の反応を見ること、反応させること、退屈にさせないことなど、様々な部分に気を使わなければいけませんでした。先生を目指している人だけではなく、全てのプレゼンターに言えることですが、いかに傍聴者の興味を惹きつけることができるかが重要なのかを学びました。

おわりに

カレイドスコープを執筆するに当たって、私が授業を通して何を学ぶことができたのかを再確認しました。Advanced English 3・4で学んだこと全て、他の授業、大学以外の場所でも生かせることができると思います。Advanced English 3・4を受けることができて本当によかったです。

グローバルビジネス論Ⅱ（石井先生）

国際学部国際学科 2 年

学籍番号 22WA155

氏名 川口 由羽

はじめに

本稿では、グローバルビジネス論Ⅱでの授業について記します。この授業では、石井先生の指導の下、生徒が約10名という少人数の講義であり、先生からの質問に受け答えし、時には生徒の方から質問を投げかけることのできるアットホームな雰囲気のクラスです。この授業では、主に国内、国外のビジネスについて学びます。先生の経験談を元に様々な話が聞けることも特徴的です。そして、このレポートでは三つの主題について記したものです。一つ目は「授業内容」について、二つ目は「授業内アクティビティ」について、三つ目は「授業で学んだこと」についてです。

授業について

本節では、授業について記します。グローバルビジネス論Ⅱの授業では、「業界地図」という投資や就職、ビジネスについて掲載された本を参照に様々な業界について学びます。また、教科書はほんの参考程度であり、ほとんどは先生の経験談に基づいた話やビジネスの仕組みについて学びます。グローバルなビジネスについて考察するため、日本の企業や経済の仕組みだけでなく、海外のビジネスについても考えます。そのため、板書には日本語だけでなく英語が多く使われることがあります。また、この授業には留学生もいるため、各々自分の国のビジネスについて考え、日本の経済と比較して学ぶことができます。

授業内アクティビティ

本節には、授業内アクティビティについて記します。この授業では、ただ先生の話聞くだけではなく、自分で調べることも多くあります。例えば、株取引がどのようにして行われているのかです。ほかの先生は誰も株式のことに触れる人はいないと思いますが、石井先生の授業では株について学ぶことができます。「株探」というサイトを使って学びます。このサイトでは日本企業や海外企業の株の状況についてリアルタイムで見ることができます。そのリアルタイムのグラフから今何が起きているのかを考え、経済の動向を知ることができます。最初は数字がたくさん並び、何のことなのか全くわかりませんが先生が丁寧に説明してくださるので、どんなことについて書いているのか、この数字が何を意味しているのかを理解することができます。株のことに興味がある人や、やってみたいと思う人には最適の授業だと思います。また、レポートの課題ではビジネスに関係しているものについて自分の気になる企業や世界中の企業について書きます。自分の気になる企業を深く追究できます。そのため、ビジネスを楽しく積極的に学べます。

授業を通して学んだこと

本節では、授業を通して学んだことを記します。授業で学んだことは、大きく分けて二つあります。一つ目は、ビジネスについての知識を学べたことです。私は、もともとビジネスに興味があるわけではなく、「いつか学べばそれでいいや」というスタンスでした。しかし、この授業を受けてビジネスを知

る楽しさを学ぶことができました。先生の体験談からもビジネスを知っておくと社会に出たときにどれだけ有利な位置に立てるのか学ぶことができました。先生の経験はとてもユニークで、何回話を聞いても飽きません。楽しく、面白くビジネスを学ぶことができます。二つ目は、行動力が身についたことです。この授業はとても専門性が高く、難しい単語がたくさん出てきました。そのため、その都度調べる癖をつけました。わからないままにするのではなく、調べることでよりその授業の内容が理解できます。また、自分の興味のある分野は特にもっと知りたいという気持ちが強くなり行動に繋がっていきました。

おわりに

本稿を書くにあたって、今学期に学んできたことを見返し改める機会になりました。このように文章にして文字として可視化することで、何ができていたのか、そうでなかったのかを振り返ることができました。この授業が終わるまでに残された時間は数少ないですが、残りの時間も懸命に取り組み有意義な時間を過ごしたいです。また、クラスの代表としてこのように本稿を書く機会をくださった先生にとっても感謝しています。

グローバルビジネス論Ⅲおよび グローバルビジネス論特殊講義Ⅰ（足立先生）

国際学部国際学科 2 年

学籍番号 22WA141 氏名 新納 頼揮

学籍番号 22WA087 氏名 Batsaikhan Uchral

はじめに

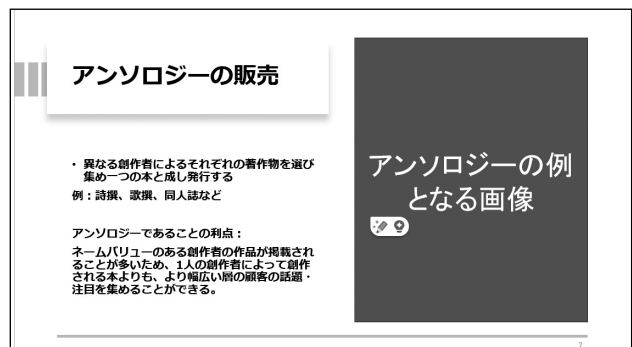
本稿は、グローバルスタディーズ専攻における選択必修の授業である「グローバルビジネス論Ⅲ」および「グローバルビジネス論特殊講義Ⅰ」に関するレポートです。

また、本稿はグローバルビジネス論Ⅲおよびグローバルビジネス論特殊講義Ⅰについて、「グローバルビジネス論Ⅲについて」「グローバルビジネス論特殊講義Ⅰについて」「授業を通じて学んだこと」の三点を記したものです。

グローバルビジネス論Ⅲについて（新納頼揮）

授業は、グローバルビジネスを行う上での基板となる著作権や商標権などの知的財産についての学びに焦点をあてたものになります。あらかじめ指定されたテキストを用い、1 週間もしくは 2 週間に一種類の知的財産を学び、およそ 4 週間に 1 度それらについてのプレゼンテーションを行います。

プレゼンテーションでは、取り上げる知的財産について、それらがビジネスに生かされている実例を紹介し、その知的財産をビジネスで扱う上でどのようなことに気をつけなければならないかを紹介するのが主になります。プレゼンテーションを完成させるためには授業で培った知識だけでなく、テキストを熟読する必要があるため、毎回の授業で自らの知識が向上していくのを実感することができ、充実した授業でありました。



著作権を活用したビジネスについての
プレゼンテーションで使ったスライドの一例

グローバルビジネス論特殊講義Ⅰについて（Batsaikhan Uchral）

授業は、ビジネス取引と契約に焦点を当て、具体的には売買取引、販売代理店契約、フランチャイズ契約の複雑な側面についての包括的な探求をします。先生はこれらのトピックの微妙な理解を巧みに促進し、それらが日本のビジネス環境において果たす重要な役割を明確に示されていました。その教授法は明瞭かつ精密であり、実用的な例の統合により、複雑なテーマが広く理解され、授業全体が極めて魅力的なものでありました。

授業を通じて学んだこと

グローバルビジネス論Ⅲでは、継続的な利益を生み出すためにどのように知的財産を取り扱う必要があるのかを学びました。例えば、著作権を生かしたビジネスを行う上では、権利の帰属に関する条項を明確にしておくべきであったり、オリジナリティが顕著に表現されているべきであったり、著作物が共

同制作によるものである場合のリスクを考慮すべきであったりすることなど、それぞれの知的財産について深く学ぶことができました。

グローバルビジネス論特殊講義Ⅰにおける売買取引についての授業では、ビジネス関係の基本原則が明らかになりました。クラスディスカッションやプレゼンテーションなどの取り組みにおいては、実践的なスキルだけでなく、チームワークや効果的なコミュニケーションにおいても重要な教訓を学ぶことが出来たと考えます。

どちらの授業も多くの事例研究や実践的なシナリオが組み込まれており、学生には理論的な概念を現実のビジネスコンテキストで位置付ける機会が与えられていました。これらの経験は、学んだ知識やスキルを将来のビジネス活動に積極的に適用する助けになると考えました。

おわりに

グローバルビジネス論Ⅲおよびグローバルビジネス論特殊講義の授業内容は非常に豊かで知的に刺激的な経験に満ち満ちていました。理論的な洞察と実践の融合は、特に協力的なプロジェクトにおいて顕著にあらわれ、基盤となる知的財産だけでなく、ビジネスにおける取引と契約の微妙な側面に対する包括的な視点が提供されていました。先生の指導力と、クラスメイトの積極的な参加が相まって、ビジネスダイナミクスの理解を強化するだけでなく、今後のプロフェッショナルな活動において、これらの洞察を継続的に学習し応用する姿勢が強化されていました。これらの講義は、ビジネスの基盤とビジネスのしくみづくりについての学問的かつ実践的な理解を高める上で、非常に有意義な学びを与えてくれました。

国際開発支援論Ⅰ（平井先生）

国際学部国際学科2年

学籍番号 22wa173

氏名 坂本 愛海

はじめに

本稿は、「授業の概要（貧困課題）」「授業の概要（ジェンダー課題）」「後輩へのメッセージ」で構成され、国際開発支援論Ⅰの授業についての情報や、授業を通じて得た知識、私自身の価値観の変化が記載されています。

さて、ここで私は読者の皆様にお聞きしたいことがあります。あなたは、「男らしくて頼りになるね。」と褒められた経験や、「ハンカチもっていないの？女子力ないね。」と嘲笑された経験、「男なんだからめそめそ泣くな。」と叱られた経験、「どうして男の子なのに髪を伸ばしているの？」と問われた経験はありますか？また、あなたの知人や親族などの身近な人に、“貧困”といえる状況にいる人はいますか？

あなたの上記の問いへの答えが現時点で「いいえ」であるとしても、この授業を受講したのちにあなたの答えは「はい」に変化しているかもしれません。

授業の概要（貧困課題）

皆様は、“貧困”とはどのような状態を指す言葉であると考えますか？恐らく、「生きていくことが困難なほどにお金に困っている状態」が貧困であると考えの方が多いかと思います。もちろん、その状態は貧困でありそれは、生活水準が絶対的な意味で低い状態「絶対的貧困」と呼ばれます。しかし、貧困の種類はそれだけではありません。その国の文化・生活水準と比較して困窮な状態または、世帯収入が平均的な世帯収入の50%未満である状態の「相対的貧困」が存在します。貧困は極限状態であるというイメージをもっていた私にとって、相対的貧困の存在を知ったことは非常に衝撃的でした。また、授業内で平井先生が見せてくださった一本のビデオも印象的でした。そのビデオは、一日中カカオの収穫を行うガーナの子どもを取材したものです。視聴後に、「毎日何気なく口にしているチョコレートの裏側は、これほど残酷なものであったのか。」と衝撃をうけたことをよく覚えています。労働に従事しているこどもたちは、毎日カカオを見て触れているのにも関わらず、カカオが何になるのかさえをも知らず、もちろんチョコレートの味も知りません。そのような現状を知り、大変心が痛みました。私は、「危険で不平等な働き方を変えたい。」と考えたことをきっかけに、貧困課題という分野に興味をもち始め、フェアトレード商品の購入・彼らを応援する支援団体についての調査を開始しました。

授業の概要（ジェンダー課題）

ジェンダー課題に関しましても多くのことを学んだのですが、中でも特に印象に残っているのは、“アンコンシャス・バイアス”です。アンコンシャス・バイアスとは、人や社会が無意識のうちに性差や男女の役割について固定的な思い込みや偏見を持つことのことです。例えば、女らしさ、男らしさといった言葉に代表されるような、男女の役割について固定的な観念を持つこと、性別により評価や扱いが差別的であることを指します。この存在を知り、私は、無意識に性別によって何かを想像したり期待したりしてきたことに気が付きました。それをうけ、「女性だから」や「男性なのに」などの発言のよ

うに、女性らしさ、男性らしさの決めつけが行われるべきでないと感じました。同時に、私自身の過去の発言（「彼は女々しいから好きじゃない。」など）を反省すべきであると考えたことが印象に残っています。上記で挙げたことの他にも、平井先生ご自身の子育てや研究の体験談を聴くことや、ゲストスピーカーの講演を聴くこと（春学期では、株式会社ココウエルの社長である水井裕さんに来ていただきました）、頻繁に行われるディスカッションに積極的に参加すること、毎授業終了後に提出が求められる“ミニツツペーパー”で振り返りをすることによって、貧困課題やジェンダー課題への理解をさらに深めることができました。

後輩へのメッセージ

授業終了後に提出するミニツツペーパーという課題では400字程度書くこと（超えることは可能）が要求されますが、授業が大変興味深く、考える・感じることがあまりにも多いため、私は毎回500～600字書いてしまっていました。それほどに、この国際開発支援論Ⅰは、価値観を刺激してくれる授業です。

もし、皆様がこの授業を受講するのであれば、多角的な視点で物事を解釈する努力をしたり、積極的にディスカッションに参加したり、平井先生に質問をしたりして、主体的に授業に参加してほしいと考えます。授業への主体的な参加と、新しい視点での学びを大切にし、自らの成長と社会への貢献につなげていってください。

おわりに

私は、この国際開発支援論Ⅰの授業を通じて、世界の貧困とジェンダーに対する意識が大きく変化しました。それらに対する理解が深まる一方で、自分ができる小さな行動から社会への貢献が始まることを実感しました。本稿から、貧困課題とジェンダー課題について少しでも興味をもっていただければ幸いです。最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

国際リーダーシップ論（藤川武海先生）

国際教養学部国際教養学科3年

学籍番号 21CC113

氏名 小林 翔太

はじめに

国際リーダーシップ論では国際関係やリーダーの役割に焦点を当て、各国の内政と外政について考察します。国際情勢や歴史、地理、時事問題を踏まえ、指導者の本質についても深く議論します。国家間やリーダーの関係における様々な側面を通じて、国際社会を探究します。学生は国際的なリーダーつまり指導者の役割や国際社会に対する視点を深め、国際問題に対処する方法や国際社会における人間の在り方について学びます。授業では英文資料を読み解き、専門用語を習得しながら英語力も向上させていきます。歴史と現在の対話を通じて、包括的で多角的な視点で世界観を身につけることを目指します。

授業の目的

本授業の目的はリーダーが抱える課題とその解決策を探究することです。世界が複雑に絡み合った状況下でリーダーという役割はますます重要性を増しています。リーダーは単なる国内の問題だけでなく、国際的な課題にも直面しており、多様な文化や価値観、政治や経済の違いによる相互影響が大きな影響を及ぼしています。このような状況下で、リーダーが直面する課題の一つは、異なる国々や地域の利害関係の調整です。多国間の交渉や協力を促進し、国際的な危機や紛争を解決するために、指導者はバランス感覚や外交手腕を駆使する必要があります。また、国際社会におけるリーダーシップは、持続可能な開発や環境問題、人道支援など、様々な分野において責任を負うことも求められます。これらの課題に対処するためには、リーダーシップの柔軟性や協調性が欠かせません。リーダーは異なる国々や文化に対する理解を深め、包括的な視野を持ちながら行動する必要があります。さらに、国際的な課題に対処するためには、国内外のリーダーシップチームや国際機関との協力が不可欠です。多様な利害関係を鑑みて連携や協働を通じて、持続可能な解決策を見つけ出すことが求められます。そのようなグローバルで活躍できる人材の育成を目標とし授業は展開されます。

授業を通して学んだこと

授業を通じて、国際問題や身の回りで起こっている諸問題についての理解力と洞察力が広がりました。様々なニュース記事や情報源を通じて、世界中で起こっている課題や問題点を学びました。自分の意見を形成し、発表することで新たな理解を得られました。意見発表を通じて先生や学生と意見交換することで、問題に対する自身の知見が深まりました。異なるバックグラウンドや考え方を持つ学生たちとの議論は、自分の視野を拡げる機会となりました。このような多くの学生と意見交流をする機会を得たことで、これからの人生に多大なる影響をもたらすことになると思います。

おわりに

国際リーダーシップ論を通じて先生や学生と交流することで大きく成長することができました。初めは自分の意見を発表するという行為にたいして不安がありましたが、藤川先生が私たち学生の意見を尊重し、学生第一で授業を進行、授業中の雰囲気作りをしてくださるおかげで物怖じすることなく意見を発表することができました。これから先、国際リーダーシップ論で学んだ経験を自分たちの進路で活かして少しでも貢献できるように引き続き頑張っていきたいです。

自主研究（小松先生）限界を破る

国際学部国際学科 2 年

学籍番号 22WA087

氏名 Batsaikhan Uchral

はじめに

自分の限界をどうやって知るのか？限界を知る唯一の方法は、自分の限界を試すためにさらに多くのことを続け、それに近づいていると感じたら、現在の取り組みを向上させ続けることだ。私にとって新しい言語を学ぶことは、自分の限界を打破する一つの方法である。言語は別の文化、視点、生き方への扉であり、だからこそ新しい言語を学ぶことは容易ではない。言語を勉強することとは、単なる単語を学ぶことだけでなく、それと一緒に全く新しい世界を学ぶことなのである。だからこそ、新しい言語を学ぶことは非常に魅力的であり、そこに私がヒンディー語を自主研究で学ぶ理由がある。

私は子供の頃から常に他の文化や言語に興味を持っていた。例えば、フランスのロマンティックな映画やロシアの戦争ドキュメンタリー、アメリカのロマンティックコメディなどが好きだった。しかし、歌やダンス、美しいビジュアルの映画が見たい気分の時には、いつもボリウッド映画を選んだ。ボリウッド映画には、音楽やダンスの中の興奮、彼らが歌う独自の言語、登場人物の生き方がすべて表現されていた。歌詞やセリフで使われる言語が私にとって非常に魅力的だった。そこで、小松先生がヒンディー語を教えていると知ったとき、私は即座に申し込んだ。

授業の流れ

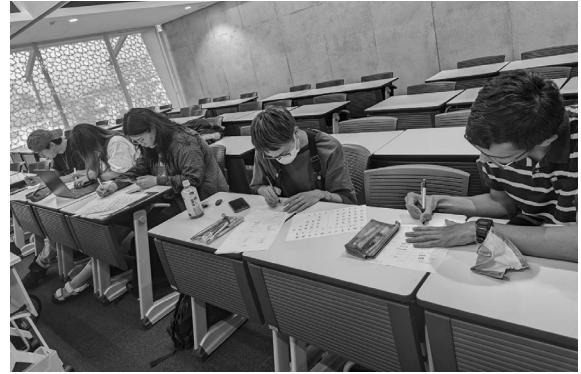
新しい言語を学ぶ旅が始まるとき、私は不安で、困難が待ち受けていると予想していた。しかし、私のその不安は、私たちにとって初めての言語の探求を緻密に始める巧みな教育アプローチによって迅速に軽減された。先生は巧妙にコースの軌跡を明らかにし、構造と目的意識を育むよう心掛けていた。特に豊かだったのは、歴史的な物語と言語指導を巧みに絡めた点で、情報だけでなく魅力的な文脈が提供されていたと思う。各クラスの冒頭で、前回のセッションで学んだ内容に関する簡単な評価が行われ、これは復習の手段と理解度の測定の両方として機能した。この定例の評価は、獲得した知識の定着を強化するだけでなく、先生が私たちの進捗を把握し、次に進む前に再学習が必要な領域を特定するための診断ツールとしても機能した。このアプローチにより、動的で適応力のある学習環境が生み出され、各生徒の理解のペースが認識された。そして、より包括的で効果的な学習体験が促進されたと思う。同時に言語習得の複雑さが解明されただけでなく、楽しく魅力的な雰囲気が教室に広がったのは確実である。その結果、不必要なプレッシャーが消え、より自然で楽しい言語習得プロセスになった。教室の雰囲気は、楽しくかつ情報豊かであった。履修登録をしていない学生も、楽しい学習環境のために参加することもあった。

自主研究を履修学習した感想

この言語コースに参加したことは、初めの心配をはるかに超えて、非常に満足のいく決断であった。基本から始め、歴史的な物語を言語指導に織り交ぜる方法論は、学習を楽しいものにし、新しい言語を習得する際に通常伴うストレスを軽減してくれたと思う。また、時折インドからの留学生であるゴータムさんがクラスに出席し、ヒンディー語の知識を惜しみなく共有し、文化の微妙なニュアンスについて

示唆を与えてくれた。このことが、ヒンディー語の学習経験を一層豊かにしていると言えるだろう。

教室の包括的で歓迎的な雰囲気は、正式に履修登録していない者にまで広がり、全体的な良い学習体験を一層引き立てている。このコースは単に言語スキルを拡充するだけでなく、異なる文化への魅力的な窓を提供してくれる。この自主研究を選んだことは間違いなく満足のいくものとなった。



みんなで一緒に練習問題を解いている様子

終わりに

冒頭で述べたように、自分の限界を試すことは難しいことだ。けれど、情熱を抱く、あるいは興味を持つ何かを見つけ、それについて深く学ぶことは非常に充実感があると思う。知識の追求には限りがなく、学ぶことは世界だけでなく、自己を知る深い旅でもある。自分の限界を試し、拓けることは個人の成長にとって不可欠である。この言語コースは私にとって変革的な経験であった。先生が学習プロセスに楽しさをもたらし、仲間の学生たちが熱心に学ぶ様子が、忘れられない学びの環境を作り上げてくれた。この旅を通じて、言語だけでなく、自分自身についても貴重な洞察を得た。このコースで築かれた思い出は、永遠に大切にされるものである。皆さんにも、自分の興味を追求し、絶え間ない学びの旅に乗り出すことをお勧めする。そうすることで、素晴らしい個人的および知的成長につながるに違いない。

自主研究（Reed先生）

国際学部国際学科 2 年

学籍番号 22WA155

氏名 川口 由羽

はじめに

本稿では、自主研究について記します。私の受講する自主研究は、Jake先生の下、7人の生徒と共に行います。この自主研究では、海外のボードゲームを通して、英語やコミュニケーションを学びます。ボードゲームの種類はたくさんあり、その中から自分の好きなゲームを選ぶことができます。日程は不定期であり、都合のいい日に集まります。本稿では、3つの主題に分けて述べます。1つ目は、「授業内容」について、2つ目は、「ステレオタイプの払拭」について、最後には、「授業を通して学んだこと」について記します。

授業内容

本節には、授業内容について書きます。この授業は、主に海外のボードゲームを使い、英語とコミュニケーション、ゲームのやり方等様々なことを学ぶことができます。人数は7人であり、この中で2チームに分けます。それぞれのチームで別々のゲームを進行していきます。頻度としては、月に2, 3回が目安です。（チームの予定が合えばそれ以上する時もあります。）Jake先生がゲームマスターになり、ゲームを進行してくれます。英語のボードゲームであるため、ゲーム中は基本英語が中心に話されます。この授業は、1年を通して行われるので、春学期と秋学期では違うゲームをしました。また、春学期には、お互いのチームでやったゲームを教え合うこともしました。



Darklight: Memento Moriという
ゲームをしている時の様子

ステレオタイプの払拭

本節には、ステレオタイプの払拭について書きます。普通、ゲームをすると言われると女性と男性どちらを浮かべるでしょうか？大体の人は男性のことを浮かべるのではないのでしょうか。私は、このゲームの自主研究に参加した中で唯一の女性でした。また、ゲームが好きと言われるとそうではありません。私はほとんどゲームをしない人でどっちかというとなゲームは苦手なタイプでした。なぜ、私がこの自主研究を選んだのか。それは、自分が新しいことに挑戦してみたいと思ったからです。実際、この自主研究に参加して、とても楽しかったです。女性も男性も関係なくみんなで楽しめるものそれがゲームであると、改めて実感しました。また、日本人であるから、英語のゲームはできない。そんなことはありません。私は英語について自信があるわけでもなく、ネイティブスピーカーでもありません。そのため、分からない単語や文法があっても当然です。日本人だから海外のゲームはできないというのはただの偏見です。誰でもできるようになります。先生はもちろん、周りの人もサポートしてくれます。だから、「できない」なんてステレオタイプだということをこの自主研究では考えさせられました。

授業を通して学んだこと

本節では、授業を通して学んだことについて書きます。私の中でこの自主研究を通して一番学べたと思うことは英語を使って行動に移すことです。普段の授業では英語について学びますが、この自主研究ではただ単に英語を勉強するだけではなく、英語を使ってゲームをするという一歩踏み込んだところまで学びます。もちろん知らない単語や分からないことはたくさんあります。しかし、分からないことがあることで、自分で調べる力や流れから推測するという力がついたと思います。ゲームをしながら学べるので、とても楽しく学べます。また、英語に慣れることができ、リスニングの向上にもつながりました。そして、自分から英語を話そうという機会が増えたのでスピーキングの技能向上にもつながりました。この自主研究から学んだことは数知れないです。

おわりに

本稿を書くにあたって、この一年間やってきたことを思い返すことができました。ここまで楽しんでやってこられたのは、仲間たちと先生のおかげだと思います。大変なこともありました。自分の新たな挑戦ができたと思います。この自主研究以外でもゲームをやってみようと思います。あと少しの間、全力で楽しみたいです。また、このように執筆させていただく機会を与えてくださったJake先生にも感謝しています。

自主研究（蛭田先生）

国際学部国際学科 2 年

学籍番号 22WA141

氏名 新納 頼揮

はじめに

私が受講した自主研究は、蛭田先生の指導の下、現在世界で起こっている問題の本質や国際関係や国家間の衝突について、地政学的視点に基づき理解し、現在の世界の状況および将来起こりうる国際情勢の動向を予測する能力を身につけることを目的としています。

授業では現在の国際関係に関する問題について学生が課題意識を持ち分析し、先生からのフィードバックを受けながら自ら具体的な問いを立て、リサーチし、考察し、レポートを作成します。

本稿では、「授業について」「レポート作成について」「授業を受けて学んだこと」について記します。

授業について

自主研究の授業は、世界を見る新たな視点を得るという目的のもと「地政学的に半島では紛争が起こりやすい」という問題の原因を解き明かすところから始まります。学生はそれぞれの半島に位置する国々において、過去に起きた戦争などの歴史についてリサーチしパワーポイントにまとめ、全体に発表し共有します。その共有された内容に先生がフィードバックを行い、次のリサーチ課題が与えられます。毎回の提出した課題についても先生がアドバイスやフィードバックをくださるため、リサーチ力の向上や、相手に情報を伝える力が向上していることを実感しながら、課題に取り組むことができます。

授業で取り扱う内容が深まり、基礎的なリサーチ力が身につくと、紛争が勃発する原因について学習し始めます。それについて学生はそれぞれテーマを選び、夏休みをまたいでレポートを作成するための情報収集を行い、実際にレポートを書き始めます。

レポート作成について

前述したとおり、授業では、自分で設定したテーマについて夏休み中にリサーチを行い、2～3週間に1度リサーチしたことを共有し、それを受けて先生から再度取り組むべき課題を提示していただきます（私は、戦争がなぜ泥沼化するのかをテーマにレポートを作成しました）。レポート作成の課題においては、設定したテーマについて「なぜそのテーマを選んだか（理由）」「なぜそのテーマが大切なのか

（背景）」「何を明らかにしたいのか（仮説）」を明らかにするプレゼンテーションを行うことから始まり、「序論」「本論」「結論」と各回記述し研究レポートを完成させます。

レポート作成では、自らがテーマにしたいトピックを先生が尊重して下さり、具体的に何をすべきかを提示してくださるので、初めて取り組むテーマであったり、初めて本格的なレポートを書くという状況であったりしても、迷いなくレポート作成に取り組むことができます。

①朝鮮戦争の始まり

・アチソン演説 (1950.1)
米国のアジア政策についての演説
…「対共産主義防衛線」をアリューシャン列島・日本・沖縄・フィリピンを結ぶ線とし、台湾と韓国を除く（＝アチソンライン）

アチソン演説を受け北朝鮮（ソ連）は韓国に南侵
→朝鮮戦争勃発 (6.25)

朝鮮戦争において極めて重要な情報であるアチソン・ラインを地図に表したもの

韓国を攻めても、アメリカは反撃してこない……？

紛争の泥沼化についての研究において、泥沼化した戦争の例として挙げた朝鮮戦争についてリサーチしたパワーポイントの一部

授業を通じて学び得たこと

授業を通じて学び得たことは、授業の目標である「世界を見る新たな視点」を得ることができたことです。私はこの授業を受けるまで、国際情勢や国際関係、歴史について地政学的視点から捉えたことがありませんでした。しかし、この自主研究の授業を履修したことにより、今後の国際情勢を考える上で、地理・歴史・政治・文化の面から問題の原因を解き明かす地政学的視点が、いかに重要であるのかを学ぶことができました。

おわりに

今回の自主研究の授業では、特に地政学的視点に基づいて国際情勢を捉えることを重視していました。この学びを生かして、私が興味を持っている国際的な分野にどのようにアプローチすることができるのか、改めて、諸問題について捉え直そうと考えています。

私は、地政学的視点を持つことは、大学生活だけでなく、これからの世界を生きていく上で非常に重要なものであると考えています。自主的な学びを尊重しつつも適切なフィードバックや指導を行い、学びを促してくださったこと、心より感謝申し上げます。

2. 留学体験記

国際学部では、下記の特色ある留学プログラムを展開しており、ここでは参加した学生の生の声として留学体験記を紹介する。今回、紹介する留学体験記の対象となったプログラムは以下のとおりである。

「グローバルスタディーズ専攻学生対象の夏期短期語学留学プログラム

(米国カリフォルニア大学バークレー校)」

「国際文化専攻学生対象のNICEプログラム (米国ハワイ大学マノア校)」

「コンセートレーションパッケージ・プログラムの研修・留学プログラム

(米国シリコンバレー、およびオーストラリアアデレード大学)」

「国際文化専攻学生対象のダブルディグリー・プログラム

(ハワイ大学カピオラニ・コミュニティーカレッジ)」

また、国際教養学部のSpring Sessionに参加した学生の体験談も紹介する。

人間関係の大切さの再認識

国際学部国際学科グローバルスタディーズ専攻1年

学籍番号 23WA120

氏名 三木 彩葉

2023年の7、8月にカリフォルニア大学バークレー校に3週間の短期留学をしました。今回の留学は、「楽しさ」や「嬉しさ」、「難しさ」という3つの単語で集約することができます。アメリカ文化への適応、コミュニケーションの取り方、チップ文化などです。もちろん授業は本当に楽しく、意義のあるものでした。また、フィールドトリップなど、サンフランシスコや大学近辺のバークレーの町並みをはじめとし、様々な場所を訪問するなど「楽しさ」を思う存分味わうことができました。

しかし、楽しさの反面、初めての場所で分からないことを英語で聞いたり、やりとりをしたりすることはとてもチャレンジング（難しく）で、毎回ドキドキしたりハラハラしたりしていました。

一方、今回の留学で同じグローバル・スタディーズ専攻のメンバーと、とてもなかよくできたことを嬉しく思っています。総持寺のキャンパスでは普段話さない人たちと授業を通して一層仲良くなることができました。また、留学中遭遇したトラブルを、メンバーみんなで協力して自分たちの力で解決することができました。高校の時のように、クラスメートと何かを協力して達成することなど、大学ではないだろうと思っていましたが、日本から遠く離れたアメリカの地で、メンバーが団結して困難（チャレンジ）に立ち向かうことができたことは、とても「嬉しかった」です。

最後に、写真は、授業のフィールドトリップで船に乗り眺めたサンフランシスコです。風が強かったけど、天気が良く、とても気持ちのいい体験をすることができました。もう一枚は、大学のキャンパスを歩いている様子です。大学のキャンパスは広大で、何度も道に迷いました。写真は、校外学習に行く途中で友達と話しながらどんな場所に行くのかワクワクしながら歩いている様子です。



UC Berkeleyでの貴重な体験

ー快適で発見に満ちた留学生活・「Be interactive!」と「無知の知」ー

国際学部国際学科グローバルスタディーズ専攻1年

学籍番号 23WA058

氏名 中野 幹太

この夏、私は、カリフォルニア大学バークレー校に留学しました。バークレーや周辺のサンフランシスコはアジア系やラテン系だけでなく、欧州各国からの移民も多く、様々な国の集住地区があるため、多文化共生社会のありさまをリアルに体験したり実感したりすることができました。結論は、「とても過ごしやすいところ」でした。

大学では、ボキャブラリーを学ぶ授業（Academic Vocabulary）と、フィールドワークを行う授業（Berkeley Experience）を受けました。Academic Vocabularyでは、語源について学びました。単語の意味を深く学習することで、単語の成り立ちや多様な語法について学びました。Berkeley Experienceでは、美術館や街の歴史的な建造物を訪ね、自分の目で見て感じたことをその場で英語で話し合ったりしました。

留学に行く前と行った後では英語を話すということだけでなく、「会話」そのものに対する姿勢が大きく変わりました。現地で授業を担当してくださった先生が“Be interactive”という言葉教えてくださいました。Interactiveとは、「双方向」という意味です。つまり双方向的にコミュニケーションをしようということを言われました。海外では、何か言われたら必ず返し、間違えてもいいから自分の意見を言うことが大切です。これをしないと授業や会話に不参加であるとみなされます。自分が最初に発言するというのは難しいですが、せっかく思っていることがあるのに発言しないのはもったいないと思い、誰かが言う前に自分の考えや意見を発言するようにしました。次第に発言することに抵抗がなくなり、会話が楽しくなりました。また、日本に帰ってからも自信を持って自分から発言できるようになりました。

留学に行って気づいたことは、思ったより自分が日本のことを知らないということです。授業内で、また、大学外で現地の方とお互いの国の話をすることができました。日本の文化や歴史についてはある程度知っていると思っていましたが、いざ説明しようとなると知識不足でうまく説明できませんでした。現地の方にアメリカの歴史や場所について聞くと、歴史をたどりながら丁寧に教えてくれました。海外の文化を学ぶと同時に、もっと日本のことについても知らなければならぬと自分の無知さを再認識しました。

留学は主に語学力を伸ばすために行くと思われがちかもしれませんが、ちょっとした気づきが新しい学びのきっかけになったり、海外で活躍したいという気持ちが強くなったりします。物価が高い、ホームレスが多い、無人の車が走っているなどの驚きや発見が連続した3週間という短い滞在期間でしたが、留学し生活した街が好きになりました。

私は、一年生の夏休みという入学後早い時期に海外留学ができ、日本では体験できない様々なことに気がつくことができました。そして新たな目標ができ、その目標を実現するために、今、努力をしています。このプログラムに参加してよかったです。



Berkeley Experienceでのフィールドトリップ：BAMPFA美術館で作品の説明を受けている様子

「学び」と「驚き」の連続

国際学部国際学科国際文化専攻 1 年

学籍番号 22WA123

氏名 末広 陽菜

私は、アメリカ合衆国ハワイ州オアフ島にあるハワイ大学マノア校で3週間の短期留学をしました。実際にハワイ留学に行き、学んだことや驚いたことがたくさんありました。

ハワイに着いて、初めに学んだことは積極的に話しかけることが大事だということです。ホストファミリーと話すことに初めは恐れていました。初日は、ホストマザーが話を振ってくれましたが、自分から話すことも大事だと思い、次の日からは「今日の授業は何をしたのか」、「放課後は何をしたのか」、「週末は何をするのか」などを積極的に話しました。そうすると、話を広げてくれたり、おすすめの店を教えてくれたりするなど、話題が一気に広がりました。また、日常生活で分からないことがあるときには、迷わず質問することで優しく教えてくれるなど、ホストマザーとの関係性が深まり、安心して生活できる人間関係を築くことができました。

大学では、授業についていけるか不安でしたが、先生がとてもエネルギッシュで自分たちのレベルに合わせてゆっくり、はっきりとした英語を話してくれたので理解しやすく、充実した時間を過ごすことができました。毎日朝8:30から12:30まで授業があり、グループやペアでの活動やディスカッションを中心に授業が展開されました。クラスでは韓国からの留学生といっしょに学び合い、多くの友人を作ることができました。また、週に2回、ハワイ大学に通っている現地の学生と1時間程話す時間がありました。私はこの時間がすごく好きで、お気に入りでした。またNICE プログラムの参加者全員でフラをし、フラの歴史や意味を学ぶなど、ハワイ文化に直接触れることが出来ました。

放課後や休日は、ワイキキやホノルルのショッピングモールに出かけ、買い物をするなど、リラックスして過ごすことができました。移動手段はバスがほとんどで、犬をそのまま乗せていたり、水着が濡れたまま乗車している人があるなど驚きの連続でした。そして、街を歩いていると気さくに話しかけてくれたりすることが多く、みんな優しくフレンドリーでした。

このプログラムに参加し、英語の力を磨くだけでなく、外国人の友達もでき、異文化に触れることができました。日本では決して得ることができない貴重な体験ができた3週間でした。参加して本当に良かったです。



ハワイ大学マノア校での修了

将来への道

国際学部国際学科グローバルスタディーズ専攻2年

学籍番号 22WA119

氏名 Catherina Allenfant

1. 「将来への道」を切り開くきっかけとなったアントレプレナーシップ（起業家精神）文化

このシリコンバレー・スタディーツアーは、私にとって非常に興味深く有益な経験でした。シリコンバレーは技術とイノベーションの中心地であり、世界的に有名なIT企業やスタートアップ企業が集まる場所です。このツアーでは、様々な企業を訪問し、最新のテクノロジーの動向やビジネスの成功事例について学びました。特に印象的だったのは、シリコンバレーのアントレプレナーシップ（起業家精神）文化です。そこでは、失敗を恐れず、新しいアイデアを追求し、協力して成長していく文化が根付いています。この文化から多くのことを学びとり、将来へ向けての道を切り開くきっかけを得ることができました。

スタディーツアーに参加した後、私は自分自身がより創造的なマインドを持ち、グローバル社会の中でリーダーシップを発揮することができるようになりたいと強く思うようになりました。スタディーツアース分野での異なる視点を得たり、新しいアプローチについて理解を深めることができ、これからの私自身のキャリア形成において大いに役立てることができると確信しています。

今回のスタディーツアーを通じて得られた貴重な体験、知識や人間関係を、今後の自身の成長と成功に結びつけたいと考えています。

今回のシリコンバレー・スタディーツアーは、9月3日から9月11日まで開催され、日本の各大学から39名、追大からは私1名が参加しました。

開催地であるシリコンバレーは、カリフォルニア州サンフランシスコ湾エリアの南部に位置し、IT産業を支える革新、技術、起業精神と密接に結びついた地域として知られています。ここには、Apple、Google、Facebookなどの世界的に有名な企業がここに本拠地を置くなど、数えきれないほどのテクノロジー企業、スタートアップ企業や、ベンチャーキャピタル企業が集まっており、まさにイノベーションの中心地となっています。

シリコンバレーを歩けば、テクノロジーの息吹を感じることができます。新しいアイデアが芽生え、次世代の技術が生み出されています。ここに住む人々は、イノベーションへの情熱を共有し、一緒に未来を築いていることに誇りを持っています。シリコンバレーは、テクノロジーを生み出している人々の聖地であり、その魅力に引き寄せられる研究者・技術者や起業家・投資家が世界中から集まっています。ここでは、未来への無限の可能性やエネルギーを肌で感じることができました。

短期間のスタディーツアーでしたが、Apple本社（ビジターセンター）、Computer History Museum、Google本部キャンパス、日系IT企業の「NTT DATA」、スタンフォード大学、シリコンバレーベンチャーキャピタル・Pegasus Tech Ventures等への視察訪問研修や、サンフランシスコ・ベイエリアでのフィールド・リサーチ等が実施され、プログラムは非常に充実していました。

2. Apple Park Visitor Center

Apple本社の特徴的な円形の建物、いわゆる「宇宙船」本社の美しい景色を一望することができる本社キャンパス内のビジターセンターを見学に行きました。Appleらしいモダンでシンプルなデザインが

際立つ大きなガラスのパビリオンが迎えてくれます。そこでは、Appleの製品やテクノロジーに関するインタラクティブな展示物がたくさんあります。Apple Storeでは、最新の製品やアクセサリーを手に入れることができ、お土産（Tシャツなど）を買うこともできます。

3. Computer History Museum

この博物館では、コンピューティングとテクノロジーの歴史に関する貴重な資料や文献を保管・展示しており、そのコレクションは本当に圧巻でした。ここでは、コンピュータ技術がどのように進化・発展し、私たちの日常生活にどのような影響を与えてきたかをつぶさに見ることができます。

4. Google本部キャンパス

Googleの本社、通称Googleplexは、未来のテクノロジーの聖地でした。Googleplexは、まさに驚きのオアシスです。オフィスビルが広がり、周りには美しい自然が広がっています。ここは、働く場所としてだけでなく、創造性が芽生え、新しいアイデアが生まれる場所としても有名です。アンドロイド等のアイコン的な彫刻が点在している広大なキャンパス内では、Googleの社員がブレインストーミングを行うなど、日々協働しイノベーションを実現しています。

5. NTT DATA

日系IT企業のNTT DATAでは、どのようにしてグローバルなIT企業に成長したのかという魅力的な企業発展や企業戦略に関する話をお伺いすることができました。その話がとても刺激的だったので、スタッフとの議論に思わず身を乗り出し、没頭してしまいました。

6. Stanford University

スタンフォード大学の広大なキャンパス内で、スタンフォード大学で活躍している日本人研究者の石川氏、玉巻氏、および小谷氏による講演がありました。その後、膨大なスタンフォード大学の出版物やアパレル等のグッズが多数販売されている大学の書店へ向かいました。そして、私にとって今回のスタディーツアーの最高の瞬間となったスタンフォードメモリアルチャーチを訪問しました。その見事な教会建築は人間の創造性と巧妙さが融合した「建築の驚異」として私の目に映りました。イタリアのロマネスクとビザンチン建築様式が絶妙に組み合わせられた教会の空間の中でインスピレーションに似た感覚を得ることができました。

7. Pegasus Tech Ventures

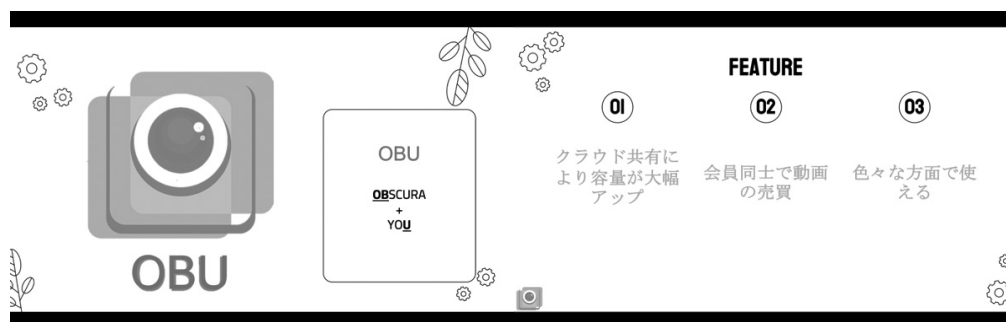
Pegasus Tech Venturesでは、ベンチャーキャピタルとイノベーションの世界に没頭することができました。Pegasus Tech Venturesのチームはプレゼンテーションの中で、彼らの投資戦略について区詳しく説明してくれました。特筆すべきことは、SpaceXへの巨額投資で、宇宙開発における画期的なベンチャーをサポートする未来への投資でした。ベンチャーキャピタルの意図と、技術革新のダイナミクスについてスタートアップが直面する課題等を理解することができました。

その他、スタディーツアーでは、ベイエリアを中心に、Santana Row（ショッピング、ダイニング、エンターテインメント地区）の訪問や、San Franciscoでのフィールド・リサーチ等を実施しました。



8. 起業ビジネスプランのプレゼンテーション

シリコンバレー・スタディツアーでは、オンライン事前研修で知り合った参加者とのリアルな出会いを通じて、友好的で生産的な関係性を短時間で築きあげることができました。また、シリコンバレーの訪問や研修プログラムを通じてその絆をさらに深めることができました。特に、ツアー最終日には、研修を通じて得られた知見や情報、人間関係などを活用し、グループで独自の起業ビジネスプランを作成し発表しました。私たちのグループは、日本でより多くの革新的な機能を備えたサービスを提供するというビジョンに基づき、写真・動画のクラウド共有と、そのために「OBU」と命名したフリマアプリを実際に試作し紹介しました。審査の結果、1位を逃し2位になりましたが、貴重な学びの機会となりました。発表後、グループでビジネスプランの背後にある「なぜ」や「気づき」を十分に説明し得なかったことが原因であったという分析を行うなど、この経験が、自分自身の成長のきっかけとなり、また、効果的なコミュニケーションを行うことの重要性について大切な教訓を得ることができました。



作成したフリマアプリ「OBU」のスクリーンショット

このプログラムを通じて、米国で成功を収めた日本人の講演を数多く聞く機会に恵まれました。B-BridgeのCEOである榎本博之氏、Googleエンジニアの佐藤公一氏や、Mizuho USAの植松裕貴氏の講演、スタンフォード大学の石川氏、玉巻氏、および小谷氏による講演などです。また、Dr. Bruce Patonによるデザイン思考のワークショップにも参加しました。

これらの講演から、アメリカにきた日本人の多くは、アメリカで成功する自分の姿を想像していなかったように感じました。彼らの多くは言語や文化の違いからくる困難を抱え、失敗を経験しながら試行し続け、多くの人々に開かれた心と姿勢を持続けることで、最終的にアメリカで成功することができました。これらの人々から受けた多くのアドバイスや感動を胸に、自分の「将来の道」を切り開いていきたいと強く願っています。

英語だけではない、オーストラリアで得た私たちの学び －教えるための英語力を育成し日本の文化を発信！－

国際学部国際学科国際文化専攻2年

学籍番号 22WA032 氏名 坪井 海妃

学籍番号 22WA038 氏名 宮崎 遥平

学籍番号 22WA073 氏名 會澤 堅進

1. 授業参観を通じたTESOLの学習

このプログラムでは、留学先の語学学校や現地の小学校で実践されている英語が母語でない子どもたちに対する英語の授業の参観を通じて、TESOL（非英語話者に対する英語教授法）の理論や教授法を学びました。小学校では、英文法の学習ではなく、日本の小学校英語の授業にも参考になるフォニックスを利用した音声中心の授業が展開されていました。

2. Japanese Culture Workshop

私たちは、日本の文化を語学学校の学生に知ってもらうためのワークショップを開きました。事前にチラシを作成し、各教室に訪問して宣伝を行いました。当日は、留学生11人、日本人の友達4人、オーストラリアの大学の先生1人の計16人が参加してくれました。日本の文化として、おりがみ、福笑い、割り箸鉄砲を紹介しました。留学生は日本の文化や伝統的な遊びにとっても興味を持って取り組んでいました。



アデレードの小学校での英語の授業参観



日本文化紹介のワークショップ

3. ホームステイについて

ホストファミリーと過ごす時間が、留学生活の中では最も長く、有意義でした。語学学校では日本以外の国からの留学生もいましたが、日本人学生も多く、ホストファミリーと過ごす時間が英語力を伸ばす絶好の機会となりました。日本と異なる文化にどっぷりと浸ることで、新しい考え方や生活習慣等を直接知ったり、体験したりすることができました。特に、ホストファミリーは私たちを客人として迎えるのではなく、家族としてあたたかく迎えてくれました。留学に行く前は自分の英語が通じるか不安でしたが、ホストファミリーは私たちのつたない英語をしっかりと受け止めてくれ、気がねなく話すことが出来ました。

ハワイでの留学生活

国際学部 2 年
学籍番号 22wa086
氏名 石見 優果

はじめに

留学を始めて3か月たちました。短いうでとても長い期間でした。日本で過ごす3か月とは全く違い、慣れない環境、慣れない土地、慣れない部屋、慣れないルール、慣れない言語に、慣れない授業。最初の1カ月は本当に長く感じました。自分が留学前に想像していた生活とはかけ離れていて、全くききまらしていないし不安に思う事が沢山あったように思います。

現地大学での授業

ハワイの大学での授業は追大とはまた違い、パソコンを使用する機会も少ないですし、先生がひたすら喋るというよりは生徒と一緒に進めていくスタイルがほとんどだと思います。そもそも机の配置もグループで生徒同士が向かい合うようになっているので、ディスカッションも多く、自由に発言する機会が沢山あります。ESOL94の授業（英語が第二言語である留学生が対象の授業）はある程度の文法と単語を理解していることが前提での授業です。どの授業でもそうですが、知識があればあるほど役に立ちますし、有利に働くことが多いと思います。



ESOL94の授業が行われる教室

授業時間や担当教員も自分で選択することが可能です。先生によって授業スタイルや課題の量・プレゼンの量も全く違うので、授業内容のテーマは決まっていますが、その他全ては受講する先生によって変わってきます。課題の多さは追大とは比べ物にならないぐらいに多いです。基本、毎日1つは課題があり、日によって難易度もバラバラです。すぐにエッセイに取り掛かるという事はなく、モジュールによって具体的なテーマが決まっていて、それについての学術論文をまずは理解し、トピック・ボディ・コンクルーディングと分けて一度自分で考え、先生に提出し、添削して頂いた内容を踏まえて本番のエッセイを書き始める、という流れが一般的です。最終エッセイを書くのに1週間はかかると思います。一つ一つを細かくチェックしてくださる先生なので、マーカーペンでダメだしされている箇所は多いですが、エッセイに関する知識は増えます。また、フォーマル・インフォーマルといってエッセイに使用することができない英単語もあります。例えば、自分の頭の中には「良い=GOOD」という図式が定着していましたが、「GOOD」はインフォーマルなのでエッセイの中で使用することが出来ず、「Excellent」など同じ意味の違う単語を使用する必要があります。このような経験を重ねて、自分の脳の辞書に多くの単語が吸収されていきます。

最終テストに向けて

今は11月後半で中間テストは無事に終了し、最終テストに向けて勉強している時です。基本的にどこ

のクラスも中間はプレゼンテーション、最終はエッセイという形です。プレゼンテーションは個人であるかグループであるかは先生によって違います。私のクラスは個人で一人8分以上が課され、スクリプトを見るのは禁止されていました。また、みんながプレゼンテーションに集中するように、終了後にはクラスメイトのうちの誰かのプレゼンテーションについてエッセイを書かなければならなかったのも、みんな集中してメモを取ったりしていました。私にとっては大変でしたが、すごく良い案だと思います。



いつも勉強をするお気に入りの図書館

留学生は誰も授業に対する不安はあると思います。しっかり授業についていけるのか、聞き取ることが出来るのかなど不安は尽きませんが、留学は全て慣れです。その環境に慣れてしまえば、自然と最初よりも先生の言っていることが理解できる、ディスカッションで話す機会が増えるなど、少しずつ伸びていきます。

留学を考えている皆さんへ

留学の経験がマイナスに働くことは絶対にありません。少しでも興味があり、行きたいという気持ちがあるのであれば挑戦すべきだと思います。異国の地で生活する難しさや言語が通じない悔しさなど、今まで感じたことのない感情と沢山出会うことになります。でも、それは当たり前であり、これも1つの経験です。行きたいという気持ちが少しでもあるのであれば是非、行動に移してみてください。

Spring session アデレード留学

国際教養学科 3 年

学籍番号 21cc101

氏名 稲葉 慶乃

はじめに

本稿は、私が2023年2月から3月の約5週間、南オーストラリア州の州都であるアデレードでの留学を通して経験したことや学んだことを記したものです。留学を考えている学生の皆さんに少しでもお役に立てれば幸いです。

学校での生活

アデレード大学の語学学校であるEnglish Language Centreで、毎日授業を受けました。学校まで私はバスで通学しましたが、電車やトラムで通学している学生もいました。アデレードでは、バスを降りる際に運転手に「Thank you」とお礼を伝える文化があります。最初は、とても緊張しましたが段々慣れていきました。アデレードならではの温かくて素敵な文化だと感じました。

日本でクラス分けテストを受けていたので、自分のレベルにあったクラスで授業を受けることができました。日本の他大学の生徒と同じクラスになり、親交を深めました。

月曜日から金曜日は9時から13時までの午前クラスと13時30分から15時30分までの午後クラスに分かれて授業を受けました。

金曜日は、クラス分けテストで希望した選択授業の日でした。

月曜日から木曜日の授業では、「Reading」「Writing」「Listening」を主に勉強しました。クラスメイトとチームで一緒に日本の伝統的なお祭りについてのポスターを作り、発表するというグループワークもありました。多国籍の他のクラスとも発表し合い、日本以外の文化についても知ることができました。

金曜日の授業では、「Australian Studies and Popular Culture」を選択しました。毎週歴史ある場所を訪れ、アデレードの文化について学びました。



ELCでの授業風景

学外での生活

授業後や、土日の休日は友達と過ごしたりホストファミリーと過ごしたりしました。友達とは、グレネルグビーチやフリンジフェスティバルに行きました。アデレードの有名なビーチやフェスティバルに行くことができ、海外ならではの雰囲気を楽しむことができました。グレネルグビーチは、クラスのみんなでビーチバレーをして遊び、非常に思い出深い場所になりました。

休日には、ホストマザーがアデレードの有名な場所を案内してくれました。ホストブラザーとシスターも集まって一緒にBBQをしました。ホストファミリーが本当の家族のように温かく迎え入れてくれて、たくさんの思い出を作ることができました。

ホストシスターは、military reserveという災害などの緊急時に召集される軍隊に所属していて、訓練が忙しくあまり会うことができませんでした。普段聞くことができない軍隊の話などを教えてもらい、非常に勉強になりました。男性が多い中で同じ訓練をこなしているところが、かっこよくて素敵でした。学校では学べないような知識も教えてくれたり、勉強についてもわからない単語について親身になって教えてくれました。ホストファミリーの支えがあったからこそ、留学生生活を円滑に過ごせたと思っています。



グレネルグビーチ

おわりに

私は今回の留学を経て、英語に自信を持つことができるようになり、人としても成長することができました。約1か月の留学でしたが、想像していた以上に刺激を受けました。大学生の今だからこそできる貴重な経験だと改めて感じました。異文化に触れることでグローバルな視点を持つことができるようになり、より多様性についての理解を深めることができました。

留学は自分の行動力次第で得られることが大きく変わると思います。最近ではオンライン留学も充実していますが、異文化に触れることやホストファミリーとのコミュニケーションなど現地でしか経験できないこともたくさんあります。もし留学に行くことがあれば、「今しかない」という思いでなんでもチャレンジすることが大事だと思います。

これを読んで留学のイメージをつかんでももらえれば嬉しいです。また、これから留学に行こうと考えている学生さんの後押しができれば幸いです。

3. 教育実習

本学部では教職課程が設けられており、次世代の英語コミュニケーション能力育成に携わる中学校・高等学校の英語教員を育成している。教職課程を履修する学生は、英語関連科目や教職に関する科目を履修し、教育実習に参加する。

教育実習の事前学習として、英語教育に関わる授業で、英語の指導に必要な知識やスキルを習得し、模擬授業を行い、実践力を高める。また、教育実習の計画立案、教育実習生として求められる態度や振る舞い等も学ぶ。次頁以降でその体験を紹介する。

教育実習 ～It's Sho Time！～

国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc171

氏名 今津 翔

はじめに

私は2023年5月15日から6月2日までの3週間、母校である長岡京市立長岡第三中学校で教育実習をさせていただきました。本稿では、教育実習に行かないと分からない肌で感じて分かったこと、困難だったこと、頑張ったことなどについて、これから教育実習を迎える人たちの励みとなり、かけがえのない教育実習を行えることを願って書きたいと思います。

授業を準備することの難しさ

ほとんどの実習生は最初の1週間は授業の見学になると思います。どのような形で授業が進んでいくのか担当の先生から直接学べるだけでなく、他の先生の授業を見て勉強する貴重な時間です。私の場合は1週間目の木曜日から授業をしてくださいと言われていたほか、2年生2クラスと3年生2クラスの計4クラス、指導案も2年生だけでなく3年生の指導案の作成が必要になり、2週間目からの実習を本当に忙しく、授業の準備も本当に時間が足りませんでした。毎日残れる時間ギリギリまで残り、それでも終わらず、家で仕上げて授業前にリハーサルを行うくらいでした。さらに、1週間目の3年生の授業がテスト前の自習で、授業を見学することなく行うことになり、ぶっつけ本番で授業したことは不安でした。また、英語は最初の導入部分で生徒たちの頭を英語の頭に切り替える必要があるのですが、導入部分が非常に重要であることも指導していただきました。授業の最初にサッカーボールのリフティングをした授業もありました。なかなか導入がうまくいかなかった3週間でしたが、導入がうまくいったリフティングをした授業と研究授業は、見に来てくださった先生方から褒めて頂けました。一方で、難しかったことが、指示が届いていないという課題でした。授業を始めて序盤から指導していただいていたのですが、想像以上に生徒に届いていないことが分かりました。思っている以上の声を出しても後ろの席の生徒たちは何をするか分からないまま授業が進み、指導教員が補足して下さることが多くありました。3週間目になると少しずつ改善することができ、実習が終わるころには私の声も枯れました。それほど大きな声が求められました。

大成功の研究授業

研究授業は準備が大事ということを先輩から聞いていたし、指導教員の方も夜遅くまで一緒に残って1週間前くらいから作ろうと動いてくださったので指導案の作成も早めからすることができました。これはおそらく私だけですが、土日も指導して下さりました。本当に忙しい中、休みを無くしてまで指導してくださった指導教員の方、長岡第三中学校の教員の方々には感謝してもしきれません。ここまで本気で私を指導して下さる先生方のためにも、なんとしても成功させたいと今まで以上に強く思うようになり、どの授業よりも時間を捧げて準備をしました。リハーサルを2年生のもう一つのクラスで行いましたが、グダグダで、授業としてギリギリ形を維持していたくらいでした。それでも研究授業は明日という状況で、私は何度も一人で模擬授業を繰り返し、気付けば朝5時までしていました。そこまで徹底して準備をした甲斐あって導入で生徒たちの興味を引くことができ、授業も上手くできました。何

度も試行錯誤したワークをする生徒たちの楽しそうな表情、彼らを見て笑顔になる先生方の顔は忘れられません。放課後、見に来てくださった先生方に講評を聞きに行ったのですが、他の実習生の研究授業に厳しい評価をしていた教頭先生から「素晴らしい」と言っていただけたことは私の自信にもつながりました。

授業外での学び

生徒とのかかわり方は意外とスムーズにできました。休み時間や給食指導、掃除の時間を使ってお世話になったクラスの生徒以外にも多くの生徒たちに積極的に声をかけることで生徒たちも私の行動に伝えてくれました。その中で勉強になったことがあり、あるクラスの生徒が、「男っぽい名前と呼ばれるのが嫌だから苗字で呼んでください」と先生に話していたことを知ることができ、教育現場ではLGBTQの生徒が増えていることを身をもって知ることができました。不登校の生徒が増えてきているということも勉強になりました。私が中学生だったころにはこれらの問題はありませんでしたが、実際に各クラスに1人ほどの割合でいたので驚きました。授業や、クラスの生徒たちとのかかわり以外に思ってもなかったところに学ぶ機会が転がっていました。朝礼や放課後の職員室では教員の現状を知ることができる話を聞くことができ、iPadやパソコン、学級日誌などの管理や運用などの事務的な側面においても学ぶポイントがありました。私は学級通信を書かせていただく機会があり、学級通信がどのようにして作られているのかも知ることができました。

おわりに

3週間の教育実習を振り返ると寝られないことは辛かったですが、それ以上に素晴らしく、かけがえのない経験ができた3週間だったと思います。教壇に立った時に見た景色、授業が終わっても私の後ろを笑顔でついてくる生徒たちの姿、学校で過ごした3週間のどこの場面を切り取ってももう2度と見ることができないかけがえのない幸せなものです。これらの記憶も私が教員を目指すモチベーションにしたいと思っています。

この本稿のサブタイトルは、教育実習が終わって最初に担当の先生が書いた学級通信のタイトルです。学級目標とも掛かっており、気に入ったため、今回のタイトルにしました。長くなりましたが、私は教育実習に行くことができて本当に良かったです。

教育実習 ～初志貫徹～

国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc094

氏名 畚野 亜美

はじめに

私が教育実習に行ったのは令和 5 年 5 月 29 日から 6 月 19 日まで、京都市立醍醐中学校へ行きました。担当は 1 年生・英語科です。私は教職課程を履修して本当によかったと感じられる実習になりました。教師という夢を長年抱いてきた意味がこの実習で見出すことができました。教育実習を終えた感想を一言で表すと「楽しかった」という感想です。その一言にはいろいろな意味が込められています。初めは大変なことばかりで、しんどそうと思っていましたが、しんどいことが帳消しになるくらいの実習でした。そして、このレポートは「教師を目指したきっかけ」、「いざ教育実習へ」、について記したものです。

教師を目指したきっかけ

私が教師になりたいと思ったのは、小学校 5 年生の時です。当時の担任は一人ひとりのことをよく見ていて、ほめるときはほめてくれて、叱るときは叱ると、メリハリがしていました。こういった先生はみんなから好かれていました。私は教えることが好きだったので、なんとなく教師を目指していましたが、この先生に出会って理想の教師像ができてより一層強い気持ちが芽生えました。その気持ちもまま大学まで入学して、教職課程を履修して実習にいき今があります。私の夢がもう少しで叶うところです。その一歩手前の教育実習についてお話しします。

いざ教育実習へ

まず初日、校門をくぐる瞬間から緊張しました。初日は教職員でのあいさつ、全校生徒に放送でのあいさつ、教室へ行って自己紹介をしました。休み時間は積極的に教室へ行き、生徒とのコミュニケーションをとるようにしました。また昼食も教室へ行き、みんなと一緒に昼食をとり、生徒とたくさん話すことができました。このようにコミュニケーションをとる機会が実際に授業をするときに役立ちました。授業では生徒は挙手をして発言してくれたり、積極的に活動に参加してくれたり、授業がやりやすくなりました。授業の内容自体は this is や that is の範囲からでしたが、ワークシートを作るときに、どうすれば、this と that の距離感がわかるか、問題演習はこの順序で大丈夫なのかと吟味しながら作成しました。ワークシート 1 枚作るのに 2 時間くらいはかかってしまいました。実際に授業がスタートすると、教壇に立って話すことはこんなにも緊張するのかなと思いました。そして、クラスルームイングリッシュの使用に戸惑いました。日本語ばかりで指示を行っていたので、指摘を受けました。紙に使いそうなクラスルームイングリッシュをメモして、次の授業に挑みました。習っていない単語のある指示でも、ジェスチャーを使いながら伝えることで、生徒も理解してくれました。私が一番苦労したことは、生徒にどれだけわかりやすく、シンプルに伝えられるかということです。生徒は口だけの説明では理解してくれません。指示が正確に通らないことが多々ありました。実際にデモンストレーションを行うことで、すぐにアクティビティに取り組んでくれることがわかりました。指示は視覚化した方がスムーズに授業を進められることを学びました。最後に私が失敗したことを紹介します。それは、生徒に疲れを

見せてしまったことです。私自身、精一杯授業をしているつもりでした。でも指導教員から見ていて元気がないと指摘を受けました。元気がないと生徒も授業に参加してくれないし、教師のテンションが生徒のテンションになるということも学びました。教師はエンターテイナーだと教えて下さいました。授業するときや怒るときなど、生徒と接しているときは演技している感覚でしなさいと教わりました。これは一生忘れないでおこうと思いました。この実習期間、実習生は私だけで、基本は職員室で過ごしていました。職員室で過ごすのは先生方に気を遣い、気疲れをしました。しかし、教材研究や生徒のことをすぐに担当教諭にすぐに聞くことができ、実際の職員室の雰囲気もわかり勉強になったとともに、ありがたい環境で実習ができていたのだと実感しました。私が嬉しかったことは授業にみんなが積極的に参加してくれたことです。休み時間に頑張って生徒とコミュニケーションをとってよかったなと思いました。そして最後にはみんなから色紙をもらい、この学校、このクラス、で教育実習に来ることができてよかったなと思いました。

おわりに

私は教育実習に行き、教師になりたいと強く思いました。生徒と関わりながら、英語を教えたい、生徒が、できた！わかった！といった時の顔をみてやりがいを感じながら、仕事がしたいと思いました。生徒と信頼関係をしっかり作って生徒にとって相談できる先生になりたいと思います。

教育実習 ～生徒にとっての教員とは？～

国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc096

氏名 岩藤 もえな

はじめに

私は、8月28日から9月15日までの3週間京都市立桂中学校で教育実習をさせていただきました。私は将来教員になり生徒に「達成感を与える」ことができる教師になりたいと考えています。そのため、この教育実習で生徒たちの「長所」「得意なこと」を見つけるという目標を立てて3週間で過ごしました。

目標を決めて過ごした3週間の体験談を通し、私の将来の自己実現の架け橋となったお話を伝えようと思います。

～1週目～

実習が始まり1日目は緊張とワクワクの感情がありました。私は、学生ボランティアで実習校に何度か行って学校雰囲気などは知っていましたが、多くの生徒とかかわりがあるわけではなかったのでも緊張しました。私は、この教育実習の目標として「一人一人の長所を見つける」「一人一人の個性を知る」という事を重点に置き取り組みました。まず、1週目は授業見学を行いました。私は、1年生の4クラスの英語を担当することが決まっていたので、1週目の授業見学では主に英語を見に行きましたが、担当クラスの生徒たちの違う教科での雰囲気も見たかったため、他教科も見学に行きました。生徒に対する問いかけが上手い先生、授業中に生徒に興味を持ってもらえるような話題作りができる先生、生徒が楽しい、学びたいと思うことができる授業を展開している先生の授業は生徒の授業への積極性が高まっていると見学をするうえで感じました。1週目で、いろんな先生の授業を見学し、いいところをたくさん拾うことができ授業見学の大切さを知りました。

また、部活動にも積極的に参加しました。私自身、高校までバドミントン部に所属していました。今回縁あって、教育実習の桂中学校のバドミントン部の顧問の先生と知り合いであったため1日目から部活動に参加しました。部活動に参加し感じたことは、授業とは違った一面を見ることができ、自分自身の好きなことをやっている生徒たちの姿はとても生き生きとしていて素晴らしいと感じました。私が、10年間バドミントンで学んだことを生徒たちに教えることで生徒が少しですが上手くなる瞬間を見ることができてとてもうれしい瞬間でした。

授業準備を怠らない

2週目からは、実際に授業を行いました。担当の指導教員の先生に、実際の授業をする2日前には授業のパワポ、プリント、ワークシートを仕上げておくことと言われていたので授業の直前になり、焦ることがなく授業を行えました。しかし、実際に授業をしてみると「ここ準備不足だったな」という事が何度か起きました。私は、4クラス授業があり同じ授業を4回行えるから修正可能ですが生徒たちは1回しか同じ授業を受けられないため1回目であろうが授業準備をしっかり行い、授業に挑むことが重要だと身に染みて感じました。

私の指導教員が毎日日誌に書いてくださっていた言葉が「授業は準備8割」という言葉でした。私は、

そのとおりであると実際に授業を行い感じました。私は、授業を組み立てるうえで「生徒自身が学びたい」と思うことのできる授業を展開しようと意識して毎回の授業を作っていました。生徒のやる気を引き出すためには、教員の授業準備が関係してくると教育実習で感じました。

信頼される教員に

私は、教育実習を3週間行う中で生徒に信頼される教員になることがとても重要なことであると感じました。3週間という短い間で、信頼関係を構築することはとても難しいことであるけれど、1日目よりも2日目、2日目よりも3日目と生徒たちとコミュニケーションをとっていく中で、分からない問題があったら質問をしてくれたり、授業時間以外にも部活の相談や、勉強の相談をしてくれたりする生徒達とのコミュニケーションを大切にして信頼関係を少しずつ構築していくことはとても重要であると感じました。

私が教員になった際には、日々のコミュニケーションを大切にして生徒に信頼される教員になりたいと感じました。生徒に何かあった際には、すぐに先生に相談してくれる関係になれるようになることを目標にしようと思っています。

おわりに

私が、この実習で教員という仕事は大変だけどとてもやりがいのある仕事であるという事を学びました。私が、教員になった際には生徒の第二の親のように夢に向かって頑張る生徒を支え、応援できる教員になりたいです。

教育実習を振り返って

国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc069

氏名 林 謙胤

はじめに

今回私は自身の母校である新堂中学校にて教育実習を行わせていただいた。3 週間の実習では英語、道徳の 2 科目で教壇に立たせていただいた。本レポートではこの 3 週間での学んだことや気づきをまとめたものである。そして、このレポートは「教師という仕事」、「文科省指定校の道徳科」、そして「生徒と関わって感じたこと」について記したものである。

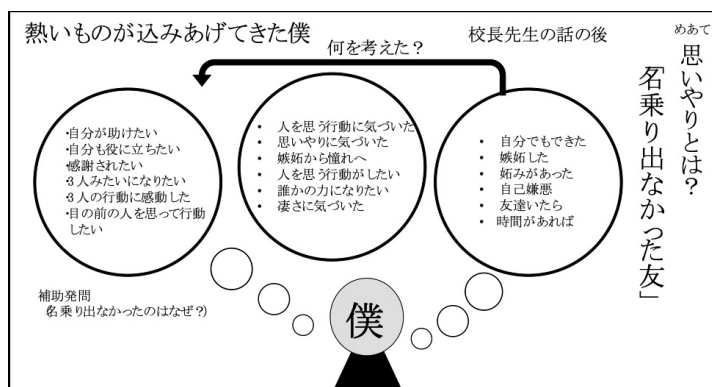
教師という仕事

実習期間、朝一番初めに入るのが職員室であり学校での 1 日がそこから始まる。職員室では教師という仕事の裏側を見ているようであり、特に朝は 1 日生徒が快適に過ごせるような工夫がさまざま見られた。例えば 1 日のスケジュール（時間割、行事等）、連絡事項、気象情報や関係のあるニュースなどを手書きで作成している。それはポスターのようなサイズで生徒たちが見やすく分かりやすいように色分けしてある。おそらく私が生徒の頃もこの取組はあったが生徒の頃はあまり気にもとめていなかったが、改めて見ると分かりやすいものであった。このような生徒のための気遣いが職員室には無数にあった。教師間でのやり取りでは生徒だけでなく学校運営についても話されており、かなり組織的に動いていることが分かった。

文科省指定校の道徳科

私の実習校である新堂中学校は道徳科に力を入れる指定校に選ばれている。選ばれた年がコロナによって延期になりその間も研究を続け現在も続けていることからかなり力を入れている中学校であった。そこでは道徳科を教科書通りで進めることはせず自分の担当クラスの特徴から授業を作成する。道徳科では生徒が自ら教科書にあるテーマに気づくことが必要だ。そのためそれに教師が言動で誘導してはならない。教師は発問 1 つに対して予想される生徒からの回答を最低でも 5 つ以上を想定し、それに対する問い返しを作成する。テーマをぶらさずに生徒たちを導くため問い返しで授業を進めていくという形である。道徳は生徒の質問や言動 1 つで授業が進むのだ。

このような道徳科の教材研究はかなり難しかった。私が実際に行った授業の作成過程はこうだ。ま



ず教科書の題材を読み解き、教科書が伝えたいことを考える。次に伝えたいテーマを示すことができる中心発問を考える。この発問が授業の要であり、生徒たちに伝えることができるかどうかのキーポイントである。そしてこの中心発問に向かうために導入では題材に沿った日常生活で起こったことや質問を考える。ここま

らは生徒たちの反応を考える。導入の質問での生徒の反応を考え、そこからそれぞれの反応で中心発問に向かえる問い返しを考える。この後はこれの繰り返して反応から質問を考えるということを中心発問に向かうことができるようになるまで挙げていく。これが授業作成である。

いざ授業となると少しワクワクしていた。これだけ考えた授業が楽しみだったからだ。授業中に考えていたことは使いやすい反応をピックアップすること意識していた。それぞれで考えてもらっている間に教室を周り、中心発問に近づく反応の生徒をメモしておいた。発問の際に何人か発表してもらいメモした生徒を当てることでさまざまな意見を出した上で中心発問に向かえるようにした。あとは自分の考えた通りに発問することで生徒が自ら考えることができる。道徳科は教師が教えるものではないということが分かった。

生徒と関わって感じたこと

実習校で生徒と仲良くなれたなと感じている。よく話しかけてくれましたし私自身不安もなく教室に入ることができていた。やはり自分たちの世代とは違うなと感じた部分もあり。親の世代が違うことやSNSの普及などさまざまな要因はあると考える。現在サッカーのチームスタッフをしており、中学生のクラブチームとその小学生以下のスクールを指導している中で感じていたことでもあったが学校に入るとまた違った見え方がした。やはりクラブチームであればサッカーが上手になりたいという目標をある程度全選手が持っているのだが中学校では本当にさまざまな生徒がいる。そこが大きな違いだなと感じた。勉強が苦手や得意、学校の好き嫌いもそうだが性格的にも全く違う子供たちが同じ教室で学ぶというのは教壇に立つ側になって初めて実感することであった。そんななかで楽しく最後まで実習ができたのは間違いなく生徒のおかげであり、本当に感謝している。

おわりに

教育実習では本当にさまざまなことを見て感じて学ぶことができる。おそらくどの教師の方も口にすると思うが「生徒が助けてくれる」というのは本当だった。ただ助けてもらうということはそれまでの関係性の構築や自分自身生徒に何かしてあげることだったり、全力で向き合うと言うようなことを行わなければならない。何もしていないのに助けようとはならないはずだ。教師と生徒の関係性というものはかなり大事なものであり、学校は教師と生徒で成り立っているのかもしれない。

教育実習 ～忘れられない3週間～

国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc198

氏名 加藤 更紗

はじめに

私の母校である和泉中学校での、3週間にわたる教育実習は、学び溢れるものでした。こうして沢山のことを吸収し、気持ちよく終えることができたのは、先生方や生徒たち等の関わってくださった人々のおかげです。今思うと、3週間が一瞬だったように感じます。

そして、このレポートは、「授業の中に居場所をつくる」、「ルールメイキング」について記したものです。担当教諭が私を信じ任せてくださったおかげで、4クラスにて計40回授業をさせてもらいました。この回数をこなすことができたからこそその学びや課題、その他教育実習全体の中で印象的な出来事を記していきたいと思います。

授業の中に居場所をつくる

「授業の中に居場所をつくる」この言葉は、後に記す公開授業後の大学の教授が訴えていたことで、とても印象に残っています。

和泉中学校は、授業改善に力を入れており、「IZUMI授業スタンダード」を掲げているようです。例えば、単元目標を立て、1回1回の授業を工夫すること、単元ごとにパフォーマンステスト（能力の「活用」の評価）を行うこと、黒板には常に「めあて」と「ながれ」を板書しておくこと等が挙げられます。これらで最も重要視していたのは、常に逆算を意識して授業を組み立てることです。生徒たちの最終的な理想の姿があることによって、授業づくりができるということを、実践する中で学ぶことができました。

こうした「IZUMI授業スタンダード」は、グレーゾーンともいわれる生徒も含めた全ての生徒にとって、とても重要なことだと考えます。私が授業をする中で、鉛筆も握ってくれない子、常に途方に暮れている子、誰かと話していないと気が済まない子など、様々な性格の生徒に出会いました。課題を持つグレーゾーンといわれる生徒たちも一緒になって授業を作っていくために、指導教諭からは、「個人作業→グループ活動→全体共有」のプロセスを常に意識するよう教わりました。このプロセスを実行することによって、生徒たちが聴きやすい環境を作ることができていたのではないかと感じます。また、他の先生からは、「誰にとっても見やすい黒板」の重要性を教わり、常に意識していました。学校生活の大半は授業時間なので、授業の中で少しでも生徒たちが過ごしやすくと感じるができる「居場所」はとても重要だと考えるようになりました。正直、たった3週間で自分自身納得のいく授業はできませんでしたが、生徒たちにとって少しでも達成感のある授業だったらよかったなと感じます。

ルールメイキング

私はある日の放課後、ルールメイキング会議に参加しました。ルールメイキング会議とは、「対話を通してより良い学校を作っていく」をテーマに、生徒会役員や希望する生徒が集まり、校則を変えようとする動きです。NPO法人の「カタリバ」が元となって出来たものだそうです。私が参加した日は記念すべき初回の会議で、なぜ参加したのか、どんな学校にしたいのかを意見交換していました。中には

「化粧がダメな意味がわからない」と意見する女子中学生も参加しており、多様な生徒が討論に積極的に参加する良い機会だと思いました。「次の一年生が入学したいと思える学校にしたい」という意見も見受けられ、今後の和泉中学校が楽しみになりました。今後の予定として、2学期中に新校則を提案し、3学期から試験的運営を目指すそうで、私も是非最後まで参加したいと思える会議でした。

おわりに

これまで、印象的な3つの出来事をピックアップし紹介しましたが、それ以外にも道德の授業を担当したこと、体育大会のクラス旗を生徒と一緒に作ったこと、研究授業を担当教諭と共に一生懸命作ったこと、ALTとチームティーチングしたこと、陸上部の後輩とリレー練習をしたこと等、ここに書ききれないほどの沢山の思い出が蘇ります。私は中学の英語の先生がきっかけで教師という道を目指していますが、今まで以上に教師という仕事の魅力に触れることができました。

関わってくださった全ての方々に感謝申し上げます。



教育実習 ～母校で教育実習を行うこと～

国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc002

氏名 松井 鈴花

はじめに

私は2023年5月29日から6月16日までの3週間、母校である西脇市立黒田庄中学校で教育実習をさせていただきました。黒田庄中学校は緑に囲まれた自然豊かな場所にあり、以前から変わらず元気で穏やかな雰囲気のある学校でした。教育実習先が母校に決まってから、「母校で教育実習出来て良かったな。」と言われることが多くありました。当初は、まだ母校で教育実習を行うことが当たり前であり、普通の事だと思っていました。しかし、3週間の教育実習を経て今思う事は、母校で教育実習を行うことができて本当に良かったと思っています。

本稿では、この3週間で学んだ事や感じた事を書いていきます。

教師という仕事

西脇市立黒田庄中学校の実習が始まってから2・3日後、各先生から仕事内容を聞く機会がありました。保健の先生や生徒指導の先生、特別支援学級を担当されている先生の話聞いて、教師は自分の担当科目のこと以外にも考えるべきことがたくさんあると思いました。私の指導教諭は3年生の学年主任をされていました。私が生徒だった頃は、学年主任の先生が授業時以外何をされているのか知りませんでした。しかし、今回の実習で道德の時間や他の授業を見学して生徒達の様子を見たり、放課後には修学旅行の様子を写真として印刷したり、丁寧に掲示されているなど本当にさまざまな仕事があり、大変だと実感したとともに生徒の成長を一番近くでサポートができる仕事だなと感じました。

ICTを使用した授業

黒田庄中学校では、「リーディングDXスクール事業」に参加されていたため授業で、ICTの使用を強く推奨されていました。生徒1人1人にタブレット端末が配布され、授業の感想をタブレットで送信することや、英語の授業では並び替え問題などをタブレットで行われていました。ICTを活用することによって、授業の方法なども幅が広がると共に教師の負担も減らすことができると感じました。実際、研究授業でもタブレットを使用して授業を行った結果、生徒1人1人の回答を全員で見ながら確認ができる点や、生徒のタイピング練習にもなり、校長先生からも良い評価をいただくことが出来ました。しかしICTを使用していくうえで、それだけに囚われてはいけないとも感じました。ICTを使用した授業には利点がたくさんありますが、もし停電になって使えなくなった時のことを考えると、やはり書くという作業も大切になってくると思います。そのため、ICTをより良く使うことが、生徒がより成長することに繋がってくるとしています。

生徒に救われた研究授業

研究授業当日、4限の授業を行う予定だったので1～3限の間研究授業のシミュレーションを繰り返していました。計画した時間通りに授業を行うことが出来るだろうか、指示をちゃんと理解してもらえるだろうか、さまざまな不安がありました。生徒達も後ろで先生方に見られるといった経験があまりな

いせいか、緊張が伝わってきていました。授業が始まり、最初は緊張で話すスピードも早くなってしまったこともあって周りが見ることができていなかったと思います。しかし、後半で落ち着きを取り戻し自分のペースで授業を行うことができたと思います。説明不足だった部分なども、生徒が理解してくれたことによって救われました。終わったあと、蛭田先生からも「生徒があんなに積極的に発表している様子はなかなかない。」と言われ、研究授業が成功したのは生徒達のおかげだと心から思いました。研究授業後の事後指導では、授業が計画通りにいかず5分早く終わってしまったことの指摘や、生徒に指示をするときには、指示する文1つにつき動詞は1つにする、ということを言われ、思い返すと反省点はたくさん出てきました。指導教諭からは、実習中に見た授業の中で1番良かったと言われ、私の人柄が出た素晴らしい授業だったと褒めていただいたことが、とても嬉しかったです。生徒の積極性があっての、私の授業だったなと思います。今後人前に立って何かを話す場に立った時、この研究授業の反省点や褒めていただいた点を活用できたらなと思います。

おわりに

この3週間で改めて母校の素晴らしさを実感したとともに、失敗や困難を乗り越えたことで新たな自信をつけることができました。もちろん楽しいだけの3週間ではありませんでしたが、間違いなく今後記憶に残り続ける3週間だったと思います。これからも、この教育実習で学んだこと、そして身につけた自信を活かすことができるよう日々成長していきたいと思っています。

～成長できた教育実習～

国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc191

氏名 村岡 優香

はじめに

私は、6月14日～7月4日までの3週間母校で教育実習をさせていただきました。担当クラスは中1で、研究授業と道徳を含め計6回（このうち1回は2年生の授業）の授業をしました。本稿では、週ごとに感じたことや学んだことを記していきます。

読んでいただく前に、簡単に私の実習前の状況を紹介させていただきます。私は、3年生の2月末までは英語の教員を目指しており教員採用試験の勉強をしていました。しかし、気持ちに変化があり3月からは就活のほうに切り替え、5月半ばに内定をいただき就活を終えました。そのため、実習には精神的に楽な状態で挑むことができたと思っています。

1 週目

1週目は、挨拶周りと授業見学を行いました。各クラスを回って挨拶をする際は、笑顔で明るくするよう心がけ、「緊張しているけど皆とたくさん関わりたい」などの気持ちを素直に言うようにしました。そうすると生徒の方から話しかけてくれたり、先生方も生徒に対して声掛けをしてくれたりといろいろと協力してくださいました。授業見学では、自分の担当科目だけでなく9教科全ての授業を見に行くようにしました。見学を通じて意識していたのは、何となく見るのではなく、授業で観察するポイントを絞るようにしたことでした。そうすることで、2・3週目に自分が授業をした際にそれぞれのポイント（板書や呼びかけなど）を意識することができました。また、全教科見学をしたことで、生徒の苦手教科を知れたり生徒との会話が広がったりと距離を縮めるのにも役立ちました。

2 週目・3 週目

2週目は授業を3回行い、3週目で授業1回と道徳・研究授業を行いました。結果的には、6回の授業で自分的に納得できる授業はできませんでした。指示が思うように通らなかったり、私の話している時間が長かったりと授業をするたびに改善点や課題が出てくるといった感じでした。特に、私は2週目が実習期間で1番きつかったです。しかしその分、学んだこともその分多くありました。

その1つは、やっぱり準備が大切ということです。私は、実習に行った友達の中でも行った授業回数が少ない方ですが、パワーポイントの作成やプリントなど1回の授業を考え作るのに慣れていないこともあり、すごく時間がかかりました。2時くらいまで考えて、授業当日の直前まで考えることもありました。しかし、準備をしっかりとやれば自信に繋がって声はしっかり出ていました。

次に、気持ちの持ち方です。授業を行った後に、見に来てくださった先生方からフィードバックをもらうのですが、すごく褒めてくれる先生とそうではない先生がいます。授業をよくするために言ってくださっていることは分かっているけど、実際に言われるとショックを受けることはよくありました。その時は、感謝の気持ちを持ちながら、「実習で学びに来ているのだから出来ないことがあって当たり前」と思い、上手く自分の中で処理することが大切だと感じました。ただ言われたことはしっかりメモし、次の授業で改善できるように準備は念入りにしました。

教育実習を振り返って

3週間の教育実習を振り返って、たくさんの人に助けてもらったと感じます。担当クラスの先生には道徳の授業と一緒に夜遅くまで見ていただき、また私がクラスになじめるような声掛けや雰囲気作りなどとてもお世話になりました。指導教諭の先生にも、指導案の書き方のアドバイスをもらったり授業に関することはもちろん、今の教員の働き方や私の今後についての相談など実習の枠を超えて親身になって考えたりしてくださいました。また、担当した1-Aの生徒にも助けられることも多くあり、授業中に積極的に手を挙げてくれたり、授業後には「先生の授業楽しかった」や「また授業やってほしい」など伝えに来てくれたりと自分のモチベーションになっていました。放課後のバス待ちの間に恋バナをしたり、昼休憩に体育館でバスケットをしたり、部活見学で頑張っている姿を見に行ったりと3週間という短い期間のなかで関係を深めることができ、最終日には泣いてくれる生徒もいたりとすごく充実した実習を行うことができました。

おわりに

私が今回の実習を通じて学んだことは、失敗してもいいから一生懸命やって、つまずいたら素直に助けを求めるということでした。今までは、失敗するのが嫌で中途半端に力を抜くことがあったけれど、今回の実習で一生懸命やることは全然恥ずかしいことではないと改めて感じました。一生に一度の実習で学んだことを大切にして、社会人になっても頑張っていきたいです。

教育実習を通して得たもの

国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc173

氏名 仲本 一喜

はじめに

2023年度5月29日から6月16日までの3週間、母校である摂津市立第一中学校で教育実習をさせていただきました。本文では実際に教育現場で見たことや感じたことをお伝えします。そして、文章の最後では改めて私が目指す教師像をお伝えします。

教師という職業

私が小・中学生の時の教師のイメージは勉強を教えることを仕事にしている人という、とても単純なイメージしか持っていませんでした。しかし実際に教育現場に行き、教師はなんて大変なのだろうと改めて感じました。ほとんどの先生は7時から7時30分の間に出勤し当日の授業の準備やこれまでの授業の提出物の採点、チェック。生徒が登校すると出席の確認、欠席の連絡がない生徒がいた場合保護者等に連絡。そして一日の流れを教師全体、学年の教師で確認してやっと授業に向かいます。授業が終わり放課後は部活動があり活動が終わってからその日の授業プリント等の採点、チェックを行い今後の授業の用意。生徒指導が入ればこれらの作業は後回しになり帰る時間が遅い方は21時半の退勤。一日の中でほとんど息つく間もなく活動していて教師という職業は本当に大変なのだを実感しました。

実際に授業を行って感じたこと

どんなに授業づくりに工夫をしても内容が理解できない生徒は不特定多数いました。その中で最も重要なのはそういった生徒が授業に参加しなくなることを防ぐことでした。もちろん理想は全員が理解するまで教えることですが、授業時間には限りがあります。だからと言って理解していない生徒を置き去りにするわけにはいきません。どうすれば理解している生徒を待たせることなく理解していない生徒を授業に参加させることができるのかということを指導教官からの指導をいただきながら考える毎日でした。私が実際に行っていた具体例としては、問題演習を行った後に少しでもいいから近くの人と教え合う時間を作ることです。そうすることで理解している生徒は理解していない生徒に教えることができより深い理解につながります。また理解できていない生徒が先生に質問するのが恥ずかしくても友達になら質問でき空欄を埋めることができます。ここで注意していたのは個人で問題を解く時間のあとに相談時間があるとはなからその時間を当てにする生徒が出てくるので机間指導でまずは自分で解いてみるように促すことです。

机間指導の大切さ

私はこの教育実習を通してどれほど机間指導が大切なのかを学びました。先にも述べたように授業にしっかり取り組んでいるかの確認はもちろんですがそれだけでなく、机間指導を利用して生徒のモチベーションの管理できることを学びました。具体的な方法としてはだれがどの問題を解けていてどこを間違えているのかを把握し、答え合わせの際正解できていた生徒を当てて発表させることで自分はできるのだという自信をつけさせることができました。特に英語を苦手としている生徒にはこの方法は効果

抜群で、正解した際にはオーバーなリアクションではめてあげると進んで自分から問題を解き、わからないところは質問してくるようになりました。授業を作る時にどうしてもプリントの作成や発音、説明の仕方などに着眼点が行きがちですが一時間の授業を構成する上で机間指導がこれほど重要な役割を成しているということに気がつくことができました。

おわりに

教育実習を通して感じたことは、教師をしている中で言い方が悪くなりますがさぼろうと思えばさぼれる点はいくつもありました。しかしそのおろそかにした部分はそのまま生徒の成長を止めることに直結しています。生徒から信頼され頼られる、生徒の成長を促すことができるのはさまざまな細かい部分をさぼることなく突き詰めた教師だと感じました。もちろんそれはとても大変なことですそこに供してのやりがいがあるのだとこの教育実習を通して確信しましたし、私もそういう教師になると決断しました。3週間本当に大変でしたがこの3週間を過ごし、改めて自分は教師になりたいのだと自覚することができました。

教育実習

国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc036

氏名 中村 七瀬

はじめに

私は母校である中学校で、5月29日から6月16日までの3週間教育実習を行わせていただきました。全体的に学校の雰囲気は良く、生徒は少し幼い面もありますが、元気で何事にも積極的に取り組むことができる方が在籍している中学校です。私は約115名が在学している2年生を担当しました。教育実習を控えている方にとって、本稿が何かのきっかけになれば幸いです。

実習前

教育実習前に行うオリエンテーションや講義で実習に関するさまざまな感想を目にする機会があり、それを見るたびに私は不安と少しの期待が混ざり複雑な心情でした。英語力や指導方法に心配があり、生徒の前で50分間授業を行うことができるのか、そもそも私が教壇に立つ資格があるのかと憂鬱な気持ちを抱えながら4月末まで過ごしていました。しかし、貴重な経験をさせていただくからには充実した期間にしたいという思いもあり、少しでも不安や憂鬱さから脱したく指導案作りや授業構成の思案などできる限りの事前準備をして実習に挑みました。この事前準備のお陰なのか授業準備について指導教員から褒めていただくことが多かったのも、もし実習前に余裕があれば、現時点で準備できることはしておくとも良いかもしれません。

3週間の学校生活

1週目は講話から始まり、主に授業見学をしていました。先生として授業を見学していると、教科や担当教員によって授業形式が異なることはもちろん、その日の天気やクラスの雰囲気、生徒の健康状態や気分によって授業姿勢に変化が現れることに気づくことができました。

2週目から授業見学に加え、実際に教壇に立って授業を行いました。通常授業に加え、1度だけALTの方とも授業も行いました。授業を受けると行うとはまるで違うのかと戸惑いながら授業をしていました。そのような中で研究授業を含めた授業実習で終始一貫して2点ご指摘いただきました。

第1にクラスルームイングリッシュの活用についてです。授業を進めることや生徒対応で精一杯であったため英語で簡単な指示を出す余裕がなかったというのが本音でしたが、それは実習生のうちしか通用しない言い訳であり、全ては私の落ち度です。実習前まで無意識でもクラスルームイングリッシュが発せるようにしておく必要があったと反省しました。

もう1点は指示の不明確さです。次にすべきことが漠然と見えている状況下で伝えた指示が通らないことが多々ありました。蛭田先生から講義で『指示は明確に分かりやすく』と教えていただいたことを実践したつもりでしたが、実際にはできていなかったことを



研究授業の様子

痛感しました。指導教員からは指示したい行動を全て言語化して1つ1つ丁寧に伝える必要があると教示いただきました。

しかし指摘ばかりではなく、褒めていただく機会も沢山ありました。褒めていただいたことについてここには記載しませんが、それは指導教員から教えていただいた、『失敗を恐れずに何度も挑戦を繰り返すこと』を念頭に置いて不肖ながら誠心誠意尽力した結果であると思います。これからも『失敗を恐れずに挑戦をすること』を胸に行動していこうと思います。

おわりに

実習中、心が折れそうになり全てを投げ出したくなるときもありましたが、振り返ればそのとき抱いた感情や言動は、私が成長する糧となることばかりでした。このようなかけがえのない輝かしい日々を過ごすことができたのはひとえに教員の方々、そして2年生の生徒の皆さんのおかげです。教育実習が豊富な知見を得た貴重な経験となりました。

本稿をお読みいただいている方にも実り多き実習期間となるようお願い、結びとさせていただきます。

教育実習 ～例外、やりがい、想定外

国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc177

氏名 瀬戸口 明

はじめに

5月15日から6月2日までの3週間、母校である尼崎市立塚口中学校で教育実習をさせていただきました。このレポートでは教員になりたいと思っている人・教育実習へこれから行く人へ「重要な3つの意識」を教育実習と関係あることから関係ないことまで絡めに絡めて綴らせていただこうと思います。

そして、このレポートは「前代未聞」、「趣味と友達を持って臨め」、「そろそろ教育実習で何をしたいか知りたいよね」、そして「忘れもしない24:30退勤」の4トピックについて記したものになります。しかし、ページ数制限のためかなりの内容を端折っての提供となりました。申し訳ありません。

前代未聞

僕がこの教育実習で担当した中学3年生には僕の弟が在籍していました。僕はどのクラスに行っても「あれが瀬戸口のお兄ちゃんか」「ダンス踊れるらしいで」「イケメンや（まあ中学生からしたら大学生は輝いて見えるのも当然。と思いながらも内心ニッコニコ。）」などとチャホヤされまわりました。

趣味と友達を持って臨め

絶対に趣味と友達を持って教育実習に臨みましょう。友達には、可能な日は晩御飯に付き合ってもらい、その後帰ってからも朝5時くらいまでは話を聞いてもらいました。これは精神安定剤すぎました。

（次の日7:45までには出勤）※皆さんは絶対に真似しないでください。そして、待ちに待った週末。家で寝倒した他の実習生とは真逆に、僕は西九条や塚本へ出向き、趣味であるダンスのWSを受けに行っていました。頭フル回転・全身フル稼働。最高に気持ちよかったです。また別の週末には後輩のダンスイベントを観に行くなど、趣味に没頭でき、とてつもなく素敵なりフレッシュになりました。ぜひ、教育実習が始まるまでに趣味も友達も見つけてみてください。

そろそろ教育実習で何をしたいか知りたいよね

最終的なルーティンは、朝7:45に出勤、8:20頃まで門前挨拶当番、8:25に朝学習と朝礼、8:40に朝の学年会議。8:50から1～4限まで行い、12:40から昼食を挟んで14:35から5,6限、16:30終礼、17:00前くらいまで掃除。そこからフィードバックを受け、教材研究・授業プリント作成・簡易指導案作成を行い。20:30～21:00退勤でした。

忘れもしない24:30退勤

結論から僕の考える大事なことを挙げると3つほど。1つ目は「いかに生徒を授業に参加させるか」、2つ目に「いかにこだわるか」、3つ目に「いかにやりがいを感じられるか」です。僕はこの3つを意識しすぎたことから、想定外の24:30退勤という歴史を刻むことに成功しました。もちろん不本意です。他の実習生たちは19～20:30には退勤していました。指導教諭、教頭先生も残ってくださる中、指導案・PPTを練りに練り、指導案を印刷し気づけば24:30。アルバイトでも終電があるので24:00までし

か働いたことないです。本当に不本意ではありますが、翌日の研究授業は無事成功したのでよしとしました。お気づきでしょうか。研究授業の前日に24:30退勤です。流石に自分でもドン引き案件でした。

おわりに

ここまでつらつら綴りましたが、個人的にはとても楽しい教育実習でした。弟の学年ということもあり、担当クラス以外の生徒との接点もあり、周りの教育実習生は1週間ごとに1人ずつ“bad”に陥っていく中、ひたすらチャホヤされた3週間だったなあと思います。また、毎晩話を聞いてくれた友達にとてつもなく感謝しています。本当にありがとう。



教育実習での学び

国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc010

氏名 竹田 伊吹

はじめに

ここでは、教育実習を通して私が学んだことについて記している。私は、母校である大阪府立咲くやこの花高等学校に教育実習に3週間の実習に行かせていただいた。高等学校に実習に行くことは少し珍しい。特にこの学校は、全国でも珍しい“公立”中高一貫校である。内部生と外部生との学習状況には差がある場合が多く、これが今回の教育実習での困難な点であった。

教師という職業

上記で記した2点は、この学校で教師として勤務している先生方ならより困難であると感じた点である。私がこの2点において、主に担当教諭の方から教わったことをそして授業見学などを通して感じたことをここでは記している。まず、内部生と外部生には理解力と集中力で差があることが多かった。しかし同じ授業において双方の生徒で教材を変えることは難しい。そのため、同じ問題でもヒントの出し方を変える・教え方を変えるという行動が見られた。これにより、私は一つの授業で莫大な時間を費やしてしまった。しかし同じ様な授業の流れでも、担当教諭は私の倍の速さで進めていく。英語に対して苦手意識が高いクラスを担当させてもらったのだが、そういったクラスでは非常に「間」や「時間配分」が重要になってくる。生徒にとって難易度の高い問題だから、という理由で問題を解く時間を余分に取りすぎてしまうと、生徒の集中力が切れやすくなってしまう。そういった時間配分、生徒に寄り添ったヒントなど、答えにいち早く導くまでの過程をサポートすることが、私には最も難しく感じた。担当教諭はその点において「生徒にはその問題を解くためのヒントを教えるのではなく、家でどの様に学習すればいいかのヒントや方法を教えることを意識している」と言及していた。教師というのは「英語を教えられる」という能力は最低限として、「生徒に英語の楽しさを教えられる」というのが最も求められる能力であるのではないかとその言葉を聞いて感じた。

困難だった壁

ここでは、3週間の教育実習で困難だったと感じたことについて記す。1番は授業の作り方である。私の担当クラスは少し集中力が切れやすかったため、「生徒を飽きさせない」工夫がより必要とされていた。そこで始めは和訳を関西弁にする、教科書では出てこない話し言葉で使われる流行語などをいれ、生徒に英語の意味がより伝わりやすくするなどした。また内容理解をまず日本語でした上で英文を見れば、英語への抵抗感も少なくなるのではと感じ、日本語で軽く話のまとめを書くことも行った。しかし、特に後者はあまり効果があるとは考えられなかった。関西弁訳の方は、飽きさせない・授業に対して興味を抱かせるという意味では少し効果があったが、その後生徒らが和訳を見返したかは定かではない。担当教諭からは「英語への抵抗感はあるとしても、まずは英語で理解をさせるべき。日本語で理解してしまうと、生徒らは英訳を見なくなってしまう。」と言われてしまい、授業一つにどれだけ時間をかけているのか、時間を空けてじわじわと感じていた。授業外で一番困難だったのは、生徒とのコミュニケーションである。初めは、誰も私の顔や名前なんて覚えていないと思っていたが、時間が経つにつれ

私に話しかけてくれたり、他クラスの生徒からも声をかけたりしてもらえるようになった。最終日に生徒全員にお菓子を配ったのだが、わざわざ自分が持っているお菓子を私にくれたり、中には泣いたりしている生徒もいて、胸がいっぱいになった。まだまだコミュニケーションで苦手を感じる点は多く、3週間の中でもっとこうすればよかったと後悔を感じる瞬間も多い。しかし、コミュニケーションは授業づくりよりも正解がない分、大変ながら楽しくもあると感じた。これが、教師という職業のやりがいになっている先生も中には存在するのであろう、と考えている。

おわりに

最後に、これから教育実習を控えている学生に私が伝えておきたいことを記しておこうと思う。私は実習に行く前、先輩の実習体験で「血便がでた」と聞き、震えていた。だが現実はそうではなかった。実際にそれほど辛かった学生も中にはいるので、それなりの覚悟はしておいた方がいいと思う。しかし、辛いこともある分、楽しいことややりがいを感じる瞬間がある。その状況をどうするかは自分自身の考え方や動き方でまた変わってくるであろう。もし本当に教師になろうと現段階で思っているのなら、想像しているより何倍も教師という職業に憧れを抱くだろう、と私は考える。本文でも何度も「教師は大変だがやりがいがある」と言った表現をしたと思う。実際に担当教諭と会話をしていた際も「授業が好きで先生になった方もいる。しかし実際は授業準備よりも、他にやらなければいけない仕事の方が多い。」とおっしゃっていた。これはあまり良くない意味で受け止めていたが、少し考えればもう少しいい方向に思考することができるのではないかと感じる。教員免許を取ろうとする人は、その子どもと関わるのが好きだから、が理由の人もあるだろう。授業準備に時間をあまり割けないのはもどかしい点ではあるが、その分違ったところで子どもたちのためになる何かを、先生方はやってくれているのだ。これを読んだ人が、より実習に一層行きたくなることを祈る。

教育実習の振り返り

国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc106

氏名 鳥内 千奈津

はじめに

私は高槻市立冠中学校へ6月5日から6月23日までの3週間、教育実習に行かせていただきました。実際に学校現場に行き、授業や生徒と関わっていく中で様々なことを学びました。本稿では、教育実習を通して学んだことや感じたこと、経験について記していきます。これから教育実習に行かれる皆さんの参考になれば嬉しいです。

3週間

教育実習に行く前は不安と緊張でいっぱいでしたが、実習が始まると3週間というのは本当にあっという間でした。1週目は、テスト期間だったので主に生徒と関わりや教師がどのように1日を過ごしているのか見学させていただくことがほとんどでした。2週目になると授業が再開したので、1年生から3年生の英語の授業見学や本格的に授業づくりを始めました。1週目に比べ、少し大変でしたが多くのことを学ぶことができたので楽しいと感じることができました。いよいよ3週目から授業をさせていただきました。初めて教壇に立ち、生徒の前で授業をするというのは本当に不安でした。1回目の授業は大失敗に終わりましたが、授業が終わるごとに反省をし、改善していくことで研究授業ではスムーズに授業を進めることができました。多くの先生方に助けていただき、何とか3週間やり切りました。しんどいことも大変なこともありましたが、教育実習に行ってたくさんの経験をさせていただきました。

授業について

私がこの実習で一番悩んだことは、授業についてです。授業づくりから授業が終わってからの振り返り、すべてに悩みました。私の担当は中学1年生で授業の単元は「can」でした。事前打ち合わせの際に、指導教官から授業の範囲などを教えていただいていたので、1コマ分の授業を準備して行きましたが、実際に授業見学をさせていただくと、私が作った授業は難しすぎるということがわかり、1から作り直すことになりました。1年生は、小学生の時から英語を学んでおり、「can」はすでに習っていたのである程度は理解していると思っていましたが、そうではありませんでした。さらに英語が苦手な生徒や得意な生徒など様々な生徒がいる中で、どうしたらすべての生徒が参加できる授業になるのか非常に悩みました。

私が授業を作ったり行ったりする時に大切にしていたことは、「すべての生徒が参加できる授業」です。そのために様々な工夫をしましたが、その中でも1番大切だと思ったことは、指示はわかりやすく簡潔にすることです。生徒は指示がわかりにくいと、何をすれば良いかわからなくなり、集中力が切れてしまうからです。そして、指示をわかりやすくすることで英語が苦手な生徒も授業に参加しやすくなります。

生徒との関わり

教育実習の中で大変な事と言えば、「授業」と「生徒との関わり」この2つだと思います。実習は初

めて「先生」という立場で生徒と接することができる機会です。この機会を逃さないために、私は担当させていただいていたクラスの生徒全員に1日1回は声を掛けると決めていました。当たり前のことですが、生徒ひとり一人個性や性格が異なるので、すぐに打ち解けることができた生徒も3週目になってやっと話しかけてくれるようになった生徒もありました。始めは反応が無かったり、会話が続かなかったりすることもありましたが、だんだんと心を開いてくれるようになりました。ひとり一人をよく観察し、毎日少しずつでも関わることでその生徒のことがわかるようになってきます。この関わりは授業の時にも繋がりました。活動の時にどれだけ声を掛けても授業に全く参加してくれない生徒がいましたが、その生徒が何につまずいているのかがわかるようになり、改善することができたので、最後の授業では参加してくれるようになりました。この出来事が3週間の中で1番嬉しかったです。

これらのことから生徒との継続的な関わりは本当に大切だと改めて感じました。様々な生徒がいるので、難しいかもしれませんがこれから教育実習に行かれる皆さんには諦めずに生徒と関わって欲しいと思います。

おわりに

私は教育実習を通して、さらに教員になりたいと強く思うことができました。確かに、教員という職業はしんどいことも大変なこともたくさんありますが、それ以上にやりがいがあります。これから教育実習に行く皆さんは緊張と不安でいっぱいだと思いますが、こんな経験ができるのはめったにないことなので楽しんでもらえたらと思います。

4. 就職活動

就職活動をいつ始めるべきか、どのようなスケジュールで進めていくべきかと、戸惑う学生も少なくないだろう。また、先輩の体験談を聞く機会もなかなかないかもしれない。本項目では、先輩の就職活動体験を紹介します。後輩の皆さんの役に立てたらという思いで、書かれた貴重な体験談の数々である。これらの体験談を通じて、生のエピソード、悲喜こもごもの奮闘、そしてそこから得られた知恵を得てほしい。きっと自分の就職活動に役立つアドバイスがたくさん得られるはずである。

掴んだ私の夢

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc198

氏名 加藤 更紗

はじめに

本レポートは、大学3回生から教員採用試験の結果までの、就職活動から教職という道へ変化したことや、自分探しの葛藤を書かせていただいたものです。こんな大学生活もあるんだという気持ちで読んでいただけると幸いです。

就職活動スタートの優駿塾

私の就職活動は、大学3回生の優駿塾から始まりました。3回生の頃は自分のやりたいことが見つからず、どうせ就職するなら大企業がいいなという気持ちで参加しました。ただひたすら様々な企業の説明会やインターンシップに参加していたのを、自身のカレンダーを見ると思い出します。優駿塾は企業に接触する沢山の機会があって効率的で良かったと思います。しかし、経験値の高い優駿塾生が多く、逆に自分の自己肯定感がそれまで以上に落ちてしまい、自己啓発本ばかり買っていた時期もありました。

このように、優駿塾に通っていた頃は自分探しの連続でした。優駿塾を通して学んだことは、「なぜ？」を深掘りすることです。もし自己分析で立ち止まったら、その時の自分を思い返して、行動に起こした理由を追求し続けることの重要性を学びました。

教職支援室との出会い

3回生の12月頃、友人に誘われて初めてセミナーに参加しました。正直、その頃もやりたいことがはっきりしていない状態だったので、とりあえずの気持ちで参加しました。初めて行った教職支援室でのセミナー後、支援室の先生に相談にのってもらったことが、私の将来に大きな変化をもたらすきっかけとなりました。自分の小、中、高校時代の話をする、「先生になったらいいのに」という先生の言葉が刺激になったのを覚えています。中学の頃に一度、恩師がきっかけで教師という職業に興味を持ったことを思い出させてくれました。また、「この恵まれた環境を利用して頑張ってみたら？」という言葉にも励まされたのを覚えています。

その先生との相談で決意を固め、やりたいことが見つかったのと、「これから間に合うのか」という焦りもあり、一気に火がついたように勉強を始めました。やるからには1発合格したいという一心で、同期や先輩、先生方の力を借りながら頑張れたと思います。

長かった試験期間

大阪府の教員採用試験は1次、2次、3次の構成で、期間でいうと6月24日の1次試験から9月4日の3次試験までありました。今思うと、とても長い戦いだったと感じます。

1次に向けては、移動時間も参考書を開いたり、ひたすら過去問を解いたりすることを心がけました。数学から逃げてきた私にとって、数的処理問題の多い一般教養はとても苦痛でした。

2次に向けては、面接にて簡潔に話すことが苦手だったため、伝えたいキーワードを意識して話す練習を何度も行いました。また、場面指導も苦手だったため、同期の学生や先生のアドバイスを参考にし

ながら、自分の言葉でまとめるよう努めました。

3次に向けては、面接練習、専門教科、模擬授業を並行して勉強するのがとても大変でした。最も不安だった実技に関しては、大学のネイティブの力を借りて、スピーキングやライティングの練習を積極的に行いました。

そして、結果は無事現役合格という形で終えることができました。しかし、一緒に頑張ってきた仲間たちが夢をつかむことは難しかったため、素直に喜べず複雑な気持ちでした。さらに、新卒で教師という大きな仕事、役割をこなせるのか、不安で押しつぶされそうです。

このように、教育実習を含めた5月から9月までの約4ヶ月間はとても長く、充実したものでした。

おわりに

こうやって振り返ると、周りの人々や環境に恵まれていたことに気づかされます。また、「とりあえずやってみる」ことが大事だと感じます。自分自身が知らない世界は必ずあると思うので、是非踏み出してみてほしいと思います。それが大きなきっかけとなり、今後の人生が変わるかもしれません。これからの教員人生は不安しかありませんが、向上心を忘れず、常に挑戦し続けたいと思います。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

公務員を目指す人へ

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc104

氏名 古川 純太郎

はじめに

初めまして。国際教養学部・国際教養学科の古川純太郎と申します。

本稿では就職活動を始める中で民間企業ではなく公務員を目指す人に特に参考になる投稿となります。公務員を目指さない人にも参考になる内容を記載いたしますので是非皆様のお力添えになればと思います。あくまで私の内容はほんの一部になりますので参考程度にご覧いただければ幸いです。

公務員を目指すうえで

就職活動と聞くと、三回生の冬、もしくは四回生の春から始めるイメージがある人が多いと思います。確かに就職活動を早く始めている人も中にはいますが、基本的に始めだすのはこの時期が多いです。ですが公務員を目指す方は遅くとも三回生の春から始める必要があります。その理由として、公務員は民間の企業と違い、筆記試験、いわゆる択一試験と呼ばれるものがあります。その試験が早くて四回生の四月から始まります。三回生の冬から択一試験に向けての勉強を進めても、とてもじゃないがほとんどの確率で試験には受からないと思います。それもそのはずで公務員試験は試験の科目数がとても多いです。軽く見積もっても10科目以上は絶対に勉強をしないとイケません。勿論受ける試験によりますが基本的に簡単なものではないので早くから対策をするに越したことはないです。ちなみに私は二回生の春から勉強をしていました。勉強にゴールはないので皆様是非がむしやりに勉学に励んでください。

試験が難しいから早い段階で勉強をするのではない

前述させていただいた通り、公務員試験は勿論難しいですし、勉強にゴールはなかったので試験が終わるまで常に勉強をしていました。勿論試験が難しいから勉強を早くから進めるのですが、それ以外にもあります。それは面接です。公務員は学歴を見られることはほとんどないです。どんな大学でも社会人でも試験の点数が高く、面接の内容が良ければ受かります。私個人にはなりますが試験よりも難しいと感じたのが面接です。色々な試験を受けて最終面接に行きましたが、一回も緊張しなかったことはないですし、手ごたえを感じて帰ったことはないです。これは民間の企業の面接を受けられる方も同様だと思います。そして面接がとてもしんどく、難しい物だとは先生からも聞いていました。ですが私は幼い頃から野球をしており、常に主将も務めてきて人前に立つ機会が多かったです。ですからあまり心配していなかったのですが、いざ面接の練習をした時に全く言葉が出てこなく、自分のレベルの低さに落胆しました。私は四回生の春から面接練習を始めており、最終面接試験が6月で約二か月しか練習期間がありませんでした。正直に話すと全く時間が足りなかったですし、その中で履歴書などもあります。履歴書にも莫大な時間がかかり、頭がパニックになることも少なくなかったです。そうならないために早くから勉強を進め、面接練習に取り掛かってほしいと思います。

周りを気にしすぎない

公務員は筆記試験があるので勿論ぶっつけ本番と言うわけではなく模試もあります。私は学内の公務

員講座に所属していたので仲間が沢山いました。そして私は講座内でも点数が低く周りと比べてしまい劣等感を感じていました。ですが今思い返せば本当にその時間があったいなし周りと比べている暇があるなら勉強をするべきだと感じました。勿論周りと比べてあの子よりも点数を高く、あの子に点数で勝つ、という志は必要ですが、対抗心を燃やしすぎなくてもいいです。勉強はしていれば必然的に結果もついてきます。初めはうまくいかないことばかりかと思います。ですが頑張れば頑張った分だけ自分に返ってくるものは大きいです。どれだけ自分に厳しくするか、どれだけ周りの誘惑があっても負けずに自分に進みたい道に行くか、周りを気にせず進めるとこまで進んで下さい。

最後に

長々とお話をしてきましたが、公務員を目指している人、企業に就職する人、色々な人がいると思います。大学生は4年間と一見長く感じるかもしれませんが4年間は本当にあっという間に過ぎていきます。気が付けば4回生です。物事焦って行動するよりも余裕をもって行動するほうが失敗する確率は低くなると思います。『失敗は無い』なんてことをたまに耳にすることがあると思いますが、失敗が無いのではなく失敗してしまった、では次どう行動すればいいのか、失敗した先の行動を考えられる人が失敗をしていない人だと私はこの約三年間で学びました。どうすれば成功するのかを常に考え行動してみてください。今後の人生を大きく左右する就職活動ですが、何も臆することなくがむしゃらに取り組んでみてください。根性論かもしれませんがとても根性のいることです。たまには息抜きをしてメリハリをつけて就職活動を頑張ってください。就職する人もしない人も各々の夢や目標に向かって頑張ってください。皆様の未来が明るいものになるためにも陰ながら応援しています。

就職活動について

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc076

氏名 前田 泰知

はじめに

就職活動大変さ、意識したこと、就職活動を通して感じたことを書きます。

就職活動の大変さ

私は、就職活動を大学3年の7月、不動産会社のインターンをきっかけに始めました。その時期は、私服で参加し、説明会と課題解決に向けたグループディスカッションを行いました。その時は、グループディスカッションで求められているものや、グループで目的を達成するという大切さが分かりませんでした。そのインターンをきっかけに、インターンシップの意味や企業が求めている人材というのを理解することができました。

10月頃には、自己分析を完成させ、自分の特徴を理解することができました。しかし、インターンや早期選考を5社ほど行いましたが、内定をいただくことができませんでした。また、体育会のサッカーに所属していたので、毎日朝5時半に起き、授業もあったので、夜寝る時間を惜しんでまで、志望理由やESを行う気力もなかなか出ませんでした。内定を貰う難しさ、周囲の人がどんどん内定を貰っていると聞いた時に焦り具合は今でも鮮明に覚えています。

意識したこと

先ほど述べたように、体育会サッカー部に所属し、部活と勉強とバイト、就活の両立というのはとても難しかったです。そこで私は、もっと時間を有効活用できないかと考えました。私の性格上、睡眠時



間が短いと一日の集中力がかなり低下するということが分かっていたので、睡眠時間を確保するために、電車の通学時間や授業の合間に志望理由やESの準備を行いました。また、提出期限ぎりぎりまで手を付けない悪い癖があるので、気になる企業が公開してからすぐに、取り組むように意識しました。

その結果、ESの通過率が上がったのと、企業研究する時間が作れたので、より良い志望理由を書くことができました。

就活を通して感じたこと

就職活動は、環境や今までの人生経験で大きく結果を左右すると勘違いしていました。私自身も、部活動で日本一になった経験はなく、有名な選手でもありません。しかし、自己分析をしっかりし、企業に対する根拠のある熱意という部分では、とても自信がありました。入社が決まった会社の新卒生のうち、ほとんどが関関同立以上の大学でした。頭のいい大学だからとか、頭の悪い大学だからと決めつけるのではなく、企業のほとんどが人柄を見ているなど実感しました。

また、今までの人生で挫折したことや自分の特徴というのは、普段時間を使って考えたことがなかったので、自分の人間性というのを深く知ることができ、就職活動という経験は、今後社会人になった時の原動力になると感じました。

石井先生のゼミでは、今まで国際学部では習うことがなかった、企業を色々な角度から観て、経営をしていく中で大切なことを学べます。私も入社して最年少管理職になり、会社の経営をサポートしていきたいという目標があるので、これを機に知識を付け、目標を達成したいと思います。

就職活動について

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc120

氏名 松村 菜美

はじめに

私は、皆さんが思い描くエントリーシートを書いたり、面接をしたりする就職活動を行っていません。そのため、面接の必勝法など就職活動に活きる詳しいアドバイスはできません。しかし、私自身がどのように大学卒業後の進路を決めたのかについての経験を書いていきたいと思います。この文章を読んでいただき、皆さんの将来の選択に繋がるヒントになれば幸いです。

きっかけ

私は、兄の影響で4歳の頃からサッカーをしており、大学サッカーを経験したいという思いがありこの大学に入りました。また、大学に行くからには何か資格を取りたいと考え、教員免許取得を目指しました。国際教養学科の生徒だと英語の教員を取る方が多いのですが、私は本を読むことと物語が好きだという単純な理由から国語の教員免許を取得しました。大学卒業後の進路については、大学3年生の12月頃まで明確な目標はなく、ずっと続けてきた「サッカーを続けるべき」か、「就職するべき」か、「教員になるべき」か、3つの選択肢で迷っていました。しかし、大学3年生の10月に関西学生女子サッカーリーグで3位に入ることができ12月末に行われる全国大会出場への切符を手に入れました。私が大学に入学して初めての全国大会出場が決まり、自分自身のサッカーへの気持ちが今までで一番高まりました。そして12月末に行われた全国大会では2回戦でその年の全国大会を優勝した東洋大学と対戦し、0-3で敗戦しました。この負けからもっとサッカーが上手になりたい、もっとサッカーがしたいというサッカーへの情熱が生まれました。さらに、大学4年生からは女子サッカー部の主将を務めさせていただくことになり、チーム、サッカーに対しての気持ちがより強く明確なものになり、大学卒業後もサッカーを続けようと思いました。

自分とは

サッカーを続けるという選択をしたものの、周りの学生は就職活動や教員採用試験などに必死に取り組んでいて、私は本当にサッカーを続けていいのか、サッカーを続けるという選択が本当に正しいのかと不安を抱くことは多々ありました。女子サッカー界の環境は良いとは言えず、企業に勤める方と同じように働き、夜はサッカーをするという生活は決して楽な道ではないと思います。しかし、それでもサッカーを続けようと思ったのは後悔しないためです。就職をして働くことや教員になることは何歳からでもでき、いつでもはじめることができます。しかし、サッカーは体が元気



全国大会出場を決めた時

な若いうちにしかすることができません。自分がやりたいと思ったことをやれるときにすることが私のサッカーを続けるという選択をした理由です。

おわりに

私達は、生きていくうえで様々な決断をしなければならないと思います。私はその決断に正解、不正解は決まっておらず、決めるのは自分自身だと考えます。自分がした決断に自分で不正解をつけない、後悔しないためにも決断をする前にたくさん悩み、考えることと、決断した後にその決断を無駄にしない行動を取ることが大切だと思います。就職する人もしない人も、皆さんの夢や目標が叶うことを願っております。

就職活動記

国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc089

氏名 西 孝太郎

はじめに

私は約半年就職活動をした結果、来年春からホテル会社に就職します。

本稿では、「私の就職活動」、「就活を通して感じたこと」、「皆さんに伝えたいこと」について書いています。私の就職活動体験が少しでもこれから就活を始める皆さんの参考になれば幸いです。

経験した就職活動の流れ

私が就職活動を始めたのは、大学3年生の夏休みごろでした。友人と7月にインテックス大阪で開催された合同企業説明会に参加したのが、就職活動を始めるきっかけとなりました。合同企業説明会に参加した際には、「就活生多すぎ」「企業多すぎ」という印象が強く、参加者や参加企業の多さに圧倒されました。そこでは、4社話を聞きましたが、私自身興味の湧く企業がありませんでした。その中1社のみが夏休みの1デイインターンシップの募集をしていたので「なんとなく参加すれば良いか」という軽い気持ちで参加しました。しかしインターンシップに参加したもののそこでもやはり興味が湧くことはなく、不安を残したまま夏休みが過ぎていきました。

大学3年生の11月になり、そろそろ本格的に就職活動を始めないといけないと思い、大学の学生支援課を訪れ、今から何をすればよいかを聞きました。この行動が私の大きなターニングポイントだったと思います。学生支援課では、講師の方が親身になって話を聞いてくださいます。私はそこで就職活動の基礎を叩き込んでもらいました。まずは将来私自身がやりたいこと、なりたい職業について考えました。私は幼少期に家族と旅行に行った際にホテルマンの方に優しく接客していただいた経験を思い出しました。このような思い出から経験したことをお客様に伝えようと思い、ホテルマンになるという決意を固めました。次に多くの企業のインターンシップや説明会を受けることにしました。1社だけに絞ってしまうとその企業に内定を頂けなかった場合、後悔が残ると思い、多くの企業の話聞くことに決めました。また多くの企業の話聞くことで選択の幅を広げようと考えました。最後に面接練習の徹底化です。私自身、面接が大の苦手な講師の方と徹底的に練習を積み重ねました。

年もあけて春休みになり、いよいよ早期選考が始まりました。私は、大学受験の際に後期入試まで受けており、人より遅く受験が終わったので就活はGW前には終わらせて大学生活を楽しもうと考えていました。そこで早期選考で内定をもらうべく、年が明けたタイミングで説明会や面接に挑みました。最初の面接は2月の下旬でした。オンラインでの面接だったため、始まるギリギリまでガクチカ、自己PRのメモをみて復習をして面接に臨みました。最初の面接ということもあり、かなり緊張していましたが、無事に1時間ほどの面接を乗り越えることができました。次の日には結果がきており、無事一次を通過しました。初めていただいた結果通知だったのでかなりほっとしました。そこから10社以上の面接を1週間に3回ほどのペースで進めていきました。良い結果も悪い結果もありましたが、3月下旬に最初の最終面接に臨みました。最終面接は対面で1時間ほど行われました。2月に行われた最初の面接同様かなり緊張しましたが、無事ベストを尽くすことができました。結果は3日後にきて、無事1社目の内定をいただきました。そこからは右肩上がりで、面接を受けるペースは落ちていきましたが、1

週間に一度は最終面接を受けて、無事3社から内定をいただきました。そして私が幼少期に家族と旅行に行った際に出会ったホテルマンがいた企業の選考も少しずつ進んでいき5月1日の最終面接までこぎ着けることができました。面接会場に入室した途端に面接官の方に「私どもの企業から内定をもらったらどうしますか」と聞かれ、真っ先に「今日で就職活動を終了します」と言いました。そこから1時間ほど面接が続いたのですが、圧迫もなく穏やかに面接をしてくださったので1時間があっという間に過ぎました。ベストを尽くすことができたので悔いはありませんでした。結果は1週間後にきて、無事内定をいただき、GW前に就職活動を終えました。全体を通しての結果は、約半年就職活動をして、10社以上受けて5社に内定を頂きました。悔いなく終えることができたので非常に満足しております。

就活を通して感じたこと

就職活動を通して感じたことは、焦らずにすることが一番だということです。5社以上の企業から不採用のメールを受けまして、中には面接を受けて1時間後に不採用のメールを受け取ったこともありました。挫折するタイミングは人それぞれです。私は、不採用のメールがくる度に挫折しかけたが、学生支援課の方や友達、先輩に相談することで気分が少し楽になりました。就職活動をする際には一人で抱え込まずに相談することも大事です。焦らずにどんと構えて挑むことで良い結果につながったのではないかと考えます。

また私、就職活動において逆質問が重要になるのではないかと思います。自己PRやガクチカを上手く伝えられずにいても、逆質問で一発逆転を狙えます。私は、緊張して序盤に失敗することはわかっていたので、逆質問にかけていました。面接を受ける企業のホームページを徹底的に調べて、企業研究を必死に行いました。実際、失敗することもなく、うまく面接官に伝えることができたので逆質問で印象が変わったことは何度もあると思います。これから面接を受ける皆様には逆質問もしっかり準備することをお勧めします。

皆様に伝えたいこと

私が皆様に伝えたいことは、悔いなく就職活動を終えることです。

就活は早い時期にやっていて損はないです。また一社だけでなく多くの企業の面接を受けることをお勧めします。経験値を上げることで自信に繋がります。不採用通知をもらうことも、なかなか選考が進まないこともあると思いますが、友人との時間を大切にして、就職活動メインの生活にならないようにすることが大事だと考えます。自分が一番納得のいく企業に内定をもらえるように焦らず頑張ってください。

就職活動について

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc043

氏名 小田 皐生

はじめに

就職活動と聞くとどのような印象を抱くだろうか。私が就活を始める前は、ただ漠然と「大変そう」というイメージしかなかった。そのため、最初は不安だったし効率よく動けなかった。もし当時就活のノウハウをもっと理解していれば、より不安が少なく落ち着いた活動ができただろう。本稿では就職活動を終えた私が至った、就活に対する考え方を伝えようと思う。

早期選考

インターンシップに参加するメリットは幾つかあるが、最も大きいのは早期選考に参加出来る可能性がある点だと考える。早期選考は年末から2月末頃にかけて行われるのだが、インターンシップに参加していなければ参加出来ない企業がほとんどだ。中には書類選考や一次面接を免除されることもある。さらに、本選考より受かる確率が高い特徴もある。なぜなら、早期選考の内定者数をもとに本選考の内々定者数を決定するため、遅れれば遅れるほど門は狭くなるからだ。また、早期に内々定を得ることによって心に余裕が生まれ、その後の選考を気楽に進める事が出来ると思う。以上の理由で早めのインターンへの参加を推奨する。

人事担当者との騙し合い

人事担当者を信じ切ってはいけない、時に嘘まがいの文言を使って会社を良く見せようとする者が居るからだ。人事の目的は人材の確保であり、自社がブラックだろうが就活生の将来など二の次なのだ。一部の人事担当者は内定承諾を取ってノルマを達成する事しか考えていないのだ。そのため、多少の偽り込みで会社を良く見せようとする。就活生はそこを見極める必要がある。私は内々定を頂いていた会社に内定承諾したが、後から辞退した経験がある。なぜなら、承諾前の説明と承諾後の説明の内容に差異が生じていたからだ。それは明らかに就活生を騙そうとする意図が見受けられる内容だった。これまで私達学生は先生や親という大人に守られてきたが、社会に出れば自分で自分の身を守らなければならない。今回の失敗は学生気分が抜けていない自分の未熟さが招いた事だと自覚している。ただし、実は就活生も騙す側にあるのだ。全ての会社に「御社が第一志望です」と伝える点だ。内々定を出した会社は早く承諾を得ようと期限を設けるだろう。それを引き延ばすも断るも就活生の自由なのだ。そうして選ぶ側と選ばれる側の立場が逆転する、そこが就職活動の醍醐味なのだ。就活生にはこのような批判的思考を持って活動を進めてほしい。

おわりに

私が就職活動を始めたのは三年次の6月だった。夏期インターンに参加した企業の早期選考だけで4社から内々定を貰い、本選考が始まる頃には選択するだけだった。気持ちに余裕が生まれる点でも早めのインターンをお勧めする。しかし、早い事が必ずしも正義ではない。自分に合った会社を見つける事が最優先だからだ。本稿はあくまで私の意見に過ぎないので、自分のペースでベストな就活方法を探してほしい。

就職活動と教員採用試験

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc150

氏名 岡田 凜

はじめに

本レポートは、私が教員採用試験を受験、そして合格するまでの出来事や、その過程を通じて学んだこと、得たことを共有するために書かせていただくものです。ただし、本来教員採用試験を受ける人の過程とはかなり異なるところがあると思います。そのため、教員採用試験を受験予定の方だけではなく、将来の選択肢に一般企業への就職も視野へ入れている方にもお役に立てれば幸いです。

教員採用試験を受けるまで

私が教員採用試験を受験することを決めたのは、4 回生の 4 月の終わりでした。それまでは他の多くの学生と同様、一般的な就職活動を行っていました。3 回生の 11 月ごろから教育支援室で行われていた教員採用試験セミナーへの参加申し込みはしていたものの、授業と部活動が、また春休みには就職活動が忙しく、ほとんど参加できていませんでした。特に部活動では、体育会の部活動の中でもトップアスリートに分類される少林寺拳法部に所属していたために、セミナーが始まった時期には参加することができませんでした。また、時期にはまだ一般就職か教員採用試験を受けるかすら決めきっていなかったため、そういった気持ちもセミナーの参加回数に関係していたのかもしれません。

教員採用試験に向けてやっておいた方がよいこと

ここで、教員採用試験を受けるにあたり私がやっておいた方がよいことをいくつか書かせていただきます。まず、日ごろの授業をしっかりと受ける、ということです。当たり前のことではありますが、日々の授業をしっかりと受け、単位を落とさないことが大前提です。教職関連の授業の中で小テストなどがある場合は未来の自分を助けるつもりでしっかりと勉強し、点数を取っておきましょう。いざ教員採用試験を受けるとなった場合、その時点から再度勉強しなおすよりも、授業時に身に付けることができているれば軽い復習程度で済み、他の知識を身に付けることができるためです。

次に、自分が夢中・本気になれることを見つけるということです。私にとってはそれが部活動でした。部活動を通してたくさんのことを身に付けることができ、おかげで自分自身の人生がとても厚みのあるものとなりました。また、その結果面接で話すネタが増え様々な質問にも自分の経験を交えながら答えることができました。そのため、なにかとことん夢中になれる趣味を見つけてみたり、あるいはボランティア活動を試してみたりするのもよいかもしれません。

そして、いろいろな世界を知るということも教員採用試験を受けるにあたりやっておいた方がよい事だと思います。私にとってはそれが就職活動でした。就職活動では職種を絞らずさまざまな業種を受けていたため、様々な業種の細かなことについてまで知ることができたことはもちろん、採用試験前にエントリーシートを何十社分と書いていたため自ずと自己分析ができていたり、何十回とオンラインや対面で一次面接から最終面接を受けることで自然と面接練習ができていたりしました。また、新卒で教員になると、教員以外の職に就いた同期と比べ社会のことについての知識がないため、生徒に教えられることが少なくなってしまうと思います。しかし、初めから教員一本に絞るのではなく、もし新卒で教員になる

にしても就職活動などを行い、それらを通して教員になる前に少しでも社会と繋がる経験をしていれば、少しは生徒に話せる何かが手に入るのではないかと思います。

以上3点が、教員採用試験を受けるに私がやっておいた方がよいと思ったことです。

おわりに

ここまで書いたうちのほとんどが私の教員採用試験を受けるまでのエピソードであったため、タメになることは少なかったかもしれません。しかし、最後まで読んでくださった方なら、私が他の教員採用試験を受ける人とはかなり異なる道をたどって受験まで至ったことを知っていただけたと思います。しかし、教員採用試験に対しての時間こそ短かったものの、部活動や就職活動といったことには他の受験者よりも人一倍時間と労力を費やしてきたと思っています。そして、そういった経験が最終的に教員採用試験合格につながったのではないかと感じています。

どんな経験を経て教員採用試験の受験に至るかは人それぞれではあると思いますが、もし、教員採用試験を受けることになった暁には、勉強量や勉強時間だけではなく、「気持ち」がとても大切だと思います。運も実力のうちです。気持ちで運を味方にしてください。教員になるために一番必要なことは「教員になりたい」そう思うことです。これから教職課程を履修していく中で、自分よりも授業がうまい人がいたり、その人と自分を比べて「自分は教員に向いていないのでは」と思ったりしてしまうことがあるかもしれません。しかし、自分ではわからなくても一人一人に必ず教員に向いているところがあるはずです。その良いところをこの大学生活の中で、また教職課程を履修していく中で伸ばしていくことができれば、そして先ほども述べたように「教員になりたい」と思う気持ちさえ持っていれば、必ずその気持ちは報われます。教員採用試験の受験を考えている人は、自分が教員になっている姿をイメージしながらこれからも頑張ってください。教職のことでなにか困っていることがあれば、周りの友達や教職支援室の先生方が、きっと力になってくれるはずです。

最後に、私のこの手記が皆さんのお役に少しでもお役に立てたなら幸いです。

就職活動

国際教養学部国際教養学科 4 年

学籍番号 20cc165

氏名 大串 天真

はじめに

本稿では、私が就職活動を通して感じたことや学んだことについて記しています。また私自身がどのようにして就職活動を進めていったのか、内定を頂いたのかという経緯についても記していきます。

アパレル企業就活

私が就職活動を始めたのは大学 4 回生になる前の 2 月でした。正直この段階で就職活動始めるのはかなり遅い方だと認識しておりましたが、自分の勤めたい企業がアパレルだということもあり、フリーターでもいいのかなと思ったりもしていました。しかし、一度就職活動を始めようと思いアパレル企業の募集を少しずつ見るようになりました。大学での企業合同説明会などにアパレル企業はなかったので、自力でどのような企業があるのか調べながら始めていきました。運も味方についたのかエントリーシートは14社のうちほとんど通過することができ、気持ち的に余裕を持ってしまいました。その結果ことごとく二次面接等で落ち、このままでは就職活動に失敗するとまで思いました。しかし、自分の好きなことだということもあり、2月から始めた就職活動を6月で終えることができました。

内定をいただいた経緯

私が内定をいただいたのは、面接を多数行なっていく中でやはり慣れてきた最後の方に受けた企業です。ここから分かることとしては、やはり面接は慣れだということです。大学でも面接練習やエントリーシートの書き方の講座などもあるかと思います。しかし、私はそういったことを一切してきませんでした。これは決して良いことではありません。周りの人は必死に面接練習などを行なっている方もいましたし、遊ぶ時間を削って選考前の企業研究などに時間を費やしたりできている方もいました。でも私は実践をして経験を積んでいくしかないと思えてきました。よくある質問などを講座などで教えていただけるかもしれませんが、テンプレ等を作っても面接官はそれを踏まえて質問してくるので使える場面はほとんどありません。

ここで私が何を言いたいのかというと自分が本当に勤めたいと思う企業や業界でないと内定をいただけないということです。私はさまざまな企業の面接を通していく上で、質問に対して答えるという形式で捉えずにあくまでも人と人の会話だと思って面接に臨むようになりました。そうするようになってから、自然と自分のこの仕事がしたいという熱意が伝わるようになったと感じています。

おわりに

就活という重いワードに押しつぶされ気持ち的にも病んでしまう人も多数いるかとは思いますが、私はプラスな気持ちで就活に挑むことができました。それはなぜかと考えた時に1番は自分の好きなことを仕事にしたいという気持ちが大きかったと思います。エントリーシートなども自身のコーディネート写真などを添付することなどがあり、他の就職活動の例を拝見してもあまり載っていないようなことをしなければいけなかったのが不安もありました。ですが、いま振り返ると楽しんで就活をするこ

とができたのかなと思います。インターンシップなども対面式のものに参加しておらず準備できているのか分からない状態で多数の面接を受けていました。

ここで私の経験から皆様にお伝えできることは、就活をあまり重くとらえすぎない方がよいということです。インターンシップや説明会もちろん参加するに越したことはありませんが、参加しなかったからといって内定を頂けないということではありません。まずは自分のしたいことを見つけることが大事だと思います。どんなことでも良いと思います。趣味などに仕事を結びつけることも就職活動が捗るコツかと思いました。

5. 授業外活動

授業外での活動では、自らが学んだ知識などをアウトプットし、講義などから得られるものとは異なった実践的な学びというものを、インプットするとても貴重な場である。2023年度では、新型コロナウイルスが収束し始めた時期であり、様々な活動に参加し始めた学生諸君が多数みられた。

2023年度のオープンキャンパスは、学生スタッフの参加による活躍があり、開催回数も昨年度よりも増えた2回の実施がなされた。そして、実施は対面方式の形式で行われ、高校生や保護者の方々をお招きすることができ、内容についても高評価をいただけたように思う。

また、国際学部国際学科グローバルスタディーズ専攻の1年生が短期語学留学を実施することに対し、前年に短期語学留学を経験した2年生が、留学する予定である1年生に対し経験や体験談の共有などのサポートを行うことで、1年生の留学体験を充実させるための短期留学メンターが行われた。さらに、OIDAI Initiativeフードドライブ、カナダの有機農家でのファームステイ体験、留学生が参加した高野山・OIDAIグローバルプロジェクトも行われた。

次ページでは、このような様々な活動等を紹介する。

Journey to SDGs Solutions (SDGsの解決策への旅)

2023 OIDA SDGs Initiative (国際教養・国際学部コンテスト)

国際学部国際学科 2 年

学籍番号 22WA087

氏名 Batsaikhan Uchral

はじめに

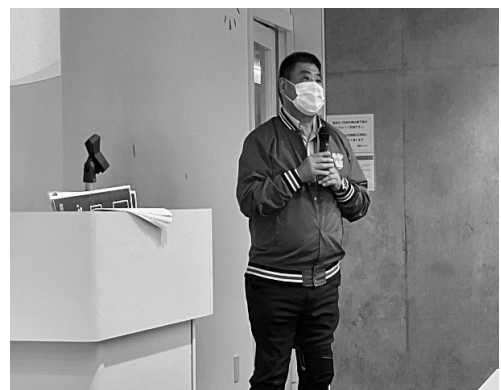
Every journey has a reason for beginning and mine is simple. I was still a freshman, and I was eager to try out new things. As we were making presentations for a certain class, I heard the teacher talk about an opportunity: to present your idea for solutions we as students can incorporate to make an impact on our surroundings. Not just presenting ideas during class for grades, but in front of judges for a chance to win a competition. That competition was the OIDA SDGs Initiative English Presentation Contest.

すべての旅には始まりの理由があり、私のものは単純である。ある日の授業で、先生が私たちに自分たちをチャレンジする機会について話したのだ。その機会は、私たち学生として周りに良い影響を与えるために何を取り入れることができるかの解決策を発表することでした。ただし、成績のためのクラス内での発表ではなく、審査員の前で競技に参加する機会だった。その競技がSDGsイニシアティブスピーチコンペティションだったのだ。

It was a competition where you could participate alone or as a group of 2 or 3 and come up with solutions for the topics that were given (all SDGs-related problems). At first, I was reluctant to join and so were most of the Japanese students in our class. “We already did presentations for classes and now for a competition?! No way.” is what I thought. Further, the presentation had to be in English, so it is little wonder students were reluctant to do it. Speaking in front of people is hard as it is, but to do it in a foreign language was inconceivable. However, I was encouraged by my surrounding foreign students who were all eager to apply for the competition and I was also encouraged by my then-professor Mr. Jake Reed.

このコンテストでは、一人でも参加でき、2人か3人のグループで参加することもできる。与えられたトピック（すべてSDGsに関連する問題）に対する解決策を考え出す競技である。最初は参加することに躊躇したし、クラスのほとんどの日本人の学生も同じように感じていたと思う。「もう授業でプレゼンしているのに、今度は競技のために?! 無理だよ」と思っていたのだ。しかも、プレゼンテーションは英語でしなければならないため、学生たちがためらうのも無理からぬことだった。人前で話すだけが難しいことであるが、それを外国語で行うなんて考えただけで。しかし、私の周りの外国の学生たちは競技に応募することに熱心の姿を見て私も自分をチャレンジしてみたくなり、教授であるジェイク・リード先生も励ましてくれたおかげで申し込む勇気が出たのだ。

So along with my friend Hayqal, I decided to gather up all the courage I had to enter the competition. We started





preparing early and during summer vacation we would meet at least once a week to gather our research. We started making the slides and writing the manuscripts. When the semester started after class, we would borrow an open classroom and do practice rounds while looking at our manuscripts. Sometimes we would invite our friends and present before them to hear their opinions on how to improve. After all this hard work, we made it to the final round and did our best until the end. In the end, we did not win 1st place; we won 2nd place,

and it was hard to accept at the time. However, we gained something more important, which was experience, teamwork, dedication, fun memories, and the ability to research and come up with ideas for solutions. I think that was the whole point of the competition.

友達のハイカルと一緒に、私は持っていたすべての勇気をだして競技に参加することを決めた。私たちは早めに準備を始め、夏休み中は少なくとも週に一度は集まって研究を進めていた。プレゼンの資料作りや原稿の執筆も始めた。秋学期が始めても、授業の後には開いていた教室を借りて原稿を見ながら練習を行っていた。この厳しい作業のすべてを経て、私たちは決勝進出を果たし、最後まで最善を尽くした。結局は1位にはなれなかった。2位に入賞し、その時は受け入れるのが難しかったです。しかし、優秀より重要な経験、チームワーク、献身、楽しい思い出そして調査や解決策を考える能力を得ることができたのだ。今考えたらそれがこのコンテストの目的だったと思う。

Reason to Continue

When I heard about the competition this year, I wanted to challenge myself again and see how far I could get on my own. In addition, I was informed that this year's competition was aligned with the philanthropic cause of supporting the food bank, thereby contributing to charitable efforts in donating food. I found this initiative to be particularly commendable, as it aligns seamlessly with the overarching theme of the competition, which revolves around instigating positive change. The incorporation of such a purposeful element served as a thoughtful and effective means of actively engaging participants in a meaningful and socially impactful endeavor. I decided to enter the competition by myself because I wanted to do everything on my own. The research, the slides, the manuscript, and the practice sessions are hard to do if you must match another person's schedule and have different opinions. I applied through the procedure of picking a topic and submitting one slide of my ideas. However, I wasn't accepted and was told that too many students entered this year and they had to eliminate some people. One of them was me.

今年このコンテストについて聞いたとき、再び自分にチャレンジし、自分だけでどこまで行けるかを見てみたいと思った。すべてを自分でやりたかったので、一人で参加することにしたのだ。さらに、今年のコンペティションは食物銀行の支援フードバンクという慈善活動と連携しており、これによって食料の寄付に貢献しました。

この取り組みは非常に賞賛に値すると感じます。なぜなら、それがコンペティションの基本的なテーマである積極的な変化を促進するという大きな目標とシームレスに調和しているからです。このような目的を持った要素を組み込むことは、参加者を積極的に関与させるうえで思慮深く効果的な手段となり

ました。

It was hard to accept at first, but after some time, I felt relieved that I didn't have to go through so many preparations to present. Time passed, and the summer break started. I had forgotten all about the presentation when one day I received an email saying the first person to reply to this email could enter the competition. I replied as fast as possible and waited for a response. After a few minutes, I got another email that said I was officially back in the competition. I was so happy and thrilled to be able to participate again, but then I started to panic because I had not prepared anything for the presentation, unlike last year.

Preparation for The Contest (again)

My topic was how to make Japan more aware of gender issues, which was a lot harder than I thought. I first started researching on a global scale and found that even though Japan is a developed country, it was close to last place on gender issues. It was also hard to talk about these issues because they are also very much embedded in their history and culture. So, I started asking my group of friends what they thought about the issues. Most of them agreed that women were not treated equally to men in workspaces. However, many male students that I asked were against making quotas for hiring women in companies and government positions. The reason is that they did not see the need for it, and they felt women should not be given a position because of their gender while men also worked hard to obtain the same position. I could understand their perspective, but my opinion was different. While I do believe women should be able to choose what they want to do with their lives be it housework or work, we should not ignore the fact one is less encouraged than the other.

To further improve my point, I started researching how women were treated in the government, companies, and medical facilities. I found out that women's examination scores had been lowered at medical schools in favor of male applicants, female politicians had been sexually harassed and stalked during their campaigns and learned about other stories of women having not been treated seriously in their fields. I had to talk about these problems, and I wondered how gender issues affected men as well.

It turns out that in more male-dominated fields, depression and anxiety are more common. In Japanese society, you must find a place to fit in, and men while doing that risk losing their own individuality in their work which contributes to a high suicide rate in men ages 40-50. This problem also hardly affects people from LGBTQ+ communities to express themselves because they are afraid to stand out. My solution to these problems was being aware of gender issues and educating others on them, making a safe space to talk about these issues, and encouraging others to stand against inequality and harassment.

I made the slides and finished the preparations before the day of the first round. I was very nervous before the presentation, and when it started, I was talking too loudly to distract myself. My voice cracked halfway through the presentation, and it kept cracking again and again. As much as I was embarrassed, it was also funny to me, which made me lose a bit of my nervousness. When it was over, I had gone over the given time and was asked difficult questions which I tried my best to answer. I was very lucky to have passed the first round even after going over the time.

On To the Final Round

Before the final round, I consulted with teachers on how I could improve my presentation and received a lot of feedback as well as advice. I deleted and changed many slides and changed the solution. I decided to make a circle in our university where it can be a safe space to talk about gender issues, educate others on these issues, and make sure women are encouraged to do just as much as men do. The circle's name is Otemon's Equality League (O.E.L.). In the final round, I presented my ideas the best I could. After the 5 presentations were over the contestants were all praising each other for their hard work, and no one knew who would get 1st place because everyone did such a good job.

ファイナルラウンドの前に、プレゼンテーションをどのように改善できるかについて教師に相談し、多くのフィードバックやアドバイスを受けた。多くのスライドを削除し、変更し、解決策も変更した。大学内にサークルを作ることを決め、ジェンダーに関する問題について話すための安全な空間になる場所を作りたいと思ったのだ。他の人々にこれらの問題を教育し、女性が男性と同じくらいの活動することを奨励するのが目的になる。

I cannot express the shock I felt when I heard them call out my name as the winner. I felt happy that the message I was trying to convey seemed worthy for the judges. I am still very grateful to those who encouraged me to take part in this competition, and to those who were given the opportunity to win. I think this competition will become one of my fondest memories of my university life because it made me challenge myself, I got to learn so much and gain so many perspectives on many problems. I would have never imagined this experience to change me so much before entering, but it did.

今でも私の名前が優勝者として呼ばれたときの驚きを表現することができない。私が伝えようとしていたメッセージが審査員にとって価値あるものと思われて嬉しかった。このコンテストに参加するように励ましてくれた方々、そしてこの機会を与えてくれた方々には今でもとても感謝している。このコンテストのおかげで自分自身にチャレンジさせ、多くのことを学び、さまざまな問題に対する多くの視点を得ることができた。このコンテストは大学生活の中で最も思い出深い思い出の一つになるだろう。

If there is one thing I would like to say to future participants, it would be: “the point is not to win, it is to gain something from the experience”. No matter who wins at the end of the day, the true winner is the person who learned the most out of their loss.

未来の参加者に伝えたいことは、『勝つことが目的ではない。経験から何かを得ることが優秀するより大事である』ということです。最終的に誰が勝とうとも、真の勝者は敗北から最も学び取った人です。



4日間のオープンキャンパススタッフ

国際学部国際学科1年

学籍番号 23WA067 氏名 大道 勇哉

学籍番号 23WA079 氏名 森井 隼

はじめに

私たちは2023年の夏期休暇の間、小松久恵先生に推薦をしていただいて、計4回国際学部のオープンキャンパスのスタッフをさせていただきました。去年は受験生として様々な大学・専門学校のオープンキャンパスに参加し、進路を決めるために各学校のスタッフの方に手伝ってもらっていましたが、今年はずいぶん自分たちがその役割を担う立場になったということが嬉しく、とても新鮮な気持ちでいっぱいでした。今回は、そんな4日間で感じたことや実際にあったことを赤裸々にかきたいと思っています。

森井隼の体験談

まず、私（森井）が、今回のオープンキャンパススタッフにおいて一番印象に残ったことは、やはり国際学部の学部説明です。

学部説明では、ただ国際学部はこんなところと大雑把に説明をするのではなく、国際文化専攻とグローバルスタディーズ専攻の違いや各授業の紹介、留学についての話やコンセンレーションパッケージで行う海外での様々な活動などを話しました。より深く追手門学院大学の国際学部の良さを知っていただいて一人でも多くの人が本校に入学してもらうことを願って、一生懸命説明しました。

しかし、人に説明するのはとても難しく、またとても緊張するもので、どんなに心の準備をしてもいざ挑戦してみると、とても拙い説明となってしまいました。高校生の緊張を和らげてあげるのが大学生である私の役割だと思うのに、自分自身が高校生以上に緊張してしまいました。

そこで助けてくださったのが先輩方でした。先輩方はとても余裕があって、私が緊張して困っていて、相手方を困らせてしまった時でもすかさず助けてくれて、初めてでも安心して参加することができました。

大道勇哉の体験談

つぎに私（大道）が、計4回国際学部のオープンキャンパススタッフとして参加させて頂いたなかで、一番印象に残ったことについて説明します。一番印象に残ったことはパネル説明です。パネル説明とは、オープンキャンパスに来てくれている複数の学生たち、またその親御さんたちを対象に、国際学部のオープンキャンパススタッフが2人1組でパネルを使って国際学部のことについて細かく説明していくというものです。このパネル説明には、オープンキャンパスの初日から取り組ませていただきました。

やはり、初回のパネル説明は、初めてのオープンキャンパススタッフということもあり、緊張しましたが、先輩方やオープンキャンパスに来てくれている方々に出会うなかで、緊張は少しずつ和らいできました。人と接することが好きなこともあり、緊張が和らいでからはとても楽しく取り組むことができました。パネル説明を通して色々な方々と接することができたこの4日間は、自分にとってとても貴重な経験ができたと思っています。

色々な方々と接するという事は、色々な意見に触れるということです。単純な国際学部への疑問は

もちろん、授業内容や部活とバイトの併用は授業に支障をきたさないのか、など私生活の面などの内容も質問されました。もちろん国際学部に関わる内容でしたらパネルに記載されている内容を読めば、ある程度のことを質問されている方々へお答えすることはできますが、私生活の面での質問や学生目線での意見を期待されている場合の質問には、その要望にあわせて答えないといけません。どう返せばいいのかを考えながら、自分の伝えたい内容や思いを伝えるという時間は本当に楽しい時間で、オープンキャンパスに来てくれている人たちの質疑応答にこ



パネルを使って高校生に説明をしている大道

たえる時間が、気が付けば自分が伝えたいことを伝える時間になんか変わっていると錯覚するぐらい、来てくれた人たちとコミュニケーションがとれたと思います。そして、パネル説明が終わった際に、本校が第二志望から第一志望に変わった、本校を受験することに決めた、パネル説明を聞いて入学したいと思ったので本校に受かるように頑張ります、などのお声をいただいたときには本当にうれしかったです。自分の気持ちを言葉にして伝えるというのは簡単ではないと思います。だからこそ、このパネル説明ではその壁を破ることができたのかと思います。

オープンキャンパスに来てくれた方々や先輩方、普段関わることのない国際学部の関係者たち（教授たちなど）とたくさんコミュニケーションをとったことで、自分自身にとってとても刺激的で楽しく印象に残った4日間でした。

おわりに

この4日間で様々な貴重な経験をさせていただきました。やはり私たちの学部のことはしっかりと把握して、それを相手に伝えられるということが一番大事だということを再認識しました。今回私たちが高校生たちにこれだけは知ってほしい！と思って伝えたことは、「ただ大学に入ることができたらOK、大学に入るのがゴール、ではなく、大学に入学してから何をするのか、それが一番大事だ」です。これを伝えたくて大学での日常風景、留学の話やコンセンレーションパッケージなどの国際学部に関わるお話をさせていただきました。それが果たしてどれだけ伝わったかはわかりませんが、一人でも多くの受験生に、その言葉を胸に本校に入学してくれたら嬉しいなと思います。このオープンキャンパススタッフの仕事は2年次、3年次もあるそうなので機会があれば是非引き続き来年度もやりたいと思いました。ご高覧ありがとうございました。

オープンキャンパススタッフ

国際教養学科 3 年
学籍番号 21CC052
氏名 寺本 和奏

はじめに

皆さん、こんにちは。国際教養学科 3 年の寺本和奏です。私は、7 月 22, 23 日、8 月 26, 27 日に総持寺キャンパスで行われたオープンキャンパス（以下 OC）に国際学部の説明をする学生として参加しました。私自身、OC スタッフは 2 度目の経験で、今回は国際学部学生のリーダーを任せて頂きました。

本稿では、「OC スタッフについて」「活動内容」「この活動を通して」の 3 つの項目に分けて私がこの活動を行って感じたことを伝えたいと思います。

OC スタッフについて

まず、OC スタッフについてお話しします。追手門学院大学は学生主体で OC を行っており、①キャンパスツアーや誘導を担当する学生と②各学部の教室で説明を行う学生に分かれています。私は②の国際学部の説明を行う学生として参加し、今回は 1 年生 2 名、2 年生 6 名、3 年生 4 名の計 12 名で担当しました。2023 年の OC に参加いただいた方はもしかするとお会いしていたかもしれませんね。このように、追手門学院大学の OC は学生主体で行われています。

活動内容

まず OC 前日に準備で机の配置を考えたり、パネルの設置を行ったりしました。昨年度パネル説明を行う際に隣のグループとの距離が近く説明しにくかったという反省点があったため、今回は間隔を少し空けるようにするなど、前回の経験を活かしてより良い空間づくりを心がけて行いました。

そして OC 当日の活動としては前回同様「受付、誘導、呼び込み」「パネル説明」「個別相談」を行いました。これに加え、今回は大学生の経験・生の声を高校生に知ってもらうために、学生が「プレゼンテーション」を行う機会も設けました。学生が今までの経験（海外インターンシップ、自主研究、学生生活など）を話しており、高校生や保護者の方々の興味を惹きつけていたことが非常に印象的でした。私のプレゼンテーションでは、大学選びの際に心がけたことや、大学入学と同時に参加したガンバ大阪インターンシップ（現プロジェクト実践）での経験を話しました。このような機会があることで、しっかりと振り返りができることに加え、どのような力が身についたのかを改めて実感することができた



プレゼンテーションを行っている様子



7 月担当した先生と学生スタッフ

この活動を通して

まず1つ目はリーダーを担当したことです。主には学生のローテーションを考えたり、状況に応じて配置を変更したりしました。2回目の経験ということで、他の学生の動きも把握しながら対応することができました。学生全員が非常にやる気があり、高校生に思いを伝えることを第一に動いてくれたため、私自身も楽しんで行うことができました。

7月22日(土)		10時					11時					12時					13時					14時					15時					16時									
		30	40	50	0	10	20	30	40	50	0	10	20	30	40	50	0	10	20	30	40	50	0	10	20	30	40	50	0	10	20	30	40	50							
A	①						③(15分まで)					③					③					①																			
B	②						①					②(45分まで)					②					④					③														
C	③						②										③(55分まで)					③					①														
D	④						③					①					④(15分まで)					④					②														
E	⑤						②					①					④(15分まで)					①										②									

学研説明
・小松先生
・ウチラル

学研説明
・菅田先生
・わかな

学研説明
・島先生
・アーサー

学研説明
・中先生
・15分！

ランチ	
A	11:30-12:15
B	12:00-12:45
C	13:10-13:55
D	12:30-13:15
E	12:30-13:15

① 受付、指導、呼び込み

② パネル説明

③ 個別相談(パネル説明)

④ 休憩(昼休み45分、休憩15分)

そして2つ目は昨年同様、連絡先を交換した高校生から「合格しました!」という連絡が数件あったことです。OCは高校生が初めて大学に来る機会だと思っており、OCスタッフは大学の顔になると考えています。今回も数名の高校生から「先輩の話に惹かれて受験を決めました!」と言っていただけたので非常に嬉しかったですし、しっかりと役目を果たすことができたのだと安心しています。

今回のOCは2度目ということで先輩という立場で、初めての学生に流れや活動内容を伝えるという役目がありましたが全員が積極的に動いてくれたため、全体を通してスムーズな運営ができたと感じています。そして今回初めて行ったプレゼンテーションでは、他の学生の経験を知ることができたり、伝え方を学んだりする良い機会であったと思っています。授業以外でこのように大学に関わることができる人は数名しかいませんが、今回もこのような大切な機会に携わることができ、非常に嬉しく思っています。私自身、次回のOCが最後になりますが、機会を頂ければ参加したいと思っています。

– 138 –

短期留学メンター

国際学部国際学科2年

学籍番号	22WA141	氏名	新納 頼揮
学籍番号	22WA131	氏名	小林 美緒
学籍番号	22WA155	氏名	川口 由羽
学籍番号	22WA098	氏名	宮尾 藍羽
学籍番号	22WA048	氏名	武田 晴陽

はじめに

本稿では、国際学部国際学科グローバルスタディーズ専攻の1年生が短期語学留学を実施することについて、昨年に短期語学留学を経験した2年生が、留学へ臨む1年生に対し経験や体験談の共有などのサポートを行うことにより、1年生の留学体験を充実させるための役割を担う短期留学メンター（以下、メンター）について記します。

このレポートは「メンターが行ったこと」について、「メンターによる活動を通してのコメント」について、メンターからのコメントをまとめ、記したものです。

短期留学メンターが行ったこと

活動では、メンターが一年の夏に経験した同様の語学留学の体験、エピソード、学んだことなどをプレゼンテーション形式で1年生全体に共有したり、グループに分かれてより詳細な体験の共有をしたり、それぞれ1年生が抱える質問や疑問に対応したりするなどを行いました。また、1年生が帰国後に行う留学成果報告会では、メンターが司会進行を行い、それぞれにレビューをするなどの積極的な交流の機会が設けられ、実践されました。

短期留学メンターによる活動を通してのコメント

「新納からのコメント」

私は、このメンター活動に参加し、積極的な学年を超えたコミュニケーションを経験することができました。国際学部は2年生が一期生であるため、私たち2年生は、留学をする際の先輩の助言が得られない不安を特に実感している世代であったと認識しています。しかし、だからこそ留学について何を不安に思うのか、どんな助言を求めているのかを明確に理解しており、1年生の充実した留学生活に貢献できたのではないかと考えています。

また、この経験を通じて、上級生としての適切な振る舞いや、相手の自発的な学びを阻害しない程度の距離感を保ったアドバイスの方法を学ぶことができました。

「川口からのコメント」

私が今回メンターとして自らこの活動に参加した理由は、自分の留学体験での失敗を後輩に語り、同じ失敗をしてほしくないと思ったからです。私は、昨年の語学留学が初めての海外経験であったため、そこでは成功はもちろん、失敗や後悔もしました。この思いから、私の体験談で後輩たちの留学で成功体験を増やせるようにサポートしたい、また、このような活動を通じて自分も成長したいと考え、この活動に参加しました。

この活動に参加したことで、私の経験を他の人が聞きたいと思ってくれていることを改めて認識し、自分の価値を見出すことが出来ました。このような機会を作ってくださった北村先生にも感謝しています。またこのような機会があれば参加させていただきたいです。

「武田からのコメント」

私は、この活動を通じて後輩との交流機会を得ることにより、先輩として留学での話以外にも大学での様々な経験を話すことができました。私はサークルなどの活動に所属しておらず、他学生との交流があまりありません。メンター活動では後輩と話すことができ、僕以外の人の大学生活がどのようなものかを知る良い機会となりました。留学経験だけではなく、この四年間という貴重な大学生活の時間で、自分は何をするべきか、何を将来に繋げるかを見出すヒントを得たように思います。また、このメンター活動の経験を今後の大学生活に活かしていこうと考えています。

「小林からのコメント」

私がこの活動に参加した理由は、私たちが経験したことを伝えて、充実した有意義な留学生活を送って欲しいという思いと、昨年私が、現地の正確な情報を知りたいと思っていたことがあったからです。活動の時には、本当に私たちの言葉が届いているのか、少しでも役立てられているのか不安でした。しかし、留学から帰ってきた彼らの姿を見て、私たちの言葉は無駄ではなかったのだと感じました。この有意義な活動を通して、様々な経験をすることができました。

「宮尾からのコメント」

私は、この活動で自分の経験を伝えられたと感じる一方で、自分の経験を言葉にすることの難しさを感じました。試行錯誤はしたものの、自分だけの感覚を相手に伝えることは難しく、グループに分かれて話す時間では自分の伝えたい事の半分程度しか伝えられなかったように感じました。最も伝えなかった「なんとかなる」という事は伝えられたと考えていますが、その一言だけでは留学前の一回生には具体的な事が伝わるはずもなく難しさを感じました。しかし、自分の経験を伝えるという貴重な経験をさせていただいた北村先生には感謝しかありません。

おわりに

今回、本稿を書くにあたって、改めて自分の留学経験やメンターとして実践した活動や行いを振り返る機会をいただいたことにより、留学メンターのもう一つの目的である「後輩をサポートするなど、メンターとしての一連の活動を通して、改めて自らの留学成果を振り返り、今後の自分の活動を考える」という目的を、この記事執筆する機会を設けていただいたことにより、改めて果たすことができました。

カナダの有機農家（WWOOF）での滞在体験

国際学部国際学科 2 年

学籍番号 22wa105

氏名 榎 れを

はじめに

本稿では、自らがアレンジしてファームステイのプログラムに参加した経験をもとに、まとめたレポートになります。これを書くにあたって、留学に行こうか迷っている人や、留学以外で海外の経験をしてみたいと思っている人に向けて、自分の体験をもとに、「ほかの学生に刺激を与えられたらいいな」と思い書くことになりました。本稿では、各トピックの説明をした後に、この体験を終えての感想や今後の展望を書きました。

行くきっかけ・経緯

今年の夏、僕はファームステイをしにカナダに行きました。1年生の今頃だと、海外に一人で行こうとは、まったく考えてもなく、海外に行くつもりもしていませんでした。しかし、昨年度平井先生の授業を受講しているときに、留学と違った、海外ボランティアの機会がたくさんあることを教えていただきました。それまでの知識では、海外のボランティアは青年海外協力隊ぐらいしか知りませんでした。そのことを知り、調べていくうちに自然と興味を持つようになっていました。

今回、平井先生もかつて体験したというWWOOFと呼ばれる世界の有機農業実践者のネットワークを通じて、カナダにファームステイに行くことを決めました。なぜ、学校が設けている留学や留学エージェントを使って留学に行かず、ボランティアで留学とはまた違う形で行ったのか疑問に思っている方が大半だと思います。それは、留学やエージェントを使っていってしまうと、どうしても日本人との関わりがあることや、自分の成長に繋がらないのでは、と考えていたからです。そのため、今回、日本人との関わりが少なく、英語だけでなく文化、価値観も学ぶことができる、有機農業ボランティアのWWOOFを利用しました。

現地で行ったこと

実際、現地では、ファームステイと言われるくらいなので、農家さんの下で野菜の収穫や、野菜作りに携わるのかなと思っていましたが、僕が選んだファームステイ先では、もちろん野菜の収穫なども行いましたが、ほとんどの内容が何か物を製作することがメインでした。実際に製作したものは、テントスポットや、薪を入れる小屋、花壇を作ったりしました。あとは、自給自足の生活、現地に各国から集まってくる人たちとの言語交流や文化交流をしました。

感じたこと

このような体験を経て感じたことは、突発的に「海外に行ってみよう」と思い行動に移したが、英語力もあまりない中での体験だったので言語の壁を感じる場面が多くありました。でも、現地の方やボランティアをしに来る人たちは、とても暖かく、英語を学ぶことができ、文化や考え方が大きく変化しました。

ネイティブスピーカーのようにならないと、あまり英語ができないと思われてしまう日本の現状です

が、現地のカナダや出会った方たちではそのようなことを気にすることはありませんでした。文法や発音は、普段の会話などでは「伝わることであれば、何の問題点もない」と助言を言っていただきました。そのおかげで、まずは単語力やリスニング力を鍛えていくべきだと気づくことができました。また、英語学習以外の視点では、行動力も身についたのではないかと思います。今までだと、あまり実行に移すことはなく、何においてもネガティブに考えていたが、今回の経験を経て、自らが動いて何か経験してみたいと思う気持ちがとても強くなりました。

そして、日本から出ることでほかの国の良さや、改めて日本はとても素晴らしい国なのだと、たくさんの人たちと関わって気づくことも出来ました。そして、もっと思うがままに生きてくべきなのだと思います。



実際に現地で出会ったボランティア仲間

おわりに

感想としては、改めて海外に行ったことのある人、ない人関わらずにもっと海外での生活をしてほしいと思いました。留学や旅行でもどのような形でも良いと思います。僕が言うのもおかしい話ですが、行動に移すことが大切だと思います。たくさんの考え方に出会えるので、ぜひ日本の殻を破って日本以外の国を体験してほしいです。また今後は、今回の体験だけではまだまだ物足りなかったのもう一度、長期期間中に挑戦してみたいと思います。

Koyasan Project & Study Tour

国際学部国際学科グローバルスタディーズ専攻1年

学籍番号 23WA044

氏名 HINDUPUR SRINIVAS GAUTAM (హిందూపూర్ శ్రీనివాస్ గౌతమ్)

As the year 2023 comes to an end, this particular year was filled with several memorable moments and experiences which most of us will cherish lifelong. With the great blessings of the revered saint Kobo Daishi and Shakyamuni, Oidai presented the foreign students with a wonderful opportunity in summer to be a language partner for the high school students and university students belonging to the Koyasan University, Kawachinagano Campus. This was followed up with a tour of the auspicious Mt. Koya in Wakayama Prefecture which created indelible memories and a learning experience unlike any other. This project and trip helped us personally grow and forge new bonds with students and gave us a window into the esoteric past of the country.

Koyasan Project

The Koyasan project was started as a joint initiative in the summer of 2023 (from August 28th to September 2nd) between Otemon Gakuin University and the Koyasan University. Matsumiya Sensei from the Department of International Studies was extremely kind in providing the foreign students with a paid internship as a speaking partner to help other students. The students were welcomed with open arms by the students and the faculty at Koyasan University Kawachinagano Campus. The campus, which was in a picturesque region of southeast Osaka, had a pleasant and calm environment which eased any stress prior to the arrival. The Oidai students took turns within the period to serve as English speaking partners.

This program which was taught by Matsumiya Sensei was geared towards helping the nearby high school students and the university students with their English skills which involved speaking, writing and presentation preparation. The primary goal of the program was to make friends, gain confidence and enjoy the language learning process. The students were first given a mock TOEIC test to help assess the shortcomings and gain confidence in one's strengths. The course also featured several tongue twisters and debate sessions based on Ablish articles. Although this seemed difficult for the students, the language partners put forth their best efforts to help assess and improve their confidence while expressing their opinions. Although the high school students spent only first two days of the program, they were rewarded for their efforts, and some have expressed interest in pursuing their English language journey. The university students were further aided with their writing and presentation skills. Throughout the course, Oidai students also received delicious organic bread and snacks. This entire course was focused with the goal of learning and practicing knowledge from an international perspective.

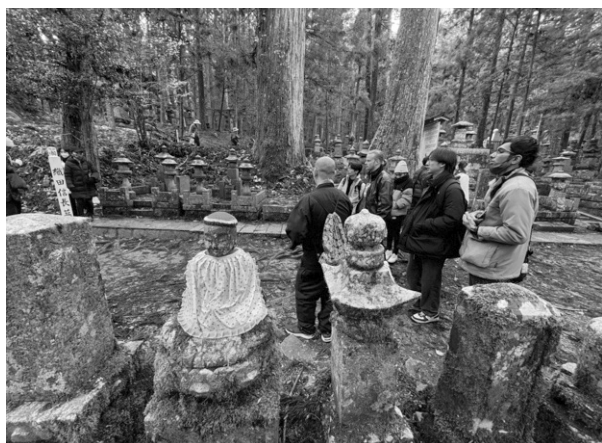
Overall, the program helped me to gain a new perspective on language learning and the idea of integrating this learning with others so that we can jointly win as opposed to doing it individually. Furthermore, it helped us forge new bonds and friendships.

Koyasan Trip

After the successful project, Koyasan University invited all the foreign students from the Department of International Studies to visit the sacred and holy Mt. Koya in Wakayama. This tour was not only a reward for the project but also a paramount learning experience for the students about Japanese culture, Buddhism and history. The tour which was held on November 19th covered Koyasan from Okunoin to Kongobuji. Throughout the entire trip, Mr. Nakayama, a student at Koyasan University and a monk in training played an indispensable role in sharing the significance of Koyasan and the culture that is embedded there. Although located quite far from downtown Osaka, the train ride through Nankai Koya line and the cable car ride to the mountain was extremely enchanting and captivating. It is known that Koyasan is considered as the most sacred spot in Japanese Buddhism and is home to the Shingon sect (an esoteric sect originating from ancient China with its base teachings from India). This sacred atmosphere can be felt upon arriving at the cable care station which features vibrations unlike elsewhere.

Upon meeting Matsumiya sensei and Mr. Nakamura, the students were given a guided tour starting with Okunoin. Located on the eastern end of Koyasan, Okunoin is the tomb of the revered saint Kobo Daishi (also known as Kukai) who was the founder of the Shingon sect. Okunoin also features that largest graveyard in Japan with the ashes of important personalities buried here. It was astonishing to note that the remains of the daimyo Oda Nobunaga and Toyotomi Hideyoshi are buried here. Okunoin deals with beliefs of life and death from Shingon perspective. The site features unique superstitious areas and teachings of life, death and the subsequent afterlife. Okunoin also surprisingly features unique tombstones dedicated to the founders and workers of corporations such as Nissan, UCC, Yakult which is quite unique to Japan.

After a delicious meal, the students were taken to Kongobuji and the main hall. Kongobuji being the head temple features scrolls featuring important saints, the various deities and Shakyamuni Buddha in his various avatars. Although Shingon has various teachings which might differ from other sects such as Pure Land Buddhism, the underlying principle remains that Buddha is in all of us and necessity to understand the concept of nirvana or enlightenment. The teachings of Shingon and Kukai which were based on Indian philosophies and Sanskrit scripts played a key role in lives of people during Heian period and continue to do so in the present day. The complex featured smaller temples and a holy tree which is said to be the mystical beginning of Koyasan. Several of us were blessed with good omen at the tree while searching for the holy branches nearby.



Throughout the entire tour, Mr. Nakamura's passionate and detailed explanation helped the students understand the relevance of Koyasan. The tour ended with a group photograph in front of the statue of Dr. B. R. Ambedkar at Koyasan University main campus. The statue was dedicated to the architect of Indian constitution and a torchbearer of equality in India whose philosophy was heavily influenced by Buddhism.

As we reflect, this tour had an unimaginable

impact as it offered a spiritual and a historical perspective into Japan. To understand Japan and the concept of glocalism, it is highly essential to understand philosophy, religion and culture which are dear to locals. This tour was eye opening and mesmerizing in ways unlike any other.

Reflection

The project helped me to understand various perspectives of language learning. Matsumiya Sensei's motto of learning and speaking in an intelligible manner as opposed to being perfect was something that stuck with me dearly. It is necessary for the students overcome the idea of perfectionism and understand that accents are not a handicap but one's identity. This project rewarded with me ideas on what I can do to become a bridge between India and Japan or Japan and the rest of the world. In terms of Koyasan trip, I strongly believe that Shakyamuni blessed all of us as the trip was rewarding in many ways. These cultural trips help create an image and perspective which may not be possible through books. Learning more about a particular place helps build a new sense of appreciation for the place. I am extremely thankful to Matsumiya Sensei for offering us this wonderful and authentic experience and acting as a pillar of support throughout the entire program. I want to thank Professor Obino, faculty and students at Koyasan University for welcoming us and taking part with us. I want to thank Mr. Nakamura for taking time out and passionately explaining Koyasan which helped us gain a new sense of appreciation for the place. I finally wish to personally thank my classmates for joining me in this beautiful journey and creating lifelong memories.

Based on learning outcomes and gained experiences, my advice to other students is to take part in such programs and not miss such opportunities offered by Oidai.



追手門学院大学国際文化学会会則

2022年5月19日

制定

(名 称)

第1条 本会は、国際文化学会と称し、英語名称をThe Society for International and Intercultural Studiesとする。

(目 的)

第2条 本会は、国際学部の研究と教育を促進し、「国際学」又は「国際学に関連する分野横断的な学問領域」のディシプリン形成とその発展に寄与することを目的とする。

(事務局)

第3条 本会の事務局は、追手門学院大学国際学部内に置く。

(事 業)

第4条 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 機関誌『国際文化研究』、KALEIDOSCOPEの発行
- (2) 大会、研究会、講演会の開催
- (3) その他、上記の目的を達成するために必要な事業

(会 員)

第5条 本会は、次のものを会員とする。

- (1) 本学国際学部及び国際教養学部国際教養学科の専任教員並びに退職した教員
- (2) 本学国際学部及び国際教養学部国際教養学科の学生並びに大学院現代社会文化研究科の大学院生
- (3) 本学卒業生で、入会を希望するもの
- (4) その他、学内外の所属を問わず入会を希望するもので、役員会の承認を受けたもの

(会員の権利)

第6条 本会の会員は、機関誌の配布を受けるとともに、これに執筆寄稿することができる。また、本会の行事に参加することができる。

(役 員)

第7条 本会の会員の互選により次の役員を置く。

- (1) 会 長 1名
- (2) 機関誌編集 2名
- (3) その他の役員、及び役員会についての詳細は別に定める。

(会 計)

第8条 本会の経費は、次の各号をもってあてる。

- (1) 追手門学院大学により配分された予算
- (2) 寄付金その他

2 本会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(運 営)

第9条 その他、本会の運営に必要なことは別に定める。

(会則の改廃)

第10条 この会則の改廃は、本会の議を経て、会長が決定する。

附 則

1 この会則は、2022年6月1日から施行する。

2 この会則に制定により、追手門学院大学英語文化学会会則（1991年4月1日制定）は2022年5月31日をもって廃止する。

編集後記

KALEIDOSCOPEは国際教養学部・国際学部で行われている様々な授業や教育プログラムを通じた学生の経験談を取り上げ、学部の目標や教育の現状、学生の学びを紹介する本学部の機関誌です。

今年度から国際学部ではさまざまな専門科目の授業が始まり、KALEIDOSCOPE本号では学部の目標を具現化する教育プログラムを紹介しています。学生が書いた経験談を読んで改めて感じるのは、彼らの中にある力強さや可能性です。これらは未来への希望を呼び起こします。KALEIDOSCOPEに掲載されている授業を含む教育実践は、学部と教員が抱く未来と若者への思いがこもった作品であり、学生とともに作り上げたものです。この記事を読まれる方々が、本学部での教育実践を通じた教員の思いや学生の力、そして未来への可能性を感じてくれたら嬉しく思います。

国際文化学会役員

会 長：藤川武海

機関紙編集：平井華代、石井竜馬、西原哲雄、Jacob Reed

KALEIDOSCOPE 第33号

2024年2月29日 印刷 - 非売品 -

2024年3月15日 発行

編集発行者 追手門学院大学国際文化学会

茨木市西安威2-1-15

国際教養学部国際教養学科・

国際学部国際学科資料室内

TEL (072) 641-9620

印刷所 川西軽印刷(株)

TEL (06) 6761-5768
